

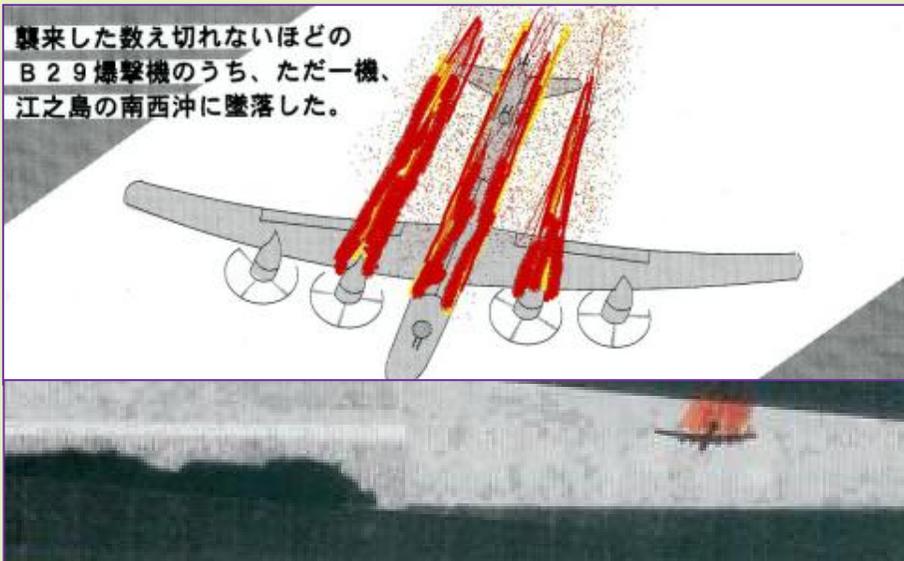
生島 沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

特別号



太平洋戦争 語り継ぐ戦中戦後の記憶

ことし令和2年は戦後75年
薄れゆく戦争の記憶を呼び戻す

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841）に、「鶴沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる

鶴沼を語る会 発行

太平洋戦争

語り継ぐ戦中戦後の記憶

令和2（2020）年は戦後75年、コロナ禍で終戦にまつわる行事は縮小され記憶も薄れてゆきます。しかし戦争の記憶は、この先も忘れずに語り継いでゆかねばなりません。

戦後60年・70年の節目の年に、鶴沼を語る会の会員が綴った後世に言い伝えたい思いが、会誌『鶴沼』第91号・111号に収められています。今回、戦争の記憶を忘れてはならないという思いで、これらの号をひとつにまとめてみました。

後世へ太平洋戦争の記憶を語り継ぐ材料として、皆さまのお役に立てれば幸いです。

令和2年8月15日
鶴沼を語る会

鶴沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 1 1 号

特集 戦後70年・・・終戦前後の記憶

写真で見る 終戦前後のふじさわ(2)

8月15日前後の思い出・・・青木悠(6) 終戦前後の鶴沼海岸のこと・・・有田裕一(8)

学童集団疎開と東南海地震の記憶・・・岡田哲明(10) 私の8月15日・・・河野顕子(12)

終戦前後における私の事件簿・・・小林政夫(13)

二度と見たくない“戦争”という化けもの・・・佐藤和子(17)

終戦の思い出・・・杉本辰夫(19) 70年前まで・・・宮澤彰(21)

ぼくの終戦前後・・・森岡澄(23) 戦後70年 食糧難時代・・・綿谷克延(26)

「戦後70年」今思う 終戦のころ・・・渡部かほり(27)

回想 太平洋戦争開戦の日から終戦の日迄・・・浅野君子(28)

As time goes by — どんなに時が経っても・・・内田進之助(32)

戦後70年に思う・・・熊坂兌子(33)

戦争のない平和な世界を願ってやまない・・・関根次郎(35)

終戦の日 — これから先は生きられる・・・榛葉敏行(36)

大切にしたい 70年前の記憶・・・西野行(37) 昭和20年の夏・・・西村望(38)

私の8月15日・・・長谷川祐(40)

戦争末期と戦後に体験したことのアラカルト・・・内藤喜嗣(41)

鶴沼海岸・終戦日前後のこと・・・山上英男(49) 銃後の守り・・・榛葉昭市(53)

◇

エッセー 消えたスマック有田 裕一.....55

美術探訪 ① 日本民藝館(東京・駒場)を訪ねて森岡 澄.....59

美術探訪 ② 清春白樺美術館と鶴沼岡田 哲明.....60

活動の記録(平成27年4月～9月)63

編集後記66

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鶴沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鶴沼を語る会 発行

特集 戦後 70 年・・・終戦前後の記憶

写真で見る 終戦前後のふじさわ		2
8月15日前後の思い出	青木 悠	6
終戦前後の鵜沼海岸のこと	有田 裕一	8
学童集団疎開と東南海地震の記憶	岡田 哲明	10
私の8月15日	河野 颯子	12
終戦前後における私の事件簿	小林 政夫	13
二度と見たくない“戦争”という化けもの	佐藤 和子	17
終戦の思い出	杉本 辰夫	19
70年前まで	宮澤 彰	21
ぼくの終戦前後	森岡 澄	23
戦後70年 食糧難時代	綿谷 克延	26
「戦後70年」今思う 終戦のころ	渡部 かほり	27
回想 太平洋戦争開戦の日から終戦の日迄	浅野 君子	28
As time goes by — どんなに時が経っても	内田 進之助	32
戦後70年に思う	熊坂 允子	33
戦争のない平和な世界を願ってやまない	関根 次郎	35
終戦の日 — これから先は生きられる	榛葉 敏行	36
大切にしたい 70年前の記憶	西野 行	37
昭和20年の夏	西村 望	38
私の8月15日	長谷川 祐	40
戦争末期と戦後に体験したことのアラカルト	内藤 喜嗣	41
鵜沼海岸・終戦日前後のこと	山上 英男	49
銃後の守り	榛葉 昭市	53
＜第112号より＞		
鵜沼の思い出	中島 誠之助	41

特集 戦後 70 年・・・終戦前後の記憶

戦後 60 年の 10 年前、会誌『鶴沼』第 91 号で「語り継ぐ戦中戦後の記憶」をテーマに大特集を組みました。

あれから 10 年、今号も終戦前後のことを後世に伝えるべく「戦後 70 年・・・終戦前後の記憶」をテーマに、54 ページにわたり特集しました。

写真で見る

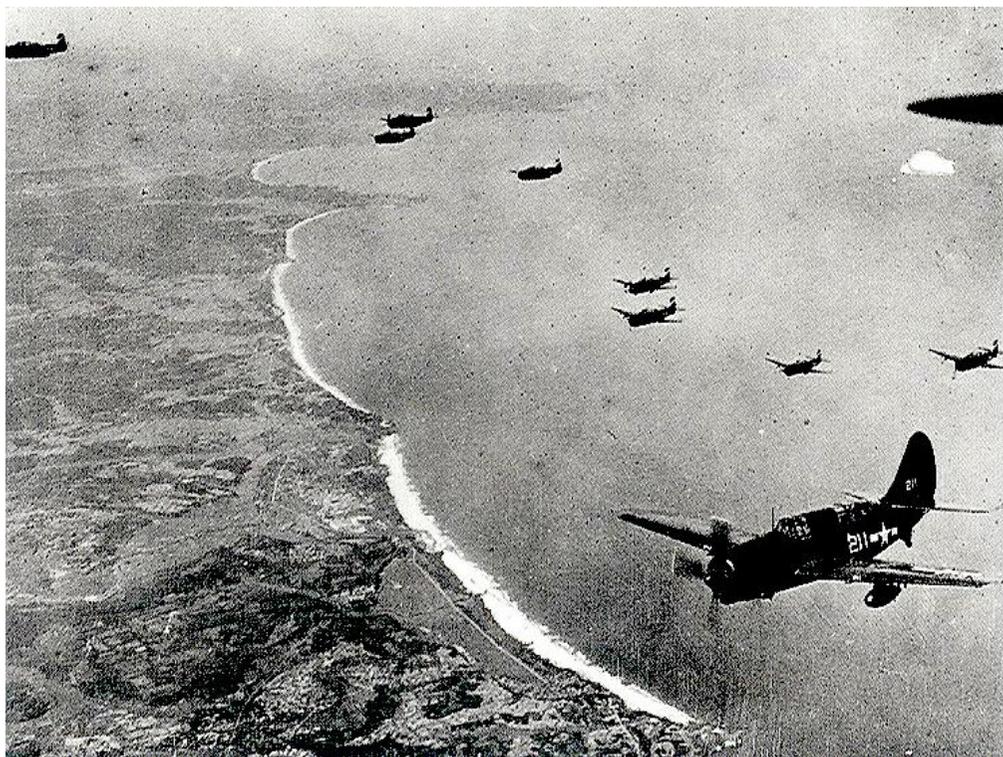
終戦前後のふじさわ

1941(昭和16)年12月8日に始まった太平洋戦争は1945(昭和20)年、最終局面を迎えていました。連日の空襲で人々の生活は厳しく苦しいものでした。1945年3月10日、数百機のB29が東京・横浜に無差別爆撃し一面の焼野原と化しました。

横浜はさらに5月29日、7月16日には湘南地方の平塚が爆撃の的となり、多くの犠牲者を出しました。米海軍艦載機は湘南地方にも飛来し、藤沢も機銃掃射による空襲を受けました。そして8月15日、5年近くに及ぶ戦争は終わりました。

もし戦争終結が遅れていれば、湘南海岸を主上陸地点に想定した「とどめの攻撃」がなされ、鶴沼、辻堂の海岸は「日本のノルマンディー」になっていたのです。それは「コロネット作戦」と呼ばれるもので、1946年3月1日発動予定だったそうです。

無条件降伏した日本は占領軍を受け入れ、鶴沼の洋館の多くが米軍人将校の住居として接收され、鶴沼には進駐軍の姿が多くなりました。そして、辻堂演習場は1959年6月に返還されるまで、占領軍にとって重要な演習地となったのです。



1) 関東地方に侵攻するカーチス・ヘルダイバー爆撃機

眼下は湘南海岸



2) 鶴沼海岸警防団による防空演習



3) 高木邸(現・高木ふれあい荘)前での訓練



4) バケツリレーによる消火訓練
鶴沼海岸 高木邸にて



5) 住友特殊製鋼(後の関東特殊製鋼)への空襲
1945年7月30日



6) 江の島沖を航行する米海軍戦艦
1945年8月28日



7) 相模湾一帯は米海軍の艦船に埋め尽くされた



8) 鶴沼海岸駅前の路上



9) 農家での勤労奉仕 麦叩きと小麦干し

1946年12月8日



10) 教科書から軍国主義の抹殺 墨で塗りつぶされ読むところなくなった 1946年3月



11) 新教育制度実施 藤沢小学校授業参観日

1947年6月7日



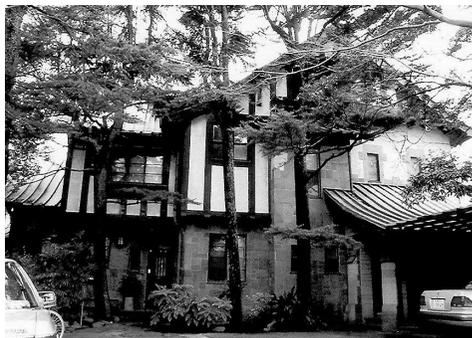
12) ビール瓶で米つき 1946年2月



13) 江の島西浦に設置された砲台



14) 旧海岸通り、通称大曲近くの小田急線踏切の表示は英語になっている



15) 米軍将校の居住のため洋館は接収された



16) 辻堂演習場 米軍が日本軍の弾薬処理をしたときに立てられた看板



17) 朝鮮戦争さなか湘南海岸での米軍演習 1950年

米軍は1946年9月、日本海軍辻堂演習場を接収。

1952年の対日平和条約発効により日本は独立を回復したが、辻堂演習場は米軍にとって魅力ある演習地で返還されなかった。上陸、砲撃、爆破等の演習が実施され、漁業などの産業、自然、市民生活に多大な影響を及ぼした。粘り強い返還運動の甲斐あって、1959年6月に接収解除となった。

出典：資料・写真 1) 5) 6) 「FUJISAWA 1945-1959 — アメリカ軍の見た藤沢 — 」

写真 9) 10) 11) 12) 影山光洋撮影 影山写真事務所提供

写真 2) 3) 4) 7) 8) 14) 15) 17) 鶴沼郷土資料展示室提供

写真 13) 立田公雄撮影 鶴沼郷土資料展示室提供

写真 16) 福地誠一撮影

《 写真構成・文責：竹内広弥 》

8月15日前後の思い出

青木 悠（会員）

15日のことを書くように言われたが、あまり思い出したくないのと当時の記憶も70年経つと薄れて正確性に欠けることや断片的である事を許して欲しい。

8月15日、私は静岡の航空機の工場に学徒勤労動員で派遣されていた。工場は既に地下に移され地上の工場は静岡空襲で焼け野原になっていた。近くにあった工場の寮でその日を迎えた。重大な放送が正午にあるので寮の前に集まるよう指示があった。玉音放送があるとの噂が流れてきた。何事だろうと密かに友人と話し合った。6日に広島、続いて9日長崎に原子爆弾が落とされたことは聞かされていたが一般には当時は大型爆弾と報道されていた。前日東京から帰ってきた友人が『日比谷で開かれる予定の某政治団体の大会が中止になった、何か事がありそうだ』と話してくれた。当時の私達には明日の日はなかった。枕を抱えて向こうから走ってくるリヤカーの前に飛び込む訓練をさせられた。これはリヤカーを敵の戦車と見立て枕は地雷で身を投げうって敵を防ぐためである。

玉音放送を拝聴するために集まった同窓生の間には、きっと一億総玉砕を覚悟しろと云うお言葉ではないかと想像した者もいた。

12時、玉音放送が始まり敗戦のお言葉に土下座をする者、号泣する者、人様々であった。私自身はただ呆然としていた。死を覚悟していた世界から何も見えなくなったようだった記憶がある。

寮に戻り学友と今後の日本について話合ったような気がする。夕食の時間になり電灯を覆っていた風呂敷が取れて、明々とした灯りに皆の顔がホットした表情であった。その電灯の下で、今までの空気と違った賑やかな雰囲気夜に夜にふけるのも忘れて話し合っていた。その時、突然空襲警報のサイレンが鳴ったが、もう誰も明かりを消そうとはしなかった。

当日の鶴沼の家族の様子をのちに妹に聞くと両親と妹の3人で玉音放送を家で聞いたそうだ。海外生活が長かった両親は「これからは広い世界観を持つこと、外国語をしっかり学べ」と言われたという。その夜の明かりは、やはり明るく警報も無く静かな夜であったとのことである。

16日は動員が解除され虚ろな気持ちで部屋でゴロゴロしていた。ぼんやり将来のことを模索していたと思う。17日になって学校から直ちに帰宅して次の指示を

待つように言われ夕刻鵜沼に戻った。

母は疎開の荷物を整理のため尾道の向島に行ったので手伝うように父に言われその日の夜行列車で尾道に向かった。当時は汽車の切符は販売制限があり、なかなか手に入りにくかったが友人の父が手配してくれて尾道までの2等往復乗車券2枚を入手してあった。母が既に一枚使用していたので残りの一枚で列車に乗った。当時は今のグリーン車に当たるのが2等車で普通席は3等車である。列車内は復員兵で溢れていた。駅に着く度に乗車口は人が殺到して乗降ができず、窓から乗り降りする始末であった。車内の通路は云うまでもなく座席の下にまで潜り込むほどの大混雑であった。18日朝尾道に着いたが周囲の空気は広島原爆とは無縁のように落ち着いた感じであった。

渡し舟で向島に渡り山を越えて伯父の家に着き母の手伝いをし19日、母と共に鵜沼に帰った。

次の日、朝海岸に出てみると藤沢・厚木基地を飛び立った日本の戦闘機が海上を乱舞していた。複雑な気持ちで見ていたような気がする。

日付が明確ではないが25日前後再び海岸に行くと相模湾一帯はアメリカの軍艦や輸送船、上陸用舟艇で埋め尽くされ、振り返ると片瀬の山頂には巨大な白旗が掲げられていた。この時初めて敗戦を身を感じた。

小学生の頃アメリカで生活していたので日米の国力差が大きかった印象があり負けるのが当然のようにも感じた。今の鵜沼の平和な姿は当時では想像もできなかった。

現在の平和な鵜沼はいつまで続くか不安な気持ちである。いくら日本が平和を唱えても他国は信頼できない。

例えば当時のソ連の参戦である。日ソ不可侵条約が結ばれているさなか、日本が戦争を終結するための仲介をソ連に依頼していたにも関わらず突如交戦してきた。北海道を領有するためと聞いている。幸いに北海道は日本に残ったが今でも北方4島は戦利品と称し開発をすすめ、その他尖閣諸島や竹島の問題もある。

安保問題の賛否は平和を維持するためにどちらが正しいのか相手の出方次第でその事態が来るまで解らないと思う。

(あおき ゆう)

終戦前後の鵠沼海岸のこと

有田 裕一（会員）

1945(昭和20)年8月、私は小学校2年生であった。この年令だと終戦前後の記憶はもっとあっても良いと思うのだが、前回、特集号(91号)に書いた以外、あまり恐怖心もなく、ふつうの子供時代を過ごしたと思う。

といっても、今回の特集で何かを記録することになったので、短い文であるが、いくつかを列挙してみよう。

まず、8月15日の玉音放送。この時代全ての家庭にラジオがあったわけではないが、我が家の店の一角は地元警防団の詰所になっていたのも、ラジオがあったし、電話もあった。毎日のように詰所に集合した人の氏名を、どこかに連絡していた声が今も残る。8月15日はそのラジオではなく、店の斜め前にラジオ店があり、ラジオを店先に出していた。大事な放送があるから家の者も近所の人達もその前に集り、皆で聞いた風景をおぼえている。私は子供なので、そこが見える家の玄関先で聞いた。だが、正直なところあまり内容が理解できなかった。

8月下旬の相模湾への米国艦船の集結で沖が真っ黒になったといわれる風景も見えていない。この時とか空襲の時とか、我が家では父も母もきびしく、外に出ることは禁止され、危険な状況は経験することが出来なかった。

終戦の後、鵠沼海岸や、今の松が岡の大きな別荘(洋館)が接収され、その門には黄色いペンキでF-3とかF-5とか塗られ、アメリカ人の将校家族が住みはじめた。このような建物が10軒位に達したと思う。

それも、それらの家の持主の家族は通知から1週間位で立退きを余儀なくされたようである。

そして海岸の砂浜にはジープが出入りし、アメリカ人がレジャーを楽しむ風景が見られた。当時甘いものは皆無で、甘いもの、香りの良いもの(ガソリンの臭いを含めて)を子供達は求めていた。ジープのまわりに行き、ガムとかチョコをねだったものである。又、その頃は日本にまだ無かった缶ビールの空き缶を拾う

ことも遊びの一つで、これも香りの良いものであった。

終戦から少し経ってからだと思うが、普段遊んでいる近所の悪童と一緒に片瀬山へ行った。目的は火薬の導火線をとりに行くことで、この細い火薬に火をつけて燃えるのを楽しんだ。この片瀬山の洞窟の中には、まだ金色に光っている砲弾が並んでいた。普段の遊びでも、小銃の空薬きょうや、後でわかったが、電波妨害用の細長い銀紙のテープが海岸に落ちているのを拾ったり、今思えば子供の遊びも危険なものに囲まれていたものである。

さて、終戦になる前だが、日本では金属が不足、鍋、釜は勿論貴金属とか供出しなければいけない時世となった。昭和 18 年頃には近くを通る小田急線の江ノ島方面への下り線の線路が供出され、単線になった。その跡地の広場と、線路わきの溝には、虫や、時にはどじょうなどの小魚の居る、良い遊び場であった。

又、私の店から 50m 位東側、郵便局前にあった鉄骨の火の見やぐらも供出の運命になった。火の見はその後さらに 50m 位先の浜野牛乳店の前の木造 2 階建、消防自動車小屋の屋上に、物干台のような火の見台を設けたが、もう半鐘はなかった。その角を海側へ曲り、袋小路の右側に、南海岸の会館(クラブと云っていた)があり、庭には昭和 12 年新調した南海岸の神輿が倉庫に納っていた。

空襲がひどくなると、登校出来なくなり、そのクラブで 5、6 年の上級生が自習の面倒を見てくれていた。

その消防小屋とクラブとの間に中島(白川)誠之助が住んでいて、色白のおとなしい少年だった。

通常の登校は竿に隊名を書いた旗をたて、上級生が先頭の二列縦隊で、第三小学校(現在の鵜沼小学校)に列をくずさず進み、当時は学校の南側あった正門に入る時は歩調を合わせ「南海岸第何班」とか号令をかけ、入って左側にあった奉安殿に敬礼して進んだものである。そのような戦時中の学校生活も 1 年と一寸で平和な時代になり、その 1 年後、昭和 21 年 8 月、熊倉通り北側に鵜洋小学校が開校し、校庭の真中に、さつまいもや麦の畑の残る中、海岸方面の生徒は集団で転校、暑い砂の上で開校式を迎えた。

(ありた ひろかず)

学童集団疎開と東南海大地震の記憶

岡田 哲明（会員）

戦局が怪しくなってきた昭和 18(1943)年 7 月、文部省は「学童の縁故疎開促進」という通達を出す。翌年 3 月、政府は「一般疎開促進要綱」を、6 月に「学童疎開促進要綱」を閣議決定、7 月には「学童集団疎開実施地区として東京区部、横浜、川崎、横須賀、名古屋、大阪、神戸、尼崎、門司、小倉、戸畑、若松、八幡」の 13 都市を指定した。学童集団疎開とは縁故による疎開先のない学童を学校単位で都市部から退避させる方策である。8 月 5 日に東京第 1 陣が実施され 9 月末までに福岡県の 5 都市を除く 8 都市の国民学校 3～6 年生 41 万 1360 人が周辺県に学童集団疎開した。その受入れに寺院、旅館など 7000 か所が当てられたという。

この 41 万 1360 人のうちの一人としての体験を記そうと思う。

私は昭和 19(1944)年 8 月 5 日、名古屋市立大成国民学校 5 年生のとき、三重県桑名郡多度村（現：桑名市多度町）に集団疎開した。名古屋の第 1 陣も東京と同じ日だったわけだ。このとき大成国民学校の 3～6 年の生徒 212 名は、受入れ先の多度村 2 旅館、隣の七取村 2 寺院に分宿になった。この場所は養老山地の南端、多度山の麓にあたり、少し東へ行けば三重県と愛知県を分つ揖斐、長良、木曾川が並流する地点で、名古屋から西へ 20 km ほどである。

標高 400m の多度山頂には軍の電波探知基地があり、潮岬上空から四日市、名古屋方面への空爆ルート上であったから、敵機は通るたびに受信攪乱のためアルミ箔のリボンの束をいくつも空中に落とす。太陽光を受けキラキラと降って来るそのさらに上空を、B29 爆撃機の編隊が悠々と通過するのを何度も見かけた。

個人の持ち物はリュックか風呂敷包に学用品を入れ、着替えなどの柳行李 1 個と寝具一式。授業は地元の国民学校の校舎を借り、地元の児童とは時間帯を分けて行われた。集団生活が始まって 1 ヶ月もしないうちに虱と蚤が蔓延した。衣服の縫目を返すと虱の卵がびっしり並んでいる。卵には独特の光沢があって、死んだ卵も光沢を失わない。血を一杯吸ってラグビーボールのようになった成虫は火鉢に空缶をかけ、メンソレータムを溶かした中で釜茹での刑にして遊んだ。

蚤は布団部屋に入るとあっという間に両脛に飛びついて来るのが衝撃でわかるほど、就寝中に手探りで捕まえるのは容易で、夢うつつにも爪で潰せた。

私たちの衣服は大釜で煮沸し、虱蚤を死滅させようとするが奴らもしぶといか

ら絶滅できない。頭がくらくらするほどの除虫菊の粉を量を上げて散布するが、効果はあまりなかったから、戦後、DDTの殺虫力にはびっくりした。

食事は、はじめは比較的良好であったが、だんだん悪化して翌年春6年生が卒業したあと七取村の寺に移ってからは、悲惨な状況になった。主食は芋か褐色の小麦を丸のまま、わずかの米と一緒に炊いたものだが、小麦の殻は炊いても破けない。それを食べるから、消化不良を起こす。汲み取り便所で上から覗くと小麦粒がそのままである。当時全員下痢状態だった。おかずは何があったらうか、つけもの、味噌汁以外に思い出せない。空腹のあまりミカン山に侵入し、まだ青い酸っぱいだけのミカンを盗み食いしたこともある。

イジメもあった。コックリさんという割り箸を3本コの字型に持った二人が向き合い、先端どうしを突き合わせコックリさんコックリさん…と呪文を唱える。箸の形が六角になるか、つづみ型になるかで占う。物が紛失すると誰かがそれで犯人にされてしまう。四六時中共同生活だからイジメにあっても逃げ場はない。

この疎開経験は、私には辛い思いだけだったが、我が校の場合はまだマシな方だったと思う。集団学童疎開は環境や待遇に大きな差異があり、もっと悲惨な例が多々あったと後に知ったからだ。学んだのは“堪えること”のみである。

東京大空襲の2日後の昭和20(1945)年3月12日、名古屋大空襲。その晩、東の方角をみると夜空が赤々と染まり名古屋市内が爆撃されているらしいと先生から聞いた。焼夷弾爆撃で生家も市内も全焼し、結核だった長兄(15歳)は防空壕内で焼死した。戦没者とは戦地で死んだ兵士ばかりをいうのではない、兄もその一人だ。焼け出された家族は岐阜の親戚に身を寄せ、やがて終戦。宿舎の寺の本堂前に整列して玉音放送を聞いた。——何の感慨も湧かなかった。

9月も半ばを過ぎて母が引き取りに来て、私の疎開生活は終わった。

疎開中に経験したもう一つに触れたい。それは東南海大地震に遭遇したことである。この地震は昭和19(1944)年12月7日13時に発生。のちの資料によると、地震のエネルギーはM7.9(関東大震災級)、多度村のあたりは震度6弱であった。

翌日が開戦記念日(大詔奉戴日といった)で軍部が報道規制したので殆どの新聞は不掲載、載せてもベタ記事であったから知らない人が多いのも無理はない。

私は多度国民学校の木造2階の教室で授業中だった。大きな揺れに直ちに廊下へ出ると防火用水の水が大部分外に溢れた。揺れが収まってから宿舎へ戻ったが壁には大きな亀裂、私の行李は壁土にまみれ庭の石灯籠はすべて倒れていた。

(おかだ てつあき)

私の8月15日

河野 顕子（会員）

私は、横須賀で生まれ育ちました。横須賀は海軍の町として発展し、現在でも海軍施設の主要なところは米軍が使用し、海上自衛隊と共に日本の防衛の前線基地となっています。

昭和20年のあのころは、毎日朝に晩に警戒警報や空襲警報が鳴り響き、防空壕に出たり入ったりしましたが、爆撃を受けたことはありませんでした。

それでも父は家族のことを心配し、横須賀の相模湾沿いの秋谷に疎開し、小学校も大楠小学校に入学しました。20年の4月入学ですから、毎日警戒警報が発令され、そのたびに低学年の子どもは家に帰され、授業の記憶はまったくありません。学校から家までの道のりの辛かったことが思い出です。

そして夏休みになり8月15日を迎えます。この日の午前中、陸軍の兵隊さん二人が我が家に来られました。それは我が家の庭に、乗用車がありそれを没収するつもりで見に来られたのです。父が衆議院議員（終戦時）だったので車があったのだと思いますが、運転手さんは出征していましたし、ガソリンがないので走れず放置されていました。父が立ち会い見終ってから父が客間に兵隊さんをお通しし、今日正午の玉音放送を聞いてから帰られたらとすすめ、家族と一緒にラジオを囲みました。

放送が始まり一同起立していました。そのうち兵隊さんがこらえきれなくなったのでしょう。肩を震わせ嗚咽し、最後は号泣しその姿に私達子どもはどうしてよいかわからず立ち尽くしていました。

放送が終わるとすぐに私達子どもはその場から退席させられ、しばらくして帰って行かれました。

その後父から日本が敗けたこと、これからみんなで新しい国をつくらなければいけないことなど話がありました。

一民間人の家に陸軍の軍服を着た兵隊さんが来て、歴史の一大転換点となる玉音放送をきくという場面・・・あの兵隊さんはその後どうされたか全くわかりませんが、女・子どもの目もはばからず流したあの涙の思いはいかばかりかと今も8月15日を迎えると思い出すのです。

（こうの あきこ）

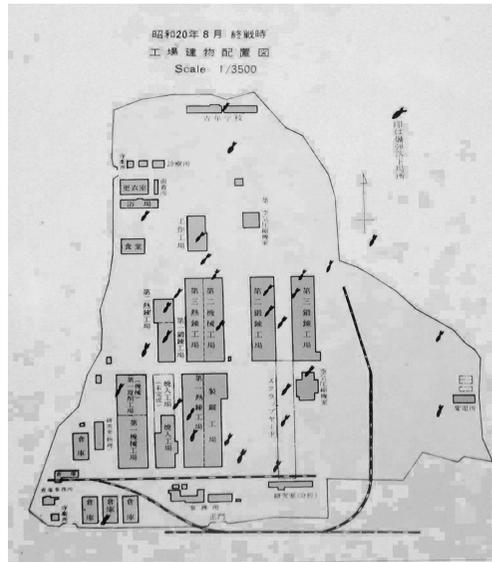
終戦前後における私の事件簿

小林 政夫（会員）

「鴫沼」第91号の語り継ぐ戦中戦後の記憶に書かせてもらった様に、最後の東京空襲で杉並の家も被災、家族全員が茅ヶ崎に疎開していた。その頃の様々な事件の記憶は、今では殆んど薄れ、細部の記憶に思い違い等あると思うが、頭に浮かんだ記憶を書いてみた。

その1. 住友特殊製鋼工場の艦載機の空襲と機銃掃射を受けたこと

終戦の半月前の昭和20年(1945)7月30日、辻堂駅北側にあった住友特殊製鋼(後の関東特殊製鋼)が空母から飛来した爆撃機・戦闘機約40機の空襲を受け、工場は壊滅的な打撃を受けた。その日の朝、8時頃だったと思う、急用で茅ヶ崎駅近くにお使いに行き帰りがけに空襲警報の発令があり、すぐに艦載機の飛来を見た。当時はまだ東海道の両側に松の大木がかなり残っていた。しかし、松根油の採取のために切り取られ根のみが残る場所も目立つ様な状況になっていた。木の陰などを選びながら来る後ろから爆音が聞こえた様な気がしたので振り向くと艦載機が超低空で飛来してきた。



爆撃を受けた工場の位置

危ないと思いとっさに一本の太い松の木に隠れたが、機銃掃射の音はあとから聞こえた。銃弾は松の木をはずれ、東海道の砂利部分に砂煙をあげた(当時、茅ヶ崎附近の国道1号線は、中心部のみ舗装で両端の部分は未舗装)。警報発令中であり、東海道に人影はなかった様だったが、私の50m程後に、牛車を引いた人がいて、やはり松の木の陰に隠れ牛も人も被害をまぬかれた。

隠れた松大木の枝の間から、右に旋回しながら上昇する艦載機の操縦席と赤いマフラーがちらと見えた。攻撃はその時だけで飛行機は藤沢方面に飛び去った。1機のみ攻撃で助かった。急いで我が家に駆け込み防空壕に飛び込んだが、東



弾痕の残る給水塔

1991. 4. 30 撮影

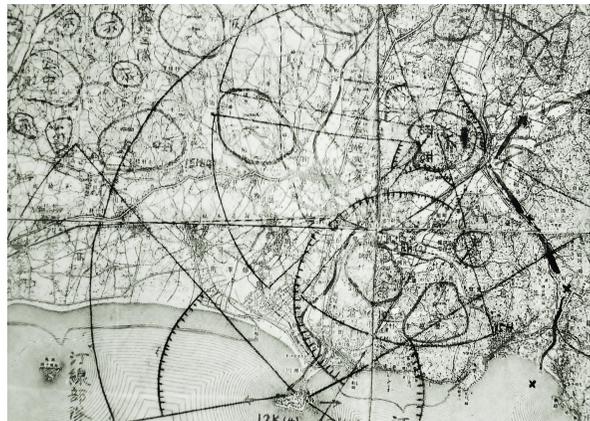
の辻堂の方で爆発音が聞こえ、防空壕の入口から空を覗くとアメリカの艦載機の飛び回るのが見えた。その時は、辻堂駅前の住友特殊製鋼の工場が攻撃されていることはわからなかった。その翌日、列車で辻堂駅を通ったが、ひどい被害を受けた様には見えなかった。(もっとも当時の列車の混雑は激しいもので、窓から乗り込んだり、電気機関車の前後のデッキに乗ったりしたこともある様な状態だったので周りを見る余裕など無かった。乗っているだけで精一杯であった)。

被害の内容は後から工員の人から詳しく聞くことができた。

その2. 身近に見た軍隊

昭和20年7月頃、藤沢・辻堂・茅ヶ崎に陸軍の部隊が防衛のために北側の台地に陣地構築のために駐屯。隣の農家も数人の兵士の宿舎になった。ある日の夕方防衛の勤務から帰ってきた兵士の様子を垣間見る事があったが、座敷に上がる若い上官が敷居に腰かけ、土間に差し出した両足の靴とゲートルを年上の兵隊(召集された者か)に脱がさせ、足まで洗わせていた。軍隊では、上官や古参兵が威張っているという話は聞いていたが、このような光景を目にしたのは初めてで、ひどく嫌な感じになったことをおぼえている。

また、終戦の翌日の8月16日の朝、厚木基地を飛び立ったと思われる戦闘機「鍾馗」が終



防衛陣地の分布図

戦反対・徹底抗戦のビラを撒いたのを記憶している。敵機が来ている時は飛ばないで、敗戦になってから飛んでも仕方ないと思ってビラは捨てた。日本の軍隊の中身の様子が見えた様な気がした。終戦で一番嬉しかったのは、灯火管制がなくなり明るい電灯の下で本が読めるようになった事だ。

終戦後の出来事

その1. 米兵に追われた若い女性

8月30日マッカーサーが厚木基地に到着、横浜に向かい、米兵の進駐がはじまった。藤沢では、藤沢航空隊あとに米兵部隊が進駐した。それ以前、若い婦女子は、米兵の進駐前に県外に逃げろという伝達が流れた。

その心配が我が家にふりかかった。日時は不明(自分が家に居たので日曜日だったと思われる)。家の裏口から若い女性が我が家に飛び込んできた。米兵に追われていると言ったので、靴のまま上がらせトイレに隠した。米兵のジープが東海道に止まり、米兵が家に入って来て入り口の外にいた私に「女が来ただろう」と言った。もちろん「No」。狭い家の中を覗き込んだが、その時体の具合が悪く臥せていた母親が、布団の上におきあがっていた。

米兵も家の中を覗いて若い女の人が見えないので、何か英語でわめきながら外の東海道にとめてあったジープに乗り、茅ヶ崎方面へ走り去った。それを見極めてから、トイレから出し、車の通れない裏口からの道を教えて帰らせたが、よほど動転していたのか、お礼も言わずに立ち去った。

その2. 辻堂駅 火薬爆発事故

米軍は辻堂海軍演習場(現在の辻堂海浜公園)において旧日本軍の火薬を処理するため池子の火薬庫から貨車で辻堂駅まで運び、海岸で処理を行っていた。

爆破処理のため、爆破の音響と振動に加え海岸近くでは、爆風による被害も多かった。爆破処理は、朝から夕方ちかくまで続き、列車の窓から爆発の音や入道雲の様な白煙が眺められることが多かった。

多分、一般の人々も火薬の運搬経路については知らされていなかったと思われる。その状況の中で、辻堂駅での火薬爆発事故が起こった。事故発生直後に現場で見た経験を思い出して書く。

爆発が起こったのは、昭和20(1945)年12月18日、午前7時15分。

その日、通学のため茅ヶ崎市の菱沼の家を出ると、すぐに辻堂方面から爆発音が聞こえた。何かと思わずすぐに近くの踏切までかけていった。辻堂方面を望むともものすごく濃い灰色の煙が入道雲のように立ち上っていた。その時はなにごとが起こったのかわからなかったが、再び爆発があった。その状況を家に伝え、辻堂の駅のすぐそばに親戚の家があるので、線路の脇を駆けて辻堂駅にむかった。

駅に近づくと人々が、「火薬の爆発だ」と騒いでいた。私が現場についたのは、

爆発から約 30 分程後だったと思う。近所の人々が駆け回っていて、何が起こったのか被害の様子を聞くことも出来なかった。

辻堂駅前でわたしの目に入ったのは、駅ホームの藤沢よりにやや離れた位置に炭水車側が大きくひしゃげた SL とつぶれた貨車の姿であった。線路に沿った駅南側の家が数軒つぶれて燃えていた。

当時、駅前から藤沢寄りの大踏切までの道の線路家並みは、強制疎開により住居や店舗は取り払われたままで終戦後も復旧していなかった。そのため南側の商店街の家屋は直接爆風や火炎にさらされてしまった。もし疎開が行われていなかったら線路にそった北側は大きな被害を被ったことであろう。

駅の南側商店街の裏には砂丘がひろがり駅前の道路よりも 5m ほど高く、そこに建てられていた住宅にも火災が起きていた。駅の北側でも倉庫がもえていた。

安否を尋ねに向かった親戚の家は、駅から 100m ほど南にあり被害はなかった。そこで初めて火薬の爆発である事を聞いた。ある人は、火薬をつんだ貨車の突き放しの衝撃で爆発が起こったと大声で叫んでいた。

帰ろうとした時、「爆発するぞ」と叫びながら男の人が逃げてきたので、駅前に居た大勢の人達と一緒に海側、駅と反対方向に逃げたが、爆発はなかった。

すぐに家へ戻り状況を報告したが東海道線は不通、学校は休まざるをえなかった。辻堂は、当時我が家の生活商圏ではなかったのどこにどんな商店があったのかはわからなかった。ふたたび被害状況を見にゆくことはなかった。

この事件の四か月後に復員してきた、後の明治市民センター長落合久夫氏は、事件について関係者から聞き取りを行い著書「辻堂のあゆみ」に詳しく記載している。この事件での死亡者 8 名・重傷者 6 名。全焼 9 棟だった様だ。

(こばやし まさお)

参考文献

F U J I S A W A 1945-1959 —アメリカ軍の見た藤沢—

1999 年 3 月 藤沢市教育委員会・博物館建設準備担当 発行
市民が語る十五年戦争

2000 年 3 月 藤沢市教育委員会・博物館建設準備担当 発行
落合久夫著 「辻堂のあゆみ」昭和 49 年 3 月 発行 非 売 品
給水塔以外の写真・図版は、「アメリカ軍の見た藤沢」から引用

二度と見たくない“戦争”という化けもの

佐藤 和子（会員）

おしろい花があちこちに咲いている。あの8月15日、大人達は「ラジオで大事な話がある」といって家の中に。庭先で遊んでいた私は、走って来た子が「日本は負けたんだって…」と言うのを聞いた。一必ず神風が吹く、敵の軍艦は沈む一と信じ、何もかも我慢していた軍国少女。その時咲いていたおしろい花の紅色がずっと目に残り、今でもその花を見るとあの日を思い出す。

昭和19年、国民学校3年生だった私は東京に住み、「欲しがりません、勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」と書かれた立看板を見ながらよく頑張っていたと思う。空襲警報が度々出るようになり、道路向いの家々が火災の延焼をくい止めるため強制疎開ということで取り壊されていった。京子ちゃんの家も、良ちゃんの家も光っちゃんの家も…。会いたいなあ。

麻布の家は大使館なども近く、母は「絶対に爆弾は落されないから大丈夫」と言っていた。が、空襲警報が鳴り夜空に敵機を探すサーチライトの筋が交じり合いながらも高射砲の弾は届かず爆弾が落される。焼夷弾という名も忘れられない。空中でバラバラとなり赤い火の玉が一斉に落ちて来る。油でできているとかで、あちこちで火の手が上がった。集団登校途中、キーンという音と共に飛行機がすぐ近くまで降りて来て機銃掃射を受けたが、道端の家から人が飛び出して来て、防空壕に引きずり込んでくれたこともあった。あの音も耳から消えることはない。

やはり危険だということで、12月末、遠い知り合いを頼って福井県の雪深い町に疎開、上野駅でも空襲にあい、手荷物も捨てたりして上野の山へ逃げた。送り出した荷物も汐留駅で焼失。学校へ行くにも雪の中を歩く長靴も無く、母がどこからか調達してきた地下足袋にワラを巻いて学校に行ったものの帰りは一人で履けず、クレヨンなどの学用品も無く、私は今でいう登校拒否児童になっていた。まだ年若かった母はとうとう我慢できなくなったのか、鶴沼で人に貸していた家が空いたと聞くと、やっと手に入れた切符で、途中数回の空襲にあいながら10歳と3歳の子を連れて上野駅に降り立った。唯一の貴重品だった貴金属類も混雑する列車の中で拘られ、子ども心にもとっても辛かった思い出だ。鶴沼の家に辿り着いたのが8月3日、まだ戦争は終わっていない。

私が2～3歳頃住んでいた鶴沼の家の記憶はほとんど無く、ただ戻って来た家

は荒れ果て、ボサ堀(細い寒竹を集め堀に、鵠沼ではよく見られていた)はボロボロ。これはもう間もなく、「20日過ぎには藤沢も爆撃される」ということで一どうせ焼けるのだから一と父が焚き付けに使っていたからとか。ただ庭のザクロやいちじくなどおいしかったことを覚えている。

8月15日終戦。空爆の怖れは無くなったものの、食べ物を得るのが大変だ。母の僅かな着物をもって食べ物と換えてもらいに買出しに。今思うと六会や長後のあたりではなかったかと思う。やっと手に入れた野菜、中でもトマトは忘れられない。サツマ芋の茎も大事に食べた。鵠沼の農家で分けてもらったサツマ芋は「太白(タイハク)」といって、白くてホクホクしたおいしいお芋だったが、近頃では見かけないようだ。

龍口寺の前の通りを行く進駐軍のジープに出合ったことがあった。子どもたちが「ギブミーチョコレート」と手を出していたが「食べたい!!」と思いながらもつい一寸前まで一鬼畜米英一と口にし、あのおそろしい空襲を体験した少女としては、どうしても手が出なかった。

あれから70年。

10歳だった少女も80歳を迎えるが、今戦争だけは絶対に「NO」という強い気持はあの頃の様々な土台があったからだ。

7月29日、朝日新聞朝刊に「戦争孤児の70年」という特集が載っていた。あの戦争中、学童疎開などで親と離れている間、親達が爆撃等によって命を奪われたり、様々な事情で孤児となった子どもたちが生きて行くにはどんなに辛いことだったろうか。「孤児の多くは一度は死を考えた」とあったが、私も知り合いに、学童疎開中3月10日の東京大空襲で両親を失い、その後親類などの家を転々とした同い年の男の子がいた。度々住所が変わるので戸惑ったこともあったが、何とか頑張ったものの18歳の夏、房総の小さな灯台の下で自死を選んでしまった。恵まれた家庭に育ちながら3年生で両親と死別、その後のことを思うと涙が止まらない。

♪♪緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台

鐘が鳴りますキンコンカン 鳴るなる鐘は父母の
元気でいろよという声よ 口笛吹いて俺らは元氣

(さとう かずこ)

終戦の思い出

杉本 辰夫(会員)

8月15日、終戦の日は兵庫県・西宮で迎えた。当時18歳、芦屋中学に在籍し学徒動員で川西航空機（新明和工業の前身）に行かされていた。

この日、風邪気味で自室で寝ていると、NHKラジオは朝7時半頃から、重大放送があると一時間おきぐらいに流していた。重大放送の内容は何かなと思っていましたが、11時半ごろそれは玉音放送ということが分かり、天皇陛下が話されるのだから「玉碎するから皆、覚悟しろ」ということかなと思った。

「朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ 非常ノ措置ヲモツテ時局
ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク
朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨
通告セシメタリ」

静かな自室で聴いていたせいか、ラジオの音はよく聞き取れた。はじめて聞く天皇の声、独特な発声とイントネーションというのが第一印象として残っている。聴いていて、戦争をやめるということを言っているのは理解できたが、負けたとは思わなかった。これで戦争が終わり、灯火管制もなくなるし「ヤレヤレ」という思いだった。ところが翌日、工場に行くとき泣いている者がおり、ニュースで原子爆弾が投下されたことや日本が無条件降伏したことを知った。

学徒動員で行っていた川西航空機は戦闘機「紫電改」と爆撃機「銀河」を造っており、自分は胴体のカーブした部品を造るローラー班と呼ばれる製作班にいた。カーブを成型する機械の操作は上背が必要だったので、背の高い二十数名がこの班に選ばれた。

芦屋中学から二年生全員が川西航空機に動員されたわけだが、そこには高等女学校の生徒たちも動員され当時、少なかった男女交際の場になったのが唯一の喜びであった。ところが芦屋中学の校舎を空けておくのはもったいないということで学校が工場となり、我々ローラー班は学校校舎へ派遣され、折角の男女交際のチャンスは失われた。昭和20年6月5日、B29が焼夷弾を中学校校舎に落とし全焼した。ところが工場も空襲を受けているため、近くの「甲山（かぶとやま）」に横穴を掘り「紫電改」や「銀河」の飛行機部品を作る工作機械を移設することになった。旋盤などを台車に載せ、移動のために貨車の引込み線へ運び込んだ。重た

い機械類を人力で1メートルほど持ち上げる作業は、夏の熱い最中ということもあって、大変な思いだった。これは我々ローラー班の仕事だった。結局、横穴は完成しないまま終わったようだ。この時点でも、戦争に負けるとは、思っていなかった。皆、同じ思いだったと思う。

終戦後、学徒動員の仕事は終わったわけではなかった。進駐軍が泊まる芦屋や西宮のホテルに駆り出され、昭和20年8月いっぱいベッドメイキングの仕事をさせられた。不思議なことに敵だった米兵に対する恨みはなく、むしろ彼らヤンキーに対する興味の方が強かった。

授業は近くの小学校に間借りして再開されたが、教科書はなく教師が黒板に書いたことを広告ビラの裏側に書き写した。軍国主義に染まっていた多くの教師が一転して、民主主義を唱え始めた。戦前は、「自由や平和を口にするのは非国民だ」といわれていたので、この信じがたい変わり様に大きなとまどいがあった。

終戦当時、NHKラジオに『真相はかうだ（こうだ）』という番組があった。GHQの占領政策のひとつとして制作されたもので、「太平洋戦争の真相を国民に知らせる」目的で昭和20年12月に始まり、10回に及んだ。米国の日本人に対する徹底した思想統制と洗脳教育で、「戦後、日本人の歴史観はそのためゆがめられた」と一部の人たちに言われている。

終戦の日に風邪で寝ていたが、実は昭和16（1941）年12月8日の開戦の日も風邪で寝ていた。この両日のことは、そのようなことで鮮明な記憶が残っている。開戦時は湘南中学に通っており、ラジオ放送から「気象通報」がピタリとなくなったことを良く覚えている。連日、ラジオから軍艦マーチが流れ真珠湾攻撃の戦果が伝えられていた。戦争に突入したことに誰も反対せず、むしろ浮かれていた。当時の日本国民は、戦争の本当の怖さを知らなかったのだと、つくづく思う。

昭和22年4月には西宮を離れ、北大予科に通うため北海道・札幌に渡り、鶴沼に戻ってきたのは7年後の昭和29年3月であった。60年余に亘り平和な毎日を鶴沼で過してきているが、戦争体験者が少なくなってきた現在の日本は、先の大戦の悲惨さを忘れかけているのではあるまいか、と危惧している。

（すぎもと たつお）

<本稿は杉本会員が口述し、竹内会員が文章化したものです>

70年前まで

宮澤 彰（会員）

開戦は昭和16年12月8日。私は国民学校(小学校)6年生。藤沢駅の踏切脇の交番で開戦をラジオ放送で聞きました。

17年に中学(旧制)に入学。子供心になにもわからず、戦勝ムードの大本営発表にワクワクしていたものです。中学入学時に詰襟に金ボタンの制服を期待していたのですが、当時、物資不足と云う事で物を買うために物資購入通帳なるものが無ければ買う事が出来なくなっていた。制服も衣料切符をもって買った様に、母親に聞きました。国防色の軍服スタイル。スフ(スパンレーヨン)製。ボタンは金ボタンでなく黒いガラスでした。靴の配給は殆んどなくて闇ルートの地下足袋か下駄履きにゲートルを巻いて通学していた事を思い出します。軍事教練では長靴にサーベルをつけた配属将校(陸軍中尉、後日硫黄島で戦死)のもとで服装、姿勢、行進、敬礼等を徹底して仕込まれました。“キョーツケ”で頭の毛から足の指先までピンとならなければならないといわれ本気になっていました

2年生になると農村動員が始りました。田植、麦刈、サツマ芋堀り、稲刈り等、農家に泊り込みで手伝いました。4、5日間腹一杯食べられるので喜んで参加していました。実際農家の手助けになっていたか疑問です。

国から滑空機(グライダー)が届く、については今日から滑空班に入り訓練に参加する様配属将校に命ぜられました。将来の戦闘機乗りだ、喜んで参加。校庭で試験滑走をした所、せまくて滑空は出来ない、という事で鵠沼海岸に変更、海岸に舟小屋を借りて解体した機を預ける事になりました。それからは雨強風でないかぎり放課後学校から海岸まで馳足で通い、組立、滑空訓練、解体、格納、そして走って帰校、帰宅、腹がへりました。

久米正夫が息子の応援に横山隆一さんと一緒に来られ、マンガフクちゃんの中のキヨちゃん、もう一機にはアラ熊さんの絵を描いてくれました。当時は戦時と云う事で鵠沼海岸での撮影は禁止、当時の様子は全く記録に残っていません。中学校史にも滑空班の事は記録されていません。何ヶ月間の訓練も終り、査閲が済むと今度は工場動員です。鑿打ちの訓練の後、東京螺子の第13工場に配属(現新林公園にあった新工場)になり六尺旋盤担当で工具の修理を受持つ事になりました。他の同級生はターレット旋盤と云う機械で爆弾の信管を造っていました。検

査班には女学生(乃木高女、藤沢高女、大和学園)が大勢いました。現在と異なって男女交際は御法度の中でも同じ屋根の下でいるのです、それはそれ戦争中の事を忘れた様に華やかでした。私の受持ちの工具旋盤は一度切削を始めると自動で3~4時間もかかる事があり、時々抜け出して裏の池[新林公園の一番奥にある大池(農業用水池)]に遊びに行きました。当時片瀬山は要塞地帯で立ち入り禁止、砲台構築が行われて居て従事している兵隊さんが10人位、竹や茅を集めて造られた掘立小屋で生活していました。飯盒炊飯をしていましたが、中身は見えていません。米を炊いているとは思えませんでした。

空襲警報が鳴れば、横穴式防空壕に入ったり、池の兵隊さんの小屋に避難したりしていました。横浜の空襲は真昼間でした。B29に対して反撃の戦闘機も飛び立たず、打上げる高射砲も届かず、ただ茫然と川名山(新林公園の山)で見えていました。

そして終戦、昭和20年8月15日、カンカン照りの暑い日でした。朝出勤するとすぐに、正午から「玉音放送」があると云う事で東京螺子の講堂(現秩父宮体育館と消防署)に集合させられました。池の兵隊さんも入って来ました。鉄甲、銃剣をつけたのは2~3人、他は防空頭巾に丸腰です。ラジオはよく聞えなかったが、戦争に敗けたらしい、と云う事は解りました。周囲には泣く人もいました。そのうち兵隊さんの一人が「あゝ家に帰れる」と言いました。軍国少年だった私はスッキリせず帰宅すると、家では今晚から黒いカーテンはいらないと云ってはずしていました。電燈のカバーもはずしていました。でも私は納得せず当日厚木航空隊の飛行機でまかれた帝国海軍航空隊司令のビラを見て、私自身闘う準備をしていました。数日後連絡があり登校すると、学校敷地内にある浪人山に穴を掘って校舎の中にあつた武器庫の武器を全部埋めろと云われ、菊の紋章の刻印のある三八式歩兵銃他模擬手榴弾、機関銃等を埋めました。その時はじめて、戦争に敗けたのだなと思いました。マッカーサーが来る前です。

其の後は在学中にも関わらず闇商人を続け乍ら旧制中学卒。新制高校(1年間)卒。大学は中退。中退後人並の生活に戻ったのはいつだったか。戦争なしで70年、現在85才、幸に過しています。

平成27年8月15日

(みやざわ あきら)

ぼくの終戦前後

森岡 澄（会員）

昭和19年2月、父親に赤紙がきた。一週間後に、しばし別れのため、又は永遠の別れになるともしれぬ、最後の面会に母は一人で逗子から甲府の連隊へ行った。そのとき母は身重であった。当時の逗子周辺は、警戒警報、時に空襲警報が発令される毎日だった。

或る昼下がり本家の畑へ里芋を採りにでかけたら、祖母に手伝いをいいつかり、言われるままに播鉢の縁をしっかりと、おさえた。ゴリゴリと胡麻を摺る音と共に、芳ばしい香りが漂った。と、その時、警報と同時に小型機（グラマン、カーチス？）が海方向から本通りに沿って、機銃掃射をしながら屋根をかすめた。祖母が大声で何かを叫んで僕をつかんで引き寄せたことが記憶にある。のちに解かったことだが屋根に三ヶ所穴があり、そのうちの一つが僕のおさえる播鉢を貫通して床にも、破損の跡があった。その夜、分葱と若芽、貝の「ぬた」を食べた記憶はない。

5月11日、九歳下の弟が生まれた。その一週間後に私達家族は、叔父「五郎じい」の引率で、母の実家信州へ疎開することになった。産後一週間でそんなことが可能なのか、ともかくそれは、実行された。上野発の信越線は、人があふれ殺気だっていた。僕は荷物と共に網棚にのせられた。窓からもデッキからも乗客がはみ出していた。横川から軽井沢までの碓氷峠「アプト式」機関車の知識を五郎じいから聞かされ、ゆうべまで楽しみにしていたのだが、網棚上の僕は小諸、上田到着まで記憶が途切れている。天井からの熱気と、人いきれの苦しさに気絶していたのでは・・・と思ったものだ。

翌朝「Kおきなさい！」「顔を洗いにゆくぞ・・・」と五郎じいについて、近くの河原に下っていった。老人が一人長い釣竿を振っていた。「何が釣れますか？」「ハイだわい」「餌はなんですか？」「ハイだわい！」五郎じいと老人の妙な会話が解ったのは朝飯の折に「蠅でハヤを釣る」ことだと、母に訳してもらった時だ。皆で大笑いした。早朝の依田川（千曲川の支流）を吹く風が心地良かった。初めて暮らす農村での生活は、見るもの、聞くもの全てが珍しく、新鮮だった。

祖父の入る風呂に、松葉をくべ焚くのが僕の役目だった。「次はKちゃん、おあがりなんしょ！」祖母の言葉になんのことかと思っていたら、「風呂に入れ！」と

いうことだった。ところが生まれて初めて体験する、五右衛門風呂だ。円い板を沈めて、下駄をはいて入る釜に体がふれると熱い、それでも、それに慣れてくると、気持ちよくなって遠慮なく大声で歌を唄った。

「なんにも言わず靖国の 宮の階^{きざはし} ひれ伏せば 熱い涙がこみあげる
さうだ 感謝のその気持 揃ふ気持が 国護る
恩賜の煙草いたゞいて 明日は死ぬぞと決めた夜は
曠野の風もなまぐさく ぐっと睨んだ敵空に星がまたゝくニツ三ツ」

どこで誰に教わったか意味も解らず唯、歌った。「K君は歌が上手だない！」と祖母は、いつも褒めてくれた。軍国少年という言葉が飛び交う世相だったが、僕は決して軍国少年などではなく、火野葦平の「麦と兵隊」が好きでよく歌った。

本家の屋敷内には作男家族が住んでいて、古町小学校で同級になる「斉藤竜^{りゅう}」は名前と共に恐いものなしの風体で、常に僕を支配しようとしていた。竜のさらに一級上の姉は「朝枝^{けきえ}」といて、この二人は、終戦後の疎開から引きあげるまで、彼等の影響下に身をおくことになる。圧倒的に僕の前に立ちふさがり、数々の悪しき要因をひき起こす不逞の族だった。否、この文章は戦中戦後の体験記であって不逞の族との様々にかまけるわけにはいかない。

唯一つ学校の帰りに朝枝さんと経験した怖い事件は戦争体験記だ。田圃道を帰宅途中のことだった。後方、大屋、丸子方面から一機「グラマン」が機銃掃射をしながら飛んできた。逃げ出そうとする僕を朝枝さんが、田圃の畦へ突き飛ばし、自分も僕の上に覆い被さった。飛行機は依田川にそって爆音を発しながら遠ざかった。生ぬるい泥と覆い繁る草いきれの不快な感触から、ようやく這い上るのにかなりの時間がかかったように記憶している。黒々とぬめぬめした蛭が首の周り、背中にも腿にも両の腕にも、はりついている。西瓜の種のように黒く、ヒマワリの種より大きい「ヒマ」。当時の農家はこぞって栽培し、油を採るために供出した。そのヒマの種に似ていた。僕は大声で泣きながらシャツで払い落とした。その夜、熱を出して母を困らせた。逗子と信州で二度も機銃掃射に見舞われたわけだが、のちの同窓会などでの体験談から察しても皆、異常な出来事や事件が日常化していて、今この国がどうなっているのか解からない！というのが、その頃の子どものたちの正直な感想だった、と思う。

長窪古町にも疎開組が複数越して来た。本家にも、池袋から五人の家族が加わった。家業は薬屋で、まもなく街道沿いに薬屋を開き、のちに大繁盛する。後日談だが、サッカリンと虫下しが大いに売れた、と聞いた。

「小さなものが大きな力を出すときがきた！」と書かれた粗末な紙がくばられてきて、一軒一軒役人？が廻って、我が家の貴金属すべてが供出された。指輪やネックレスなど貴金属を供出することで国を救おうとした当時の日本人の、けなげな心理を、まだ幼かった僕の内部に見出すことはむずかしい。

歴史家ブルクハルトは、「歴史は思い出す作業だ！」と言っている。こう書きながら僕は大きな無力感に襲われている。幼かった僕が、あの時代をいろいろ空想し想像してみることは出来るが、やはり正確に思い出すことはできない。玉音放送直後に大人たちが目を泣きはらして大広間から出て来たありさまも、どこの家でも沈黙のうちに、竹槍をつくって、潜り戸の裏に立てかけていたことも、依田川の流れにさまざまな家畜の死骸が流れて来たことも、生まれて始めて知った。長閑な田園風景の一齣として思い出すことは出来る。

太平洋戦争研究家の森山康平氏によると三月十日東京大空襲の夜、小磯首相はラジオを通じ「今晩の空襲は盲爆というより市街爆撃であり、無差別爆撃であり、たとえ戦況下においても断じて許されるべきものではない」と非難声明し「敵米の国民性、道義性がいかに低劣野蛮」かを論じ、日本からの海外向け放送は「東京を包んだ火の海はネロ皇帝のローマの破壊を思わせる」と告発したそうだと、記している。

僕は思う、日本が行なった真珠湾攻撃直後のチャーチルの言葉を。「一民族が集団発狂することはありうる！」東京空襲以来、米軍の攻撃の性格が変わった。焼夷弾による都市への無差別爆撃が始まり、同年5月から終戦の日までに東京空襲は130回に及んでいる。日本軍は事実上壊滅していた。「日本軍はもはやわれわれの脅威ではない」とジョージ・C・ケニー将軍は言っている。ニューヨークタイムズの軍事専門記者W・H・ローレンスは1945年8月14日、グアム発の記事の中で「3月の東京爆撃以後、米軍は日本軍相手ではなく、主に一般市民を相手に戦争をしていた」と書いている。

チャーチルの言葉は、この頃のアメリカにもあてはめることが出来るのではなかろうか。そして、いつの戦争においても発端になる人物がいる。

平成27年8月26日

(もりおか きよし)

戦後 70 年 食糧難時代

綿谷 克延（会員）

堪え難きを堪え忍び難きを忍びの玉音放送を拝聴したのは、前号で記した通り雑音混りのラジオの前に集い、中学一年、埼玉、母の実家でした。母の実家は白壁造りに大きな蔵があり、門構えも立派で、孔雀2羽他動物を飼育し、裏は一面の広い栗林で、資産家？だった思い出があります。

東條首相の言葉を信じ、鬼畜米英打破、欲しがりません勝つまでは、と神風の吹くのを待つ嘘の美意に裏切られました。満州事変から一貫して、勝利は神国日本にあればこそと幼い時から大きくなったら軍人になり盡忠報国にと、日夜教育された人間にとって、大政翼賛の美名に励んできた行路を戦争終結によって閉ざされ民主国家への変貌は全てに於いて変革せざるを得なかった（正解）。

昔、銀シャリへの夢と題して投稿したことがあったが、罹災で田舎よりの通学とはいえ銀シャリの夢は満たされぬ食糧難に堪え忍んだ。戦災前戦況が悪化、配給制度実施に主要食品、嗜好品、衣料品等を思い出すと未だ記憶が風化されず物資不足は今では想像もつかない。さつま芋の苗を育てた後の種芋、栄養がとられ種芋はスカスカして甘みもなく空腹でもまずく食べる気になりません。又、お米の代りに大豆が配給され大豆を煎って封筒に入れ持ち歩いたり、米麦飯の中に入れて炊いたり、豆腐のおからを炊きあがったご飯に混ぜて食する、その他に代用食として小麦粉を煉って、団子形にして汁に入れ食した水団、粟を米と一緒に炊くと赤飯にみえ、大根飯と、お袋も苦勞したことだろう。田舎育ちのお袋は以前僅かな雑草地を耕し、下肥を施し各種野菜を栽培し食糧難を凌いだ。ジャガ芋、トマト畠の回りに玉蜀黍を柵代りに、結構育ち食した思い出がある。併し、戦局悪化に伴い地方都市にもしわ寄せが及び、家が強制疎開で借家生活から食糧難時代に突入。前述の記事通り、お袋は近隣を誘い、リュックを背負い農家へ買い出し、物々交換手土産に地下足袋、配給煙草、衣類等を持参するも米は減多になく殆んどがさつま芋、駅頭では闇米摘発統制厳しく折角の購入も没収、歩いていくのが常、小学生だった私は同行したことはないが話に聞いている。育ち盛りで日々ひもじい思いの中に今、改めて亡きお袋の苦勞の有難みを痛感、戦中戦後の食糧難を思い出した。

（わたや よしのぶ）

「戦後 70 年」今思う

終戦のころ

渡部 かほり(会員)

昭和 20 年 8 月 15 日、正午より特別なラジオ放送があるとの回覧が隣組に回ったので村人は周知していた。80 世帯の村にラジオのある家はほんの数軒だったようだ。たまたま 300 メートル位離れたお隣の農家にラジオがあるというので、4 才の私と 11 才の姉は母に手を引かれて行き、庭に敷かれたむしろに座ってその時を待っていた。ラジオは居間の茶箆笥の上に有り、縁側が開け放たれていた。顔見知りの隣組の人たちが緊張した様子で挨拶を交わし、その後は沈然していた。私たち子どもを含めて 80 人位集まっていた。真夏の太陽が輝いていたのに暑さを覚えていない。12 時の時報の後、ビービーシャーシャーとラジオの雑音から玉音放送が始まった。大人たちは頭を垂れて傾聴していた。音声はとぎれとぎれで何が放送されていたのかほとんど聞きとれなかったし、私には何も分からなかった。放送が終わった時、母の手を握っていた私はギュッと握り返す母の手を感じた。隣組の長老さんが「戦争が終わった。日本は負けた」と言っているのが聞こえた。震えている人や泣いている人がたくさんいた。

70 年前のこの時、私はひもじい幼児だった。小さな細いサツマ芋とサツマ芋の蔓と麦のゆで汁が主食だった。

昭和 16 年 12 月 8 日、真珠湾攻撃からはじまった太平洋戦争の年。昭和 16 年 3 月、この世に誕生した私。本籍地・東京都豊島区西巢鴨 731 番地。あの有名な刺抜き地蔵様の近くの西巢鴨キリスト教会に住んでいた。自宅は牧師館だった。(やがて目立つ建物として教会堂も牧師館も強制取り壊し、昭和 20 年 3 月 9 日～10 日、東京大空襲で焼け野原になった)。しかし、昭和 18 年 4 月、文部省美術研究所に勤務していた父の突然の異動。大井川鉄道の終点、千頭にある宮内省の御料林管係。静岡県榛原郡中川根村藤川に疎開と称して引っ越した。お茶の産地で茶畑しかない地域。豊かな水の大井川と森林に囲まれている傾斜地に農家が点在し、大井川鉄道「川根徳山」が隣村の鉄道駅下車。徒歩で釣り橋(現在は千頭に移設)のみが村へ入る交通路であった。70 年後の今は S L が走り、しっかり道路もあり観光人気スポットになっている。いつまでも平和でありますように。

鬼畜米英が叫ばれた時にリンゴの木箱で送られてくる荷物はほとんど敵国語、

英語や外国語の辞書や本ばかりだった。衣類と食糧はほとんどなかった。戦後 20 年以上過ぎた時、父親の御料林勤務は秘密文書解読が任務だったこと、戦後、国家公務員を辞職、平和な国を造るのは青少年教育が使命と新制都立高校の教師になったことを知った。

空襲警報のサイレンが聞こえても防空壕に入った記憶がない山村地帯。だが富士山目掛けて B29 の銀色にキラキラ光る機体の編隊が突然 90 度に向きを変えた時、翌日は東の空は朝焼けが続き、東京や横浜の大空襲を知らされた。震えながら聞いた蜜蜂の羽音のようなブー・・・と続く飛来音は今も耳の奥に生きている。昭和 22 年 4 月小学校 1 年入学。単級学級だった。東京に戻ったのは昭和 24 年 1 月。世田谷区の小学校 2 年生。二部授業だった。住居の関係で小学校は 6 年間で 7 校転校した。7 校目に亡夫・瞭に出会った。

(わたなべ かほり)

回想 太平洋戦争開戦の日から終戦の日迄

浅野 君子 (会員)

昭和 16 年 12 月 8 日、ハワイ真珠湾攻撃。アメリカ国と戦争状態に入る。私は国民学校の 5 年生でした。

昭和 17 年 4 月から、6 年生は全員進学する事で猛勉強が始まりました。学習内容も皇国の為、生活全般に渡り統制が引かれる厳正且非常に窮屈でした。

昭和 18 年夏、妹 2 人は学童疎開で小田原へ。祖父が面会に行ったその日に連れ帰って来ました。蒲団等大きな物はみな置いて厄介な事になるからと。その頃大きな品物は持てない、統制もあったのでしょう。

昭和 19 年、私は学徒動員で探照燈レンズを製造する日本光器株式会社総務課に配属され空襲を恐れ乍ら通勤して、通学は月 2 回位でした。登校日は科目毎に先生が「今日は貴女方にとって大変貴重な時間です。気持ちを集中して学んで下さい」、1 分 1 秒を惜しむ様にご指導いただきました。昨日空襲で上級生が帰宅途中機銃掃射を受けてお亡くなりになった由、涙に咽びながらの授業でした。明るい音楽の先生、三国同盟の国の歌をドイツ語で 1 番だけ 45 分間の授業で、警報を恐

れながら今でも忘れられない。空襲は相模灘方面からとラジオで連呼している。昼夜問わずB29機数知らず、学舎も街も崩壊。市電勿論電車は時間通りに来ない。空襲は日毎に回数を増す。通勤通学も不可能状態。家に居れば空母艦から艦載機が飛び立ち、近くの大岡川の上を利用して生垣をストレスに白いマフラーをなびかせながら一般家屋の人影を探し、遊びのように機銃掃射をしたいと飛び回る鬼かと思う。冬の夜の山の防空壕避難もつらい。

昭和20年、度々の夜襲に睡眠不足。早朝から夜襲帰りの持てる小型爆弾、焼夷弾、弾薬みな捨てる如く落していく、烈くなる連日連夜の空襲、私と従兄は「焼夷弾もう落とす場所もないからね！」と叫ぶ。

5月29日絨毯爆撃、空はB29襲来で真暗になり爆音と焼夷弾の落ちるシャーシャーと云うかジャージャー・ザーザーか、豪雨の如く横浜の空を南から北へ（後に話で聞くとB29-500機、P51-100機と云われる）。東西の空を覆いつくし焼夷弾を落とし、取って帰し北から南へとB29の大きな真黒な飛行機の固まりが焼夷弾を落とす。地上は真赤な炎が地上をなめるように燃え上り悪鬼のように東西南北、性懲りもなく繰り返す。

地上の人々は炎の混じる黒煙を吸い、身を隠す少しの隙間もビルの瓦礫の影さえ見えぬ炎の海、地上に目も口も鼻も耳も呼吸する事も出来ず皮膚は炎の混じる黒煙が迫り体を覆い全身炎を浴びて焼死また火傷…そうです！ 私の母方の祖父もその人々の一人です。74歳でした。

関内で商店を出していました。長身のおしゃれな祖父でした。住いは南区で市電の通りから丘の方へ少し登った所、そこには祖父の孫息子、私の従兄が祖父と二人で住み、従兄は結核で家庭療養しながらビクターレコード会社に勤務していました。祖父は一人で逃げ惑い、真暗い黒煙の中をすでに体も焼けただれていたのでしょう、水が恋しくて近くの大岡川に入ったのでしょう、大勢の人々と一緒に川の中から助けられたそうです。

その頃私は弘明寺の大岡七枚畠の住宅に母と姉妹で住んでいました。此の家は祖父が捜してくれたのです。私の長姉は中区柏葉町に夫婦で住んでいました。母は祖父と姉が心配で妹二人に、祖父が訪ねて来たら水を少しづつ吞ませて食べる物をネ、と云い置いて、母と二人でまず祖父を見つけるべく、心焦り市電弘明寺終点停留所迄（此処は建築物疎開で広がっていた）。電車はなく一停留所を歩くと、その先は見渡す限り残骸があり高熱が足元から立ち上り、町は人影もなく街全体蒸された高熱に、歩行を押し止められる有様で先に進めない。翌日出直す事

に。私はふと振り返ってあの惨禍を港の方まで確かに見たあの時、心が空洞になったのです。何も眼に入らなかったようにです。

家に帰ってから二人は話題にしませんでした。足元も残骸に電線が落ち、危険を避ける為竹の細い竿を持つ事にしました。捜す母の思いあたる病院跡、学校、崩れたビルの影等、収容所は怪我人でひしめき床に横倒れています。お一人ずつ見て廻りました。火傷の方々が多く、薬もなく、先生方も手の施しようがなく、他の収容所も医薬品は無いのです。毎日捜して一日ずつ日が過ぎ、五日も過ぎると疲れと焦りも出て来ます。異常な臭気が町中に、勿論収容先はもっと凄惨な状態。人々が、何人もの重篤な人達が、後からあとから数知らず、何日も捜し、新しい所と聞けば、見て廻って、あとからアトカラ……………、確かめずにいられない。

最初に行った横浜商業高等学校、通称Y校へ。母と同時に祖父の長身の寝姿が目に入りました。医者が全身火傷と云い、私が持って来た薬を見ると、「被災者に触れない様に。表皮がズルズルと溶けてしまう、手を触れないで下さい。」

祖父は目で母を追っていましたが、無念な最期でした。涙を流す間もおかず、遺体の引取りを強く促され、私一人帰宅すると、叔母夫婦、従兄弟従妹達が頭髪も焦げて全身ほこりを浴びた様な状態で、誰も怪我もなく家迄辿りつき、私はどれ程嬉しかった事でしょう、男性三人、どんなに力強く思ったことでしょう。早速、荷車のような物を用意されY校まで迎えに行き、そのまま久保山葬祭場まで登り着くと其処も機能せず、大光院のご協力をいただき土葬にしました。母と私の二人では、祖父に会えたその日に無事納まらなかった事を。

帰路叔父に促され関東学院迄足をのぼし、港の方に目を向けると、眼下に横浜市街地を見て、あまりの凄惨さに息を呑みました。何も無い見渡すかぎり残骸は有るものの、平坦な有様に驚嘆落胆しきりでした。叔父に促され長姉の住む山手の丘の向側だと目で追うと、丘の上の残像も見えず根岸台まで見渡せる有様で港から西北に京浜工業地帯の残骸は見えれど、川崎から東京大森あたりまで平坦になる程完膚なきまで、1945年5月29日の絨毯爆撃忘れまい。更に北北西に目を移すと子安台、横浜駅から北の浅間台、保土ヶ谷月見台、港を中心に三方の丘陵が見渡せ、内側にあった筈の文化都市・商業・工業・市民諸共、この世界が崩壊した事実を悟りました。

静寂な一時がありました。夜襲時、空からキラキラ光る、チャラチャラ・シャラシャラ白銀の錫製の3cm～5cm幅位のレーダー妨害用のテープでした。子供心に日本にレーダーと云う兵器は有るのかと思ったりしました。

南方の島々では玉砕、特別攻撃隊零戦の勇姿を、内地決戦はその頃沖縄で激戦中だったのです。8月6日新型大型爆弾が広島に続いて8月9日長崎に投下されました。後日新聞社より広島被災地の写真パネルが、弘明寺横浜国大前に掲示され、目を覆う凄惨な写真に胸が迫りくる涙に耐えられませんでした。

8月15日正午、天皇陛下の玉音放送を聴きました。雑音が多くて…詔には、和を持って尊しとす、一部分だけお言葉を聞けたように思いました。和睦を結んだのだと思いました。14才の私には難しい言葉は解りませんでした。

戦争は世界を破滅します。戦後平和に70年が過ぎ、有事法制等心をざわめかされたりしました。核のない平和な世界で人々が安心して暮らせるよう心から祈ります。国内的には憲法九条を守りたいと思います。

早朝のラジオ連呼す情報に
大空襲を察知せし母

登校の吾を引き止めし母の憂いか
学徒動員休まぬわれを守りぬ

爆音に友と別れのその刹那
機銃掃射に弊れし無念上級生15才

遅れたるポツダム宣言受諾
無駄死にの数あまた増えたりしとぞ

戦禍に命断たれし死者らより
贈られたるや憲法九条

清廉な若き人々のゆくて阻むなかれ
有事法制に心ざわめきて

君子

(あさの きみこ)

As time goes by—どんなに時が経っても

内田 進之助（会員）

昭和 20 年、東京雪が谷（洗足池駅近くの高台）に住んでいて都立第八中学校（現、都立小山台高校）2 年生であった私は 3 月 10 日の東京大空襲の時、二階の窓から東北方向の真っ赤に染まった空を眺めて愕然とし、もうわが国はこの戦争には到底勝てないものと自覚した。

当時各中学校では配属将校という陸軍軍人による厳しい軍事教練が行なわれ、生徒一人ひとりにお前はどちらの軍関係学校へ行くつもりかと質問されたものだったが、私はそんな横柄な陸軍が嫌いになり、近視であったため陸軍幼年学校や海軍兵学校は受験できなかったで、「海軍経理学校にゆくであります」と答えた。しかしその年の夏に戦争は終わったため結局は受験しなかったが、その時撮られたパンツ 1 枚の受験用写真が今も残っている。

我が家族一同は 4 月に父の故郷の福井県河和田村（現在は同県鯖江市に合併）に疎開したので、全員戦災には遭わず幸運であった。

8 月 15 日の天皇陛下の終戦の勅語放送は偶々聴けなかったが、あとでそれを知りホッとするとともに、わが国民全員が占領軍により過酷な目に遭わされるのではないかと本気で怖れたものだった。

2 年後に父の仕事の都合で生まれ故郷の神戸市に移り、神戸大学経済学部に入學したが、六甲山中腹の斜面にあった学舎の前庭から神戸港に停泊している多数の外航船を眺めながら、あの海のかなたの諸外国との仕事をする身分になりたいものと思った。戦前から神戸市には外国人が多く居住していたが、私の家の裏隣にもポルトガル人一家が住んで居てポーリンちゃんという娘と遊んだこともあり、海外への思いが尽きなかったのである。

昭和 28 年卒業後にそんな夢が叶えられ、外航海運会社を経て貿易商社の船舶部門に勤務することとなり、海外駐在も含め、世界の多くの国々を渡り歩いた。当初わが国は朝鮮戦争終結に伴う深刻な不況の下にあったが、その後の経済情勢好転によるわが国及び海外の産業発展に恵まれ、私の仕事も多忙を極めた。その間、昭和 36 年に結婚、昭和 42 年に東京に転勤となって、鶴沼に移転した。二人の子供にも恵まれたが、勤務では猛烈な同僚たちとの競い合い、頻繁な海外出張に追

われて、家庭のことや子育てはすべて家内に任せきりとなり、大変な苦勞をかけたことだった。しかしこれは当時のわが国ビジネスマンすべてに共通したことであって、戦後のわが国の国力向上に大いに資したのであり、戦争中の国民の至心と同じであると云えよう。

終戦後のわが国政府や軍の動向と決断については、半藤一利氏の著書「日本のいちばん長い日」に克明に記されており、又これに基づく映画もかなり印象的であった(先日8月15日にTV放送もされた)。半藤氏は私と同年でその思考にも全く同感でき、幾つかの著作を愛読しているが、特にこの作品には非常に感銘を受けた。結局はその時の一部政治家と軍人たちの極端な言動を抑え込んだのは、昭和天皇陛下のご聖断と鈴木貫太郎首相の下の政府の実行力に基づくものであったが、基本的には陛下のご資質とともにわが国固有の天皇制と国民性によるものであり、戦前、戦中、戦後とも、時代に振り回されることなく、これを超えて不変であると強く思っている。

(些か気障な英語の題名をつけました。ご存知の方々もおありだと思いますが、これは1942年製作のアメリカ映画“カサブランカ”の中で歌われている歌曲の題名で、“時の過ぎ行くままに”という誤訳も普遍しているようですが、何れにしてもわが国とその国民性はいつの時代にも結局は変わらないという私の思いを表しているかと思います。)

(うちだ しんのすけ)

戦後70年に思う

熊坂 兌子(会員)

70年前私は藤沢高女(後の県立藤沢高校)一年生でした。みなモンペ姿で、薙刀を習ったりしていました。

毎日のように巨大なB29爆撃機の編隊が空を暗く被い、頭上を北上してゆくのを見ました。そして夜になると東京や横浜のある北の空が真紅に染まったのです。

私達家族は石上の家の砂地で崩れやすい庭に防空壕を掘り、空襲警報が出ると入ったりしていました。幸い藤沢はひどい爆撃をまぬかれました。8月15日には隣家のラジオに近所の人が集まって玉音放送を聞きました。よくは聞こえなかったが長かった戦争が終わったらしいとの事、暑い夏の日で抜けるような青い空だったことを覚えています。

広島、長崎にすごい被害があったことは、当時の人々は東京、横浜の殺戮と同様にとらえていたようでした。

戦中は大本営(軍部)発表をそのままを報じていた新聞やラジオが、一転して民主主義を称える紙面に早変わりしたのには驚きました。

彼我共に苛酷な戦いに疲れ、特に一発で何十万人も殺す原爆を使ってしまった人類は、又戦争をすればその未来は絶滅につながると予見できました。日本の平和憲法はそんな中で作られ、日本国民と政府はこれを守って来ました。この70年間平和憲法のもと日本は他国の一人の人も殺さず又殺されずに来た奇蹟を生み出しました。これは米国の核の傘に守られただけでなく、多くは難民が住む村で危険を顧みず武器を持たず、井戸を掘り、家を建て、住民のために仕事をして来た自衛隊や日本人ボランティアの誠意が、地域の人々に信用され尊敬されたからでしょう。

新安保法案を作り、自衛隊に武器を持たせ、米軍の走狗として血を流させ米国への忠誠を示したいというのは、一国の首相のすべき事でしょうか。

外交を中心に平和日本の思想を押し進め実践することが世界の平和につながってゆくと思います。

一発の銃弾の応酬がたちまち戦争の泥沼に引き込まれるのです。

盧溝橋事件を又起こしてはなりません。

近頃、戦争を知らない世代が勇ましい戦争にあこがれる様な風潮が出て来たようです。我々戦争を知るものは、戦争の悲惨さを若い世代に伝えてゆかねばと思います。

2015年8月10日

(くまさか なおこ)

戦争のない平和な世界を願ってやまない

関根 次郎(会員)

あれから70年、終戦当時のことは鮮明に記憶に残っている。昭和16年6月生まれで満4歳と2ヶ月だった。幼児なので戦争の惨たらしいことを、子供なりに感じ取っていた。

私が生まれたところは、鵜沼の原部落で現在の本鵜沼四丁目、藤沢警察署の南側である。農家の七人兄弟の次男坊だった。空襲警報が鳴れば敷地内に掘った防空壕に逃げ込んだことは忘れない。蝋燭の灯の下、おぼく(麦飯)の塩おにぎりを食べたこと、夜間、寸時をみて屋敷の隅で立小便をしたことなど覚えている。

当時の鵜沼本村の農家のほとんどは藁葺屋根で、広い庭の一面には防空壕が必ずあった。

真昼間、空襲警報が鳴ると裏の刈田道(鵜沼を南北に走る)を第三小学校(現在の鵜沼小学校)の生徒たちが防空頭巾をかぶって急ぎ足で家路につく姿をよく見掛けた。

あの防空頭巾は綿入れで、各家で子供全員の物を手作りしたものだった。夜なべしておふくろが針仕事していたのを思い出す。

戦争といえば、この歌が私の頭を過ぎります。

「一本の鉛筆があれば 私はあなたへの愛を書く
一本の鉛筆があれば 戦争はいやだと 私は書く」

これは、美空ひばりさんが歌った「一本の鉛筆」の歌詞の一部だ。松山善三さんが作詞し、広島平和祭で発表した歌だ。

子供なりに戦争の恐さを身をもって味わった頃から、未だ脳裏に焼付いていることがある。地蔵袋(現在の辻堂太平台一丁目)の畑に母親といっしょに行った時だった。突然の空襲警報で近くの大平橋の下に隠れた。幸い難は逃れたものの、恐怖心で母の胸から離れることはできなかった。

その頃の引地川にかかる橋といえば、引地橋、鵜沼橋以外はみんな木の橋だった。しかし大平橋は辻堂太平台の砂山が宅地開発されたのを契機にコンクリート橋だった。引地川の堤防は現在とはちがい川面まで土手だったので、橋の下に身を寄せることは容易に出来た。

今おもうと、空から無数のチラシ紙片が降ってきて、そのわけもわからず拾い

集めたのが、アメリカの宣伝ビラ「伝単」だったのだ。

また、時には細長〜い銀紙がくねるように空から舞い落ちてきたこともあった。それを掻き集めて遊んだりした。これは電波妨害させるための作戦だったことを後に知った。先の戦争を知っている最年少の私にとって、これらがあの頃の子供達にとって遊びの対象となったことは複雑な心境である。

なかでも、海軍の辻堂海岸演習場(現在の辻堂団地)から拾ってきた真鍮の薬莖をたたいて遊んでいた近所の子供が暴発で死んだ事故は痛ましかった。

あの「一本の鉛筆」の歌はこう終結している。

「一本の鉛筆があれば 八月六日の朝と書く

一本の鉛筆があれば 人間のいのちと 私は書く」と。

戦争のない平和な世界を願ってやまない。

(せきね じろう)

終戦の日―

これから先は生きられる

榛葉 敏行(会員)

昭和20年8月15日、藤沢の日本練工(れんこう)という工場に学徒勤労動員されていた。12時に玉音放送があるというので、全員指定された場所に行った。

ラジオの雑音が多かったのでわからなかったが、どうも、日本が戦争に負けたということであった。まずは安心感が身体全体に伝わり、これから先は「生きること」が出来るという思いだった。

家業の八百屋を手伝いながら、横浜の商業高校に通った。戦時中は工業学校優先で、私はコンプレックスを感じていた。戦後は統制経済より昭和24年、自由主義経済となり、大きく発展し実力主義の時代となった。

私は長男、家を守るために軍隊に志願する気持ちはなかった。

(はしば としゆき)

大切にしたい 70 年前の記憶

西野 行（会員）

真っ昼間なのに「ピカッ!!」と強烈な閃光、しばらくしてグラグラッと地震のような大きな揺れ。昭和 20 年 8 月 9 日午前 11 時すぎのことでした。

その頃、私は長崎県東彼杵郡川棚町に住んでいました。国民学校 3 年に在学中でしたが、学校は休みだったのか私は自宅にいて、長崎に投下された原子爆弾の炸裂の一端を経験したのです。勿論その時は原爆による被災地の状況など知る由もありませんでした。

私は国民学校 1 年の昭和 19 年 3 月、学童疎開が始まった年に父の仕事の関係で女学校・中学校在学中の長姉・長兄を東京に残し、母と姉弟 3 人と共に世田谷からこの川棚へ転居してきていたのです。当時の川棚を簡単に紹介しますと、現在の JR 大村線の諫早と早岐の間に位置し、湖のように穏やかな大村湾に面した半農半漁の静かなまちでした。そこに塩田の転用と埋め立てで出来た広大な土地が造成され、昭和 17 年佐世保海軍工廠川棚分工場（18 年に独立して川棚海軍工廠）が設けられたのです。この工廠は航空魚雷製造工場で、当時航空魚雷製造工場では日本一だったそうです。日本各地から召集された工員をはじめ、女子挺身隊、のちには中学生、女学生なども動員され昼夜三交代で働いていました。戦局が厳しくなり、空襲に備えて山に横穴を掘り、部署によってはトンネル工場へ移転もしました。工廠を見下ろす裏山には 2 か所に高射砲陣地がありましたが、そのうち 1 か所は木製の擬似高射砲陣地でした。工員住宅は従業員増加にあわせて増設を続けました。戦時中川棚の人口が一番多かった時は 5 万人をはるかに超えていたと云います。現在の人口は 1 万 5 千人弱ですのでこの工廠の規模が如何に大きかったかが分かります。

原子爆弾が投下された直後は満足な情報も無く、まだ子供だった私はよく理解出来ないことが多かったのですが、原爆が投下された日の夜見た川棚から直線で約 33 キロ離れた大村湾越しの被爆地長崎の空が、一晩中真っ赤だったことは鮮明に覚えています。また川棚には海軍共済病院がありましたので、連日多くの被災者が列車等で運ばれてきたのは印象的なことでした。

小学校の修学旅行は昭和 23 年春長崎でした。バスの窓から見た被災後 2 年半を経た街の姿は、まだ原爆被災の姿そのままか、せいぜい貧弱なバラック建てで

あり、長崎造船所の工場は大屋根が吹き飛び鉄骨が飴のようにぐにゃりとまがったままの姿でした。原爆で妻を失い、自身も白血病と闘いながら被爆者救済に努め、「長崎の鐘」「この子を残して」等多くの著書を残した医師永井隆博士（1908～1951）はまだ存命でしたが、その住まい（如己堂）の前で、「2畳ひと間の狭い家で、今博士は子供2人と闘病生活をしている」との説明に胸を痛めたことを覚えています。外壁のアカレンガの一部を残して崩壊した当時東洋一の壮麗さを誇った浦上天主堂はじめ被災地長崎の街を目の当たりにして、原爆被害の悲惨さを子供ながらに身に染みて感じた修学旅行でした。

川棚には戦争に関連したものとして、海軍工廠の他に魚雷発射試験場、海軍特別攻撃隊「震洋」訓練所等がありました。「震洋」は艇首に250kgの爆薬を装着した水上特攻用ベニア板製小型魚雷艇で一人乗りと二人乗りがあり、敵艦を体当たりで撃沈する特攻兵器でした。明日にも死の特攻攻撃へ出撃するかも知れない若い特攻隊員が、たまの休日に家族と家庭の雰囲気求めて家に遊びに来たりしていました。訓練所跡地に昭和47年に建立された「特攻殉国の碑」には、ここ川棚から出撃して戦死した震洋特攻隊員2524名を含め、合計3511名の帰らぬ特攻隊員の名前が記されており、毎年春に地元町民が主催して慰霊祭が行われています。

私は戦争の直接経験は、空襲の際山の中へ逃げ込んだことぐらいでしたが、戦時色一色のまちに生活し、戦争の悲惨さを子供心に何かと感じた70年前でした。自分が体験した戦争の記憶を、平和のために大切にしなければと念じています。

（にしの つよし）

昭和20年の夏

西村 望（会員）

私の昭和20年の夏は、滋賀県米原町字筑摩・琵琶湖の湖畔の地に祖父の縁で縁故疎開しており、入江国民学校5年生であった。

米原といえば交通の要所であり、国鉄の米原機関区があり攻撃目標であるが、機関区の傍に捕虜収容所があり攻撃を免れていたようです。捕虜達は、鉄道と琵琶湖との間にある入江湖の干拓工事の築堤のための土運びをさせられていた。

2人一組でモッコで土を運んでおり、工事は仕上げ段階で入江湖はすでに干上がり緑色をしていた。ところが、この年は、集中豪雨と台風の当たり年で、琵琶湖の水位が上がり入江湖や周辺の田んぼが何回も冠水した。ひどい時には約2mも上り、家の横の堀割水路も岸边ギリギリまで水位が上った。しかし2～3日で水は引いた。これは長く冠水すると稲が腐り収穫できなくなるため、必死で排水されたのだと思う。

堀割水路は、昔、年貢米を彦根城まで運ぶために掘られたもので、水は清く水運から日常の生活に、朝の洗顔から野菜洗い洗米まで、飲み水以外すべてお世話になっていた

ある夏の暑い日に、彦根城のそばの彦根港から家族と琵琶湖汽船で竹生島へお参りに行った。その時は大津、彦根、長浜からも汽船が来ており、3隻の船が正午前に竹生島に集まり荷物を積み替えて荷物の運送も行っていった。

その際、彦根港の手前にある松原水泳場も賑わっていたことも覚えている。さらに裏盆の休みに（たぶん 8月17日）、もう艦載機の攻撃の心配もないので、漁船で友達の家族と多景島にも遊びに連れて行って頂いた。今、考えてみるとお盆の行事の一つとは言え、当時それだけの事をよくできたと感心している。

8月15日は校庭のサツマイモ畑の水やり当番で学校へ行き、家への帰り道で正午を迎え家に帰ってお昼を食べた後、大人達の話で日本が戦争に負けたことを知ったと記憶している。

2学期が始まり学校で教頭先生より、9月2日東京湾内でアメリカの戦艦ミズーリ号の艦上で無条件降伏文書に調印し戦争が終わったと話があった。そして、{日本は9月2日、戦艦ミズーリ号の艦上で無条件降伏文書に調印し戦争に負けた}ことを暗記するようにと何回も話があり、記憶させられた。むしろ8月15日より、9月2日を覚えるように教えられた。（そういえば戦争の終結は9月2日ですね）

8月15日以降、艦載機が飛来し捕虜収容所へ慰問物資を投下していったが、捕虜との間のトラブルは聞かなかった。この地域は穀倉地帯で食糧事情はよく、野菜はほぼ自給自足、白米も食べようと思えば食べられたが、日常は7分つきか麦飯を食べていた。

秋が深まり冬が来る前、11月初めに、京都へ帰り私の疎開生活は終わった。

2015年8月12日記

(にしむら のぞむ)

私の8月15日

長谷川 祐（会員）

私は昭和6年生まれの84歳。生まれた年に満州事変が起き、爾来敗戦の昭和20年まで、我が国は軍部主導による戦時体制一色に染まりました。

その間、昭和13年に神奈川県高座郡藤沢第三尋常小学校に入学し、昭和19年に藤沢第三国民学校を卒業した。同じ場所でありながら校名が違う学校卒という類い稀な経歴です。忘れもしない昭和20年8月15日の天皇陛下の玉音放送を聞くまでは、“日本は絶対に戦争に負けることはない、神国日本は必ず神風が吹く”と、心底思っていたのですから見事にマインドコントロールされた軍国少年の一人でした。今の北朝鮮の若い人々を笑えません。

県立湘南中学校に入学したものの土日は近所の農家の手伝いに狩り出され勉強などする暇もなくなり、空襲の激しくなった昭和20年6月ころから、いよいよ本土決戦を迫られる状況下となり、相模湾にも米軍が上陸する確率ありの情報に基いて、辻堂から茅ヶ崎にかけての海辺一帯に蛸壺（縦に深く掘った一人用の塹壕）陣地づくりの手伝いに勤労働員されるようになりました。

我々学生が鬼軍曹と呼んでいた恐い兵隊さんの指揮のもと、壕の柱に利用する付近の松、杉の木の皮むきに一日中働かされましたが、炎熱下でも日本の必勝を信じて働き続けました。

空襲がますます激しくなりP51（アメリカの戦闘機）の機銃掃射（飛行機から機関銃を連射すること）も作業中にあり、林に逃げ込んだりしましたが、まだ少年のこと、飛行機見たさに道路に飛び出して足に貫通銃創（銃弾が肉体を貫通し傷を負うこと）を受けた友人もいました。

そのころ閑静な住宅地だった鵜沼海岸にも連日のように空襲帰り（どこか目的地を襲撃した帰りに余り弾を掃射するといわれていた）のP51による機銃掃射があり、小学生の登下校も不安となりました。

8月15日もいつものように辻堂の海岸に集合しましたが、例の軍曹がいつもと違った緊張した顔で「全員本日は12時に辻堂駅南口前に集まれ」と命令しました。天皇陛下のお言葉が直接ラジオで発表されるとのこと。

“よし、もっと頑張れ”とのお言葉があるものと信じて勇んで集合しました。

ところが、ちょっと様子がおかしい。しかも何を話されているのか音が小さく

ほとんど聞こえませんでした。暫くして「日本は敗けた、全員自宅に戻れ」との命令。「嘘だろう」と学友と噂しながらも、今までの厳しい肉体労働から逃れられる開放感から急ぎ帰宅しました。

自宅に戻っても漠然として真相はつかめず、頼りの大人たちもほぼ同じ状態だったと思います。

数日後、相模湾に米国の軍艦数十隻が傲然と居並んだのを見た時、はじめて日本は敗けたのだと実感しました。しかし、もう涙は出ませんでした。

不安な夏休みが終り、授業が久し振りに再開された日、担任の先生は「君たち若いものが必ず仇を討ってくれ」といいましたが、一二週間後には、もう前言をひるがえし「日本は民主国家に生まれ変わるのだ」と…。成長盛りの、且つ心底から軍国教育された少年たちにとって、その急変は青天の霹靂でした。

あゝ、自分たちが信じて来たものは何だったのだろう、自責の念ばかりが繰り返し襲ってきます。

しばらくは学校の授業といえは教科書の大部分を墨で塗りつぶす作業ばかりでした。

*

あれから70年、高度成長の波に乗り社会人として幸せな日々を送ってきましたが、昨今、再び軍国化の流れが覗いてきそうな不安が迫っています。

私は、愛する孫たちを、孫たち世代を、絶対に戦争には行かせたくない。いや、行かせない。平和な日本が永遠に続いてくれるのを祈るのみです。

(はせがわ ゆたか)

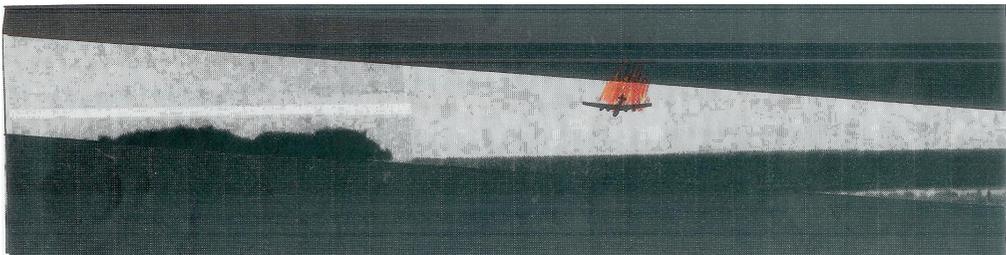
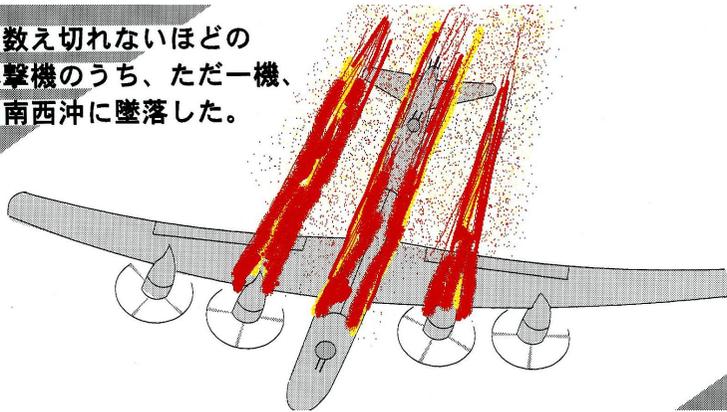
戦争末期と戦後に体験したことのアラカルト

内藤 喜嗣 (会員)

○ B29の江の島西浦沖への墜落

昭和20年の4月15日の夜8時頃、空襲警報の発令中であつたが、突然キーンと言う音に庭に飛び出して見ると、北の方から音が響きだんだん大きくなってきました。間もなくガオーと言う音と共に真っ赤な火の玉が頭上を通過、これを追

襲来した数え切れないほどの
B29爆撃機のうち、ただ一機、
江之島の南西沖に墜落した。



うように赤山の探照灯が追尾し、そこに照らし出されたのは火を噴いて飛ぶB29でした。そして江の島西浦の沖で爆発して海面が真っ赤に燃え上がりました。しばらくして消えましたが、まだ探照灯があたりを照らしていました。わたしが目撃したのはこれだけでしたが、後からいろいろのことが出てきました。

<その1> このとき私の父は南方軍から任務の交替で帰還し、自宅待機を命ぜられていた時期だったので、藤沢警備隊の手伝いで伊勢山の監視所に居り、火を噴いて頭上を越えて墜落していくB29を見ていました。監視所では墜落した位置が鶴沼海岸のように思われたので志村隊長自身の家庭のこともあり、視察要請の隊員に許可をあたえたようでした。しばらくして隊員が海であってよかったと我が家を訪れました。このとき、B29から4人の米兵が落下傘で脱出していたようですが、1人は本鶴沼で落下傘が電線に引っ掛かり、宙吊りのまま怪我をしていたそうです。4人は警備隊に連れてこられ1人は相当ひどい怪我をしていたので隊員が手当てをしたようですが、後でわかったことですが護送中に絶命したそうです。そして父は米兵に尋問して駆けつけた憲兵隊に引き渡したそうです。

<その2> 学校へ行くのに広い木下邸を抜けていくのですが翌朝、門を入ったところで異様な物を見つけたのです。それは直径2cmほどで長さ30~40cmの

弾丸が5、6本、繋がって落ちていたのです(弾丸と薬莢が付いたままのもの)。

当時麦畑で機銃掃射を受けた後、アリ地獄の播鉢のように窪んだ着弾跡を掘り、取り出した不発弾を収集することが戦利品集めとして子ども達に流行っていたので、この戦利品は途方のないものでした。とりあえず草むらに隠し学校に行きました。後日談ですが、戦後の補習授業のときに先輩のJ. Iがこの戦利品を火鉢の中に投げ込み爆発。火鉢の底が抜け天井に穴があき、怪我人がでる騒ぎとなり、戦利品収集のことがばれ、みな回収され引地川に棄てられました。

<その3> 木下邸で不発弾を拾ってから2、3日後、海岸に50cm角、厚さ5mmほどの湾曲した透明なB29の部品が流れつきました。これは防弾ガラスで、お兄さんたちと、分け合うことになり、片帆橋の際の石垣で大きな石を使って砕きました。砕いた時バナラのような甘い香りがしたのでガラスを擦ってみると匂うので、ニオイガラスといって取り合いになりました。みんなで分けるため3～5cmに砕き、小さなガラスの破片をポケットに入れて、悦にいったものです。

○ 湘南学園にやって来た第53軍の護東部隊の兵隊さん

1945(昭和20)年の7月、湘南学園の講堂に20人の兵隊さんがやってきました。当時は年齢より老けて見えたのか、日に焼けて黒かったのか、なんかおじいさんのような感じがしました。講堂の入口を入ると鉄砲の銃架があり、向かい合って20挺ほどの鉄砲がおけるところに8挺しかありませんでした。そして莫塵よりボロイ藁の敷物が並んでいました。学園のグラウンドが狭かったので、兵隊さんの行動は北隣の田中邸の松林の松を抜いて、そこで体操や投てきの訓練をするか、海岸に行っていました。投てきとは直径120cmの蝸壺防空壕からテニスの練習板のような板塀の的に向けて、ゴム製の模造手榴弾を投げるものでした。

午後はシャベルをもって海岸に出かけてゆきました。砂防事務所の撤退で海岸の松ノ木は盗伐、飛砂・塩害で枯れ、松林は殆どなくなっていました。兵隊さんはそこに蝸壺防空壕を掘っていました。そして学園に戻ると、講堂脇の井戸で禪姿で水をかぶっていました。

食事は何を食べていたかわかりませんが、井戸のそばの松ノ木にシートを張って炊事をしていました。後で聞いたのですが、第三国民小学校(現・鶴沼小学校)は、疎開児童があふれていたもので、兵隊さんは来なかったそうです。納屋・堀川・原・苅田などの農家も同じく疎開者でいっぱい、駐屯はなかったようです。

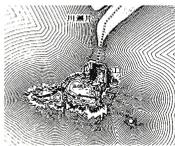
片瀬小学校には兵隊さんが駐屯、裏山に塹壕を掘ったそうです。

護東部隊は相模湾沿いに上陸する連合軍を阻止するため、鎌倉山、江の島、大磯の千畳敷山に重砲を設置して側面から攻撃する計画で陣地の構築を急ぎました。しかし、鎌倉山、大磯は間に合わなかったと聞きます。戦後に江の島の砲台に潜入してみた限りでは重砲はなく、15.5 糎砲二連が西浦の2 砲台にあり、東浦の1 砲台は7 糎の高射機関砲の様に見えました。ここには砲弾が入っていると思われる木箱が6 個積んであり、傍らに紙筒に入った導火線の棒がありました。潜入したお兄さんらからこれは安全だからと聞き、まねをして持ち帰りました。

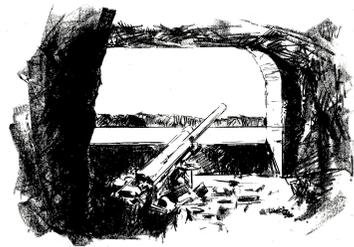
これは、絶好の遊び道具を生みだしました。海岸の砂浜で30cmほどの篠竹をタコ糸で三箇所ほど縛り、中に導火線を詰め込み一本だけ火口として長く伸ばし砂の山の発射台に据え、火口に火をつけると竹筒ロケットが舞い上がるのです。

また、板べらで作った船に竹筒をくくりつけ、引地川で船を走らせました。

当時はマッチが貴重品だったのでレンズで火を起し、導火線に点火したものです。しかし、9月15日に自動小銃を持った第一騎兵師団のG I が来て立ち入り禁止になり砲台内はすべて撤去されました。この導火線の棒を小田急線の線路上においておくと、電車が来て車輪に張り付くと、しばらくパン・パン・パンと音を立てて走るのです。



鎌倉が現在の文部省館長のアルバムから
1945年（昭和20）年8月15日撮影の
江ノ島要塞から配属図



○ 連合軍の艦隊の相模湾への集結

1945(昭和20)年8月27~29日に、連合軍の日本への占領、進駐のために連合軍艦船が相模湾に集結、その数の多さに度肝を抜かれました。広い相模湾が艦船で埋め尽くされているのです。

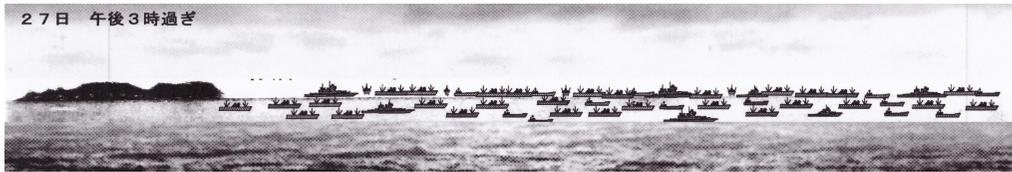
脅威であった情景を中継風に説明しますと一



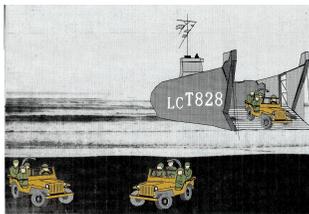
27日の早朝、海岸の方から低い轟音が響いてきました。何事かと、海岸に出てみると、水平線いっぱいに黒い絨毯が敷かれたような状態でした。急いで家に双眼鏡を取りに戻り、改めて海岸に出て見ると、手前のほうをねずみ色の小ぶりの軍艦5、6艘が縦隊でぐるぐると東西に走っていました。そして、その沖には大きな黒い影の軍艦が砲身を上げて、こちらに向けて並び、その後ろの水平線は黒い帯を引いたようでした。海岸には隣組の人やどこから来たか知りませんが多くの人々がこの状況を見ていました。中には防空頭巾を被っているひともいました。



そのうち手前の船がいなくなり、大きな軍艦が縦隊で廻り沖の方に行きました。



午後になり輸送船と思しき船が海岸の方に集まってきました。そして停泊しました。そのうち、一艘の小さな船(周りがみな大きいので)が海岸めがけて進んできました。



後で知りましたが上陸用舟艇LSTがいきなり海岸の浅瀬に乗り上げました。そして、前面の壁が倒れ中から鉄兜を被り、鉄砲を持った兵隊が4人乗った車(後で知ったが、ジープと言う軍用車両で水辺も走れるように吸気のシュノーケルと排気の二本の管を上にしていた)が4台走り出て来てバリバリと轟音を響かせ砂地の海岸を、しばらく走り回り、挙句に引地川の河口の水の中も走りました。そして何事も無く引き上げていきました。夜になり、船はすべて灯火を消して真っ暗でしたが、モールス信号の光があちこちで蛍のように点滅していました。

二日目の28日は前日の夕方と同じように停泊しており、この船の間を上陸用舟

艇が何艘も走りまわっていました。また上陸するのかと思いましたが、それはありませんでした。そして戦艦に搭載された、現在のセスナ機のような小ぶりの連絡機が海岸に飛来し最初は旋回していましたが砂浜に着陸し、二人乗りの乗員が降り立ち、手招きをしました。子供が駆け寄りチョコレートをもたらったとの話から、飛行機が飛んでくると手を振って、着陸すると子供たちが駆け寄る風景が繰り返されました。このことは当時鵜沼で小学生だった、中島誠之助氏が書き残しています。

この日から海岸にいろいろな物が流れ着きました。一番多かったのは戦場食の缶詰で、中にビスケット、コンビーフ、チーズなどが入ったものなど、珍しかったのは消火器の小型版のような真っ黒なボンベでした、これは爆弾だと恐れられました。悪童がいじっているまに、霧が噴出しました、そして指先を凍らした子もいました。これには白字でDDTと書かれていて殺虫剤のスプレーと判り、奪い合いとなりました。その晩は燈火は点灯したままで、舷信号の赤・緑の光がまじり水平線はにぎやかでした。

翌朝、浜に出ると早朝から東京湾に向かったのか艦艇は沖の方にいるだけでした。8月29日から横須賀と横浜に米軍が上陸を始めたことが報道されました。



近辺では9月4日に辻堂演習地の渚にカタパルトが曳航されてきて、大型のLST上陸用舟艇が接岸し戦車や車両を大量に下ろし、海から茅ヶ崎・南湖の海軍病院に戦車隊（第一騎兵師団）が駐屯し、併せて辻堂海軍演習場を接收しました。

○ 進駐軍の行動のはじまり

茅ヶ崎に駐屯した第一騎兵師団は9月15日から行動を開始しています。ジープに乗った白いヘルメットのMPが住宅街の中を走り回り、洋館のある家を見つけると黄色のペンキでF何番とマークをして回りました。そして後日、通訳同伴で訪れ、面談し接收していきました。日本の家は和洋折衷で部屋が狭く、該当した家屋は数軒の有名な邸宅にとどまりました。国分邸・長谷川巳之吉氏の建て



た洋館・菊本邸・各務邸・本多邸・渡辺邸などでした。そして江ノ電鶴沼駅から海岸に行く道、旧海岸通の小田急の踏切には英語の標識が立てられました。

占領軍は海岸線の湘南海岸道路があっちこちで砂に埋もれて通行不能だったので、再開させた砂防事務所にも善後策を指示しました。しかし結局は米軍が1945(昭和20)年12月に撤去を始め、今まで見たことのないブルドーザー・シャベル・ローダー・ダンプカーを繰り出して、瞬く間に整備を完了しました。



○ 大らかな進駐軍 G I の行動

この間、世の中が落ち着いたこともあり1947(昭和22)年4月頃から鶴沼海岸と片瀬西浜の境に跨る平坦な海岸に進駐軍(講和後は駐留軍)の将兵(G I)が海浜までジープで現れるようになりました。現在の西部駐車場の入口のところから海浜に乗り入れられるのが知れ渡り、海水浴、リゾートパーティ(バーベキュー・ビール・コーラ・ホットドッグ・ハンバーガー・アイスクリームなど豊富な物資を持ち込んで騒いでいました)を土・日に盛んに行うようになり、さながら外国の海水浴場を思わせる賑わいになりました。そして、この場所が近隣の若者とアメリカ兵との交流の場となり、後の板子乗り場から日本のサーフィンの発祥、メッカの場所と発展しました。

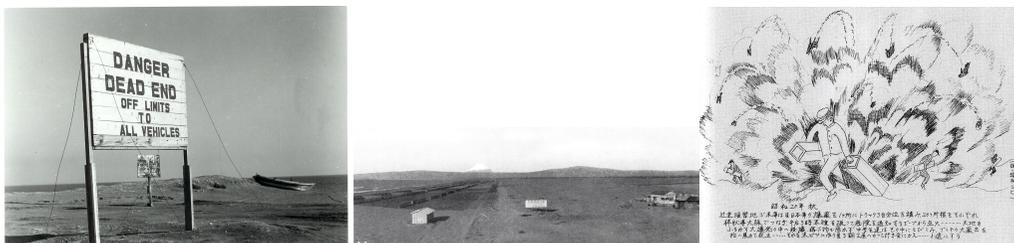
ところが、ここは終戦後、先に書いた道路の砂が取り除かれ開通したことから、G I が夜な夜なジープやウエポンキャリアでパンパンと呼ばれた女性を乗せてやってくる、ラブ・ラブの場所だったのです。街灯など燈火のない時代です。月のある夜はまだしも、ないときは真っ暗ですので彼等はジープのヘッドライトをつけて、砂防柵の陰で毛布を敷いてラブ・ラブの競演を行っていたのです。これは

観客にならざるを得ません。匍匐前進して観覧させて頂くことになるのですが、これはなかなか命がけです。彼等は気配を感じるとジープから自動小銃を取り出し、威嚇に空に向けてパンパンパンと発砲してくるのです。翌日、現場に行き、空莖莖を拾い、昨夜の戦況を語り合いました。

鵜沼海岸は芥川龍之介の『蜃気楼』にも出てくる「新時代」のようにアベックの羨望地で、松の育ってきた林、砂防柵の陰はモーテル・ラブホテルのない時代、ラブ・ラブが盛んでした。



○ 鵜沼の海岸のことではありませんが、辻堂演習地を接收した第一騎兵師団は武装解除した日本軍の残した弾薬、火薬を貨車で辻堂駅まで、そこからトラックで演習地に運びました。それを山と積み対戦車弾を小銃の銃先に装填して射撃して爆破を始めました。これはすごい爆発で轟音が轟き、近隣の家屋は窓ガラス(空襲用に十字クロスと目張りをしていた)が割れました。



そして、おまけに11月に辻堂駅で貨車が爆発、周辺は木っ端微塵に吹き飛ばしてしまいました。当時は報道管制が敷かれ詳しくは分かりませんが、瞬く間に復旧されたと聞きました。そして1948(昭和23)年に辻堂駅は再開されました。

(ないとう よしつぐ)

鵜沼海岸・終戦日前後のこと

山上 英男(会員)

少年期を過ごした鵜沼海岸に定年退職したのち生活の場を移した。

ここには、祖父母がながく暮らし、やがて老いた祖父母を見るために父母が戻り、その父母の老病にともない私と妻が行き来してきた家があったのだが、それまで私がここで過ごしたのは6歳からの5年間だけだった。

昭和13年早生まれの私は、小学校2年の時、この鵜沼で敗戦の日を迎えた。

戦時中は南の島で銃を握る父親の無事を祈り、戦後はその父の復員を待ちながら、祖父母と母、そして弟と私の5人が、ここで暮らした。

8月15日の空は日常の音を失ってカーンと晴れあがっていた。

いつもだったら富久屋のヤッちゃんや八百力のシゲちゃんと遊びまわっているはずだったが、この日は弟とふたり、ずっと黙ったままガラス戸を開け放った縁側に腰かけていた。庭が明るすぎて家の中は暗く翳っていた。

座敷には祖父母とモンペを着けた母が、ラジオを前に正座していた。この日正午に「重大発表がある」ということだったからだ。

やがてガリガリと音を立てるラジオから、天皇の声が聞こえてきた。祖父母が涙をぬぐい母が頭を垂れているのを、影絵を見るように見ていたのを覚えている。

その日までの戦時の1年半は、この鵜沼西海岸から分団を組んで藤沢市立第三国民学校(現・鵜沼小学校)まで、2キロ余りの道をかよった。

その様子を古美術鑑定士の中島誠之助さんが『目利(めきき)の利目(ききめ)』に書いているので少し引用したい。TVの「開運・なんでも鑑定団」でよく知られる中島さんが、同年で同じ小学校へ、ほぼ同じ町筋から通っていたのを、この本で知ったのである。

く・・・毎朝の登校は隣近所の子供たちが、それぞれ10人ずつ班をつくり「菊水隊」とか「山桜隊」などと特攻隊にちなんだ隊名を付け、菊や桜を描いた源平の吹流しのような旗を掲げて行進していった。私はこの毎朝の行進で九九を覚えてしまったことが、素晴らしい学習方法だと今でも思っている。それは先頭に行く上級生が「ににんがし」と大声で言うと、後に続く下級生がそれに唱和するの

である。お蔭で2年生の夏には九九を完全に覚えてしまった>云々。

中島さんのこの回想から、九九を唱えて登校した共通の体験がよみがえった。

ところで、中島さんたちの班が特攻隊にちなんだ名を付けていたのは、きっとその班には講談社の「少年倶楽部」等を購読できる家庭層の子がいたからではないかと想像した。

私たちの班にはそんな時流に合った気の利いた名前などはなく、ただの「西海岸第五分団」だったか、極めて素っ気ないものだった。旗などもあったかどうか。

戦時のこの「分団」の小集団は、普段の遊び仲間でもあった。

昭和20年の4月以降は米機の襲来が増し、空襲警報のサイレンに追い立てられ、走り続けて校門にたどり着いたこともあった。小6と小1の学年間の体力差は大きかったはずだが、不思議に誰も落伍しなかった。

おそらく個々人の体力を配慮できる普段の遊び経験がそこにあったからだろう。

それにしても、機銃掃射をしていくP51やグラマンの飛来は、上空高くゆくB29爆撃機と違って、直接的な恐怖をもたらした。

しかしこの恐怖の中にあっても、転げ込んだ畔脇で身を寄せ合いながら上級生同士が「俺のハナツツァキ（鼻先）で、へー（屁）こくな！」「出るものはしょうがねえじゃん！」といったもの言い合いをするものだから、ここではホッとできるところがあった。

ところが、こういう緩さは学校生活にはなかった。いつも厳格真面目に叱咤され、緊張した空気の中におかれた。毎朝の校門での班点検も腕章を付けた上級生が厳格にやっていた。当時、三小の校門は南側にあり、門の前には畑が広がっていた。

校門10メートルほど手前で、班長が「ホチョー、トレ！（歩調とれ）」と号令を下すと、私たちは大きく腕を振り足並みを揃え行進したのだった。一人でも歩調を乱せば、やり直しが命じられた。

ある分団に、あれは障害を持っていた子だったのだろうか、歩調をうまく取れない生徒がいて、何度もやり直しを命じられていた。私たちの班は、それを見ながら待機させられた。毎朝のことなのかどうか、私が見たのは、これが2度目だった。やがてその班は許され、打ち沈んで校門を通過していったが、それを見ていた私たちも打ち沈んだ。

米機の機銃掃射はむろん死の恐怖で心身をすくませたが、戦争の現実はそれだけではなく、子供の心をすくませる体制のあったことも忘れてはなるまい。

8月15日を境に、それがガラッと変わったわけではなかったが、また戦後の荒廃した世相や窮乏生活はあったものの、7歳の私たちには、夏の陽ざしのなか、機銃掃射も、強制的な号令もない毎日がうれしかった。

この敗戦直後の事についても、もう一度中島さんの文章を借りよう。

く・・・8月15日だったのであろうか、子供たちは海岸に向かった。砂丘の陰から海を見れば相模湾の沖合を真っ黒にアメリカの軍艦が埋めつくし、信号灯をチカチカとまたたかせて交信している。私たちはぐっと唾を飲み込んで声も出ないのである。そのうち小型飛行機が1機こちらに向かって飛び出し、ひらりと子供たちの隠れている目の前の砂浜へ着陸したのである。子供たちは、もうあの飛行機は襲ってこないとわかるや、いっせいに砂浜を飛び出して波打ち際をひた走り、小型機を取り囲んだのである。操縦席から飛び降りたアメリカ兵は私たちにチューインガムをくれてニコニコ笑っている。甘いものなど口にしたこともない子供たちにとって、生まれて初めてのガムのなんと美味しかったことか・・・>

相模湾に集結したおびただしい数の米軍艦を、私も見た。

ただしそれは、記録によれば8月27日の早朝だったという。

米艦が、掃討なった東京湾に回航するのが29日で、横須賀と横浜から米兵が日本への上陸を開始したのは8月30日以降だったそうだ。

したがって、中島さんの記憶にある小型機の飛来による米兵との接触があったとすれば、もっと後の出来事だったのではなかろうか。

それはそれとして、米兵から貰った「チューインガム体験」は、あの時代を生きたこの海辺の町の子供たちには、どんな記憶を刻んだのだろうか。

私の体験は、ちょっと苦いものではあった。

ある日、遊歩道（現・134号線）から入ってきたのか、アメリカの白人兵の乗ったジープがこの商店街（現・マリンロード）にあらわれた。今の「みよし洋品店」の角あたりに止まったジープを私たちは取り巻いた。

好奇心もあったが、何よりも、当時、子どもたちの中には米兵に求めればチョコやチューインガムが貰えるという噂があり、それに引き寄せられたようだった。

物欲しげな私たちの姿がそこにはあったのだろう。

突然、米兵がパラパラとガムを撒いた。瞬間、仲間がワッと走った。なにごとにも要領が悪い私は出遅れた。ガムを拾い損ねたのである。

そのためか、その時偶然、遠巻きにしてこれを見ていた近所の母親の、何人かの顔が目に入ってしまった。それは仕方なさそうに気弱な笑みを浮かべた顔々だった。

あの時私は、何もできない親の悲しみ、というのを見てしまったのである。

占領下における貧しい敗戦国のひとりのこどもが体験したあの時のあの感情は、後に知ったことばで言い表せば「屈辱」というものだったろう。

しかし一方で、このチューインガムには自由で陽気なアメリカの匂いがしたという同世代の思い出もたくさん聞いている。私にもその豊かさへの憧れはあった。この世代特有の屈折した哀感が、そこにはあるように思う。

終戦の日からちょうど1年後の1946年8月、私たち鵜沼海岸のこどもは第三国民学校から分離して出来た「鵜洋国民学校」（現・鵜洋小学校）へ移った。

新しい平和の時代のはじまりであった。

<追記>

当時7歳の<私の記憶>に残る終戦前後の出来事を以下に2，3追記したい。

1) 鵜沼海岸にも爆弾が落とされたこと

いつのことかは覚えていないが、その光景は脳裏に焼き付いている。

むかし小田急線・本鵜沼駅と鵜沼海岸駅との間に極々小さな鉄道橋が架かっていた。その橋近くの海岸（西）側に落ちたのだ。東側には桃畑があった。

見に行くと大きな穴があき、底には茶褐色の泥水が溜まっていた。「こんなんでもやられたら家なんかひとたまりもねえやなあ」とか「防空壕なんか役に立ちやあしねえや」と感心してしゃべっていた大人たちのことも覚えている。

後に、この時のことを近所の年配の人に話したら、「それは東海道線の引地川鉄橋を狙って落とされた爆弾のことじゃない？」と言われて、自分の記憶に自信をなくした。

戦争末期、鵜沼海岸でみたあの爆弾の穴の光景は、しかし夢ではない。どこかに記録があるのかもしれないが、当時の子供の記憶証言として書いた。

2) 機銃掃射で木造家屋が半壊したこと

現マリンロードの西北の端、浜通りへ出る直前、斜めに右折する小路があ

る。その小路はすぐまた二又に岐れるのだが、その三角になった所の家が機銃掃射で破壊されたと、当時、通学の行き帰りの子どもたちの話であった。話に尾ひれがついたのかもしれないが、その折、お婆さんが一人亡くなったとも聞いた。

またこれは米機が母艦へ戻る際、ここで捨て弾を撃ちこんで行ったのだとも聞いた。どこから仕入れるのか、あの時代も子供たちは結構情報通だった。

半壊した木造家屋を怖い思いで見ながら、私もその小路を通った。

そこには、近くに文字碑の道祖神がある。

3) 終戦直後食糧難で心中があったこと

終戦直後、鵜沼海岸でも無理心中があった。食糧に窮してだと聞いた。

ある日の早朝、浅場糸店（現・鵜沼海岸薬局）前で、子供たちもザワザワと一木通りの先を見ながら噂し合っていた。ある別荘で息子が母親を殺し自分も死んだというのだ。当時、至る所でそうした事件はあったが、すぐそばでこんなことが起こったことはショックだった。生々しい恐ろしさを感じた。

これが報道されたかどうか知らない。また当時、親はこうしたことは子どもに何も話はしなかったし、子どもも親に聞くこともなかった。大人同士が話すことを子どもは盗み聞いて、その断片を仲間内で共有した。

この出来事も、ほんとうの話は分からない。

が、これも当時の子供の記憶証言として、ここに書いた。

（やまかみ ひでお）

銃後の守り

榛葉 昭市(会員)

終戦の年・昭和 20 年、私は湘南中学（現・湘南高校）2 年生でした。この辺の学校からは勤労働員の工場へは東京螺子工場へ行く学生が多かったのですが、湘南中学は鎌倉・逗子方面からの通学生が多かったせいか、私達 2 年生は鎌倉市深沢の横須賀海軍工廠深沢分工場への奉仕に行きました。中学 2 年生、未だ社会、

共同生活のこと等を余り知らぬ少年が、戦時昂揚の歌、

君は鋏取れ吾は槌

戦う道に2ツ無し

勝利ゆるがぬ聖戦に

勇み立たるつわものよ

あゝ紅の血は燃ゆる

と、煽動されて藤沢から数キロの道を徒歩通勤での毎日。仕事と云っても初体験の工場内での万力でくわえた鉄片をヤスリでみがいたり、たたいたりの簡単な作業でした。この製品は多分、潜航艇のジャイロスコープの部品ではなかったかと聞いていました。6月から始まった作業も7月には工場移転と、深沢小学校裏山に造られた防空壕の工場への引越し作業まで奉仕。

7月末頃でしたが午前中、空襲警報になり藤沢駅からの通勤途中、今日は工場に行かずに帰りなさいと云われ、小田急線が動いていたので急ぎ片瀬行きに乗り2、3分、本鵜沼駅着直前、電車が急停車。電車が敵機にねらわれたので皆、飛び降りて線路脇の土手にかくれました。その途端、近くに爆弾が落ちわずか数秒後の電車の直撃をまぬがれ、ぞっとしました。

後日、現場を見に行くと直径6m位の穴があいていましたが、周辺は全部畑だったので何も被害は無く、ほっとした所です。

8月15日の玉音放送は、深沢工場の移動した防空壕工場の前で、海軍士官の小太りの小関（でぶ）部員さんの指令で「静粛に！」の一言で聞き入った。

翌日より学校に戻り、何日か経て工場からの通勤手当が出され、一人ひとり貰った封筒を開けるとピン札の百円札が出てきたのを覚えています。誰に有難うとも云えず、黙って戴き家に持ち帰りました。

我が家は農家で一般に言われた食糧の困窮は味わうことはありませんでしたが一大家族、祖父を頭に両親と子供7人、東北・山形県から連れてきた作男（使用人）の計12人の大家族。戦時体制の食糧増産と称されて、祖父の50年も育てた鵜沼名産の桃畑、屋敷続きの土地で造られたデラウエアのブドウ棚、自家用にと造られた養鶏小屋、子供養育の山羊小屋、総て言葉通り根こそぎ処分、廃棄は残念でならなかったでしょう。

危険なことと云えば、屋敷稲荷の森がある所に家庭用の防空壕を造ったが、そこが艦載機の機銃掃射を受けて、こわごわ眺めた思い出があります。

(はしば しょういち)

編集後記

- 今夏は酷暑の連続で、涼しい海風が吹いた鵜沼は一体どこに行ってしまったのかという思いでした。ところが8月半ばの台風発生を機に冷たい空気が入り込み、肌寒い日が続きました。藤沢・亀井野地域に竜巻が起これり多くの被害をもたらしましたが、数年前に鵜沼海岸でも竜巻に襲われ屋根瓦が道路に散乱していたのです。今年に限らず近年の気象は異常で、過去の経験が余り活かせなくなっています。▽今年「戦後70年…」という節目の年。戦後60年の10年前には、大特集 — 語り継ぐ戦中戦後の記憶（会誌91号）というくくりで37名の会員が、それぞれのテーマで書かれています。あれから10年、残念なことに終戦前後のことを知っている会員の数は減りました。今号では「終戦前後の記憶」ということで22名の会員から原稿を戴きました。終戦を迎えた地は皆さん異なりますが、戦争を二度と起こしてはならない、いつまでも平和でありたいという思いは皆、同じです。安保法制が審議されている中、戦争はダメという強い思いが皆さんの原稿ににじみ出ています。（弥）
- 10年前に続く今号の終戦前後の記録。当初、鵜沼地域について原稿を書いてもらう案だったが、書き手は相当限られてしまう。ということで、終戦を迎えた地は問わずに、当時の記憶を残してもらうよう原稿依頼した。太平洋戦争の苦しい思いは、今後も日本人一人ひとりの胸のうちに残り続けるだろうが、10年後にまた同じような特集を組むのは難しいかもしれない。（有）
- 終戦のとき中学以上だった方には、当時のことは思い出したくないという方が多い。もっとも多感な時期に辛い思いと、価値観の激変に遭遇されたからのもっともである。しかし、今語らねば、という思いを抱かれているのも事実である。会員の体験を読者はどう読まれるか、読後感を聞かせて欲しいものである。▽日本民藝館見学は面白かった。緑陰の東大構内散策も素敵だった。近代文学館の児童雑誌展は懐かしい雑誌に出会えた。駒場公園と駒場野公園とがあって紛らわしかった。前田侯爵邸は入れなくて残念だった。（T.O）
- 沢山寄せられた戦争体験談の中には、今まで一度も口に出すことすら出来なかったという方が、「ここに発表し皆さんに知ってもらうことで少しでも供養になるかと思って」と、鎮魂の思いで書いてくださいました。他にも、何らかのかたちで残したいと思っているが今回は間に合わなかったという方もいらっしゃるようですので、いつでもお待ちしております、とお伝えしました。（柴田）
- 今年はまた、鵜沼を語る会創立40周年の年でもあります。いくつか記念行事を企画していますが、記事にするのは次号になります。

鵠沼の思い出

中島 誠之助(古美術鑑定家)

小学校三年までの幼年時代を神奈川県藤沢市鵠沼海岸で過しているの、私にとって鵠沼の風光は特に思い出深いものがある。松林に延びる砂地の小道をはさんで別荘の竹垣が続き、海岸から望めば江の島がキューピーの寝ているような姿で浮かび、真昼の海はキラキラ輝いている。小田急の駅を降りると鵠沼書店と料亭丸政と鵠沼薬局があり、海岸に向かって商店街が続いていた。

鵠沼や枕に響く土用波

娘の由美が講師を務めるカルチャー教室が横浜で開かれ、生徒の一人から手紙を託されてきたという。生徒と言っても年配のご婦人で、知り合いの有田さんからの言伝ですと渡されたそう。有田さんと言われてピンときたのは、鵠沼時代の同級生のヒロカズちゃんのことだ。文面はまさに有田裕一さんで「もしや中島さんは、あの時の白川誠之助くんではないでしょうか。間違えでしたらばこの手紙は捨ててください」とある。

有田さんの家は鵠沼では老舗に入る商店で、裕一さんは長男で妹が禮子ちゃんの兄妹だ。裕一ちゃんは頭のいい少年なので、私の養母の白川晴子が友達になるようにと望んで、いつも私を有田家へ遊びに行かせていたのだ。だから有田家の間取りから庭の池まで、今でも私はしっかりと記憶に残っている。

そんな有田さんのお蔭で、私は鵠沼とのつながりが五十年ぶりに復活した。懐かしい鵠沼へは、わざわざ新宿駅から小田急で行った。藤沢駅から江の島行の支線に入れば沿線の風景こそ変わっているが、記憶の中の風景と一致する。本鵠沼をすぎれば本真寺の麓が見えてカーブを曲がると鵠沼海岸だ。第三(鵠沼)国民学校へも分校の鵠洋小学校へも、このあたりの道を通っていたのだ。

改札口で有田さんが待っていてくれた。半世紀以上昔の面影は確かに残っているが、お互いなんとなく恥ずかしい感じだ。有田さんのお父さんに召集令状(赤紙)がきて、日の丸を掲げて駅まで送って行ったことを覚えている。あれは戦争の最末期で、敗戦ですぐに帰ってきてその日から店で働いていた姿を思い出した。

有田商店の斜め前あたりにある、柳川という床屋が健在だった。戦前のままの佇まいで、店に入って待合の椅子にもたれたならば一気に幼年時代が蘇った。あ

の日あの時、アメリカ兵が上陸してきて小田急線のホームに英語の駅名が書かれた。それまで英語は敵性用語で禁止されていたから、子供心にも戦争に負けたことが現実となった。華族や財閥の立派な別荘が次々と接収されて、門柱に黄色のペンキでF1と番号が書かれた。F16まで記憶しているから、多分十六軒の別荘が占領軍将校の宿舎になったのだろう。

ずぶ濡れの着物掘り出す敗戦忌

デパ地下に美食あふれて終戦日

敗戦直後は極度の食糧難で、毎日の食べるものが尽きていた。夕方近くになると「セイちゃん、ザンパン貰っておいで」とごはん蒸し器を持たされて、接収された別荘の裏口に町の人たちと並んだ。日が暮れると占領軍に雇われている顔見知りのメイドさんが、こっそりとアメリカ兵の食べ残した食事カスを鍋や鉢に分けてくれる。

戦争中の毎日、まともな食べ物を口にすることがなかったものだから、この残飯のなんと美味しさだったことか。私は食べたことのない洋食で頭がボーッとした。だから、あれから七十年も経つというのに「ザンパン」という言葉を口にしたりにただけで、いまだに条件反射でベロの下から、唾がジワッと湧き上がるのだ。

仕立屋の息子の飯田キコにも会った。父親が別荘の広田弘毅のお出入りで、畏れ多いから弘毅を逆にして名前を頂いたのだと初めて聞いた。牛乳屋の浜野ユウゾウもいた。彼と電気屋のタカサキには、私はいつもいじめられた。皆で一緒に鵜沼名物のシラス丼を食べて、時の過ぎるのも忘れて話し込んだ。だけど私はザンパンのことは言わなかった。あまりにも悲惨な話だったからだ。

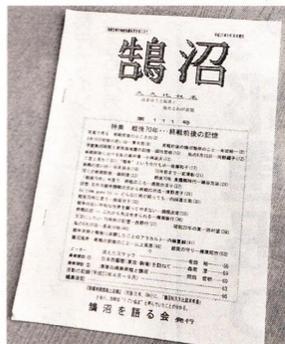
(なかじま せいのすけ)



中島誠之助氏は、この原稿を会誌『鵜沼』に寄稿されると共に、産経新聞に『鵜沼』第111号—特集 戦後70年…終戦前後の記憶—を読んでの思いを寄稿されました。2月19日の産経新聞朝刊神奈川紙面に大きくとり上げられているので、次ページに紹介します。

(編集部)

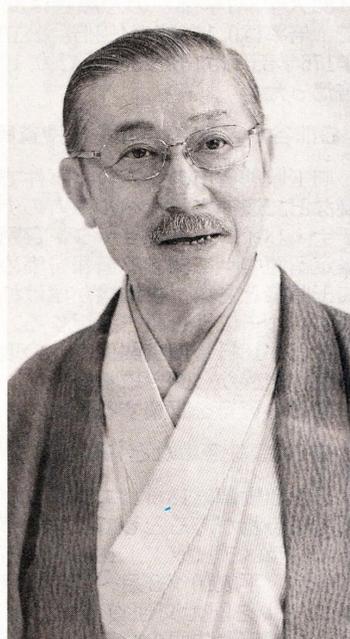
小冊子「鶴沼」111号



藤沢市の市民グループ「鶴沼を語る会」が昨秋刊行した小冊子「鶴沼 特集 戦後70年」を読んだ古美術鑑定家、中島誠之助さん(77)から「その内容をぜひ紹介したい」と本紙に原稿が寄せられた。昨年の戦後70年で痛感させられたのは戦争体験者の高齢化。証言収集の試みにもタイムリミットが迫る。中島さんの「戦後80年に私たちはもういない」という言葉がずしりと重い。

藤沢市民グループの小冊子を読んで

鶴沼の終戦前後を知って



< なかじま・せいのすけ > 昭和13年、東京生まれ。1歳の時に鶴沼に移住して幼少期を過ごした。『開運!なんでも鑑定団』(テレビ東京)に出演中。東京・青山の「骨董通り」の名付け親。

私は幼年時代を藤沢市鶴沼海岸で過ごしている。だが、地元在住の竹馬の友から送られてきたホットキス止めの小冊子「鶴沼」の特集「戦後70年：終戦前後の記憶」には、私の知らなかったことがたくさん記されていた。
湘南海岸を上陸地点と想定したアメリカ軍による「コロンネット作戦」の発動予定日は昭和21年3月1日。戦争が長引けば、辻堂と鶴沼は「日本のノルマンディー」になっていたのだという。最前線になるかもしれない海岸地帯で、敗戦をはさんで数年間を暮らした人々の生活が、冊子には生々しくつづられている。

古美術鑑定家 中島誠之助

私たちはより少し上の世代には、終戦時のことは思い出しにくいという人が多い。軍国少年・軍国少女から占領下の民主主義へ、価値観の激変でつらい時期を送ったからだろう。しかし、いま語らなければという決意のもとに寄稿された文章が並ぶ。
学校の行き帰りに戦闘機に機銃掃射された少年たちは、逃げ回りながらも「俺の鼻先で屁こくな!」と明るい。長崎に疎開した少年は原爆に遭遇した惨状を記す。大人たちと玉音放送を聞いた体験談がある。夜に明かりをつけて家族と過ごせる毎日のうれしさが語られる。鶴沼に進駐した米軍は邸宅を次々と接收して
将校用の宿舎にしていく。子供たちはチューインガムをもらい、その甘さにアメリカを嗅ぐ。
冊子を読み通すと、戦争を体験した人々の、語り尽くせない思いまで伝わってきた気がした。次の区切りとなる戦後80年を迎えるとき、私たちはもういないかもしれない。いま、平和の大切さを伝えなければならぬという強い信念が、全編に満ちている。
◇ (寄稿)

小冊子「鶴沼」についての問い合わせは、鶴沼を語る会 (<http://kugenuma.sakuran.eip.jp>) へ。

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 1 号

鵠沼を語る会創立30周年記念号その1 大特集 語り継ぐ戦中戦後の記憶

私の八月十五日	鈴木三男吉 ...	1
海岸の悪童が偶然目撃した忘れられぬ三つの情景	内藤 喜嗣 ...	5
会員の語り継ぐ戦中戦後の記憶	(題名は見開きに記載)	
青木 悠(17) 池田 勝彦(18) 伊藤 聖(19) 植松 民也(20)		
佐藤 和子(21) 佐藤久美子(22) 佐藤 弘(23) 狛倉 健(24)		
杉本 辰夫(25) 高田 清祐(26) 高塚 正子(27) 竹内 広弥(28)		
竹田 祐紀(29) 中川原良子(30) 原 雅子(31) 宮澤 彰(32)		
山本 高雄(33) 渡部 瞭(34) 浅沼 正城(35) 浅野 陽子(36)		
穴山 雄一(37) 内田 英一(41) 有田 裕一(42) 河野 顕子(43)		
岡田 哲明(44) 小林 政夫(46) 桑原 玲子(47) 永井 久子(49)		
中島 明(50) 渡部かほり(51) 綿谷 克延(52) 榛葉 敏行(53)		
細谷 縫子(54) 六浦美智子(55) 矢田 健爾(57)		
「鵠沼を語る会」活動の記録	総 務 部 ...	59
編集後記		62

『新編相模風土記』(天保13年、1842)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

大特集 語り継ぐ戦中戦後の記憶

私の八月十五日	鈴木 三男吉	1
海岸の悪童が偶然目撃した、忘れられぬ三つの情景 ...	内 藤 喜 嗣	5
思い出したくない戦中時代	青 木 悠	17
私の戦中・戦後	池 田 勝 彦	18
昭和21年6月-23年12月の金銭出納簿	伊 藤 聖	19
日本はこれでいいのか? -私の戦中戦後史から- ...	植 松 民 也	20
風化することない戦争中の日々	佐 藤 和 子	21
戦中・戦後を垣間見て	佐藤 久美子	22
生まれて最初の記憶=染みついたもったいない精神= ...	佐 藤 弘	23
高瀬の池の思い出	梶 倉 健	24
戦中・戦後の学生生活	杉 本 辰 夫	25
子 供 の こ ろ	高 田 清 祐	26
思い出すままに	高 塚 正 子	27
自分の戦後はいつ終わったのか	竹 内 広 弥	28
私 の 終 戦	竹 田 祐 紀	29
戦争の悲惨さを次世代へ伝えることを忘れまい	中川原 良子	30
叔 父 の 戦 死	原 雅 子	31
戦中の思い出	宮 澤 彰	32
私の昭和二十年	山 本 高 雄	33
物 心 と 戦 争	渡 部 瞭	34
学徒動員回顧	浅 沼 正 城	35
戦 災 の 記 憶	浅 野 陽 子	36
第二次大戦敗戦前後の我が家	穴 山 雄 一	37
海の家でダンスパーティー	内 田 英 一	41
私の戦中・戦後 ~思い出すままに~	有 田 裕 一	42
私の八月十五日	河 野 顯 子	43
或る没落した家の話	岡 田 哲 明	44
東京最後の空襲の日の体験	小 林 政 夫	46
戦争に重なる顔	桑 原 玲 子	47
私の戦中戦後史 軍国の乙女物語り	永 井 久 子	49
落 書 き	中 島 明	50
青い空と真っ赤な翼	渡 部 かほり	51
銀シャリへの夢	綿 谷 克 延	52
特 攻 隊	榎 葉 敏 行	53
鶴沼から高松へ	綿 谷 縫 子	54
焼夷弾の雨の下で -横浜大空襲体験記-	六 浦 美 智 子	55
戦争の思い出	矢 田 健 爾	57

私の八月十五日

鈴木 三男吉 (会員)

私たちにとって忘れられない、また忘れてはならない1945年8月15日、私はこの日を横浜のある警察署の留置場で迎えることになりました。のちに「横浜事件」と呼ばれ神奈川県特高の仕組んだ事件の一容疑者として、この年の4月10日に鵜沼の自宅で検挙され、それ以来拘禁されていたのです。

当日の朝、^{メシマイ}麴米のまずい朝食を終えた頃、看守の一人(巡查)が私の居る留置場の前までやってきて、「鈴木! どうとう日本はお前たちのいう通りになるぞ!」と行って帰っていきました。この看守は、広島、長崎の原子爆弾のときも、新型爆弾を落としたことを教えてくれましたし、厳しさの中にも何か人間らしさを感じさせるものがありました。この日いよいよボツダム宣言受諾=敗戦の発表のあることを教えに来てくれたのです。私も5月29日の横浜大空襲以来、一番の古株として雑役をやらされていましたので、時には古新聞などを見る機会もあり、敗戦へと急傾斜しつつあることは判っていましたが、こんなに早く終末が来るとは夢にも思っていませんでした。こみ上げてくる喜びをじっと抑えながら、この看守に有り難うを心の中で繰り返していました。

そして翌日の8月16日、早くも釈放となりその日鵜沼の自宅に帰り着いた次第です。

ところで「横浜事件」とは一体どういう事件だったのでしょうか? 小百科辞典といわれている『広辞苑』(岩波書店)では一つの項目として取り上げ、次のように説明しています。

太平洋戦争下の言論弾圧事件。1942年神奈川県特高がでっちあげによる共産党再建謀議の容疑で雑誌編集者ら数十人を検挙した。過酷な取り調べにより獄死者四人を出し、「中央公論」「改造」が廃刊させられた。(『広辞苑』第5版)

1942年9月11日の川田寿(世界経済調査会)夫妻にはじまる神奈川県特高の検挙は、この事件の最後となった1945年5月9日の小林勇(岩波書店)検挙に至るまで、少数のグループ別に十数回にわたって行われ、総数は63名に達し、4名の獄死者を出しました。事件の事実を要約すれば上の『広辞苑』の説明通りですが、私がどうしても納得できないのは、言論を弾圧するためになぜ「共産党再建謀議の捏造」が必要であったか、ということです。しかもこの謀議を捏造するため、神奈川県特高の名を馳せた暴虐極まる拷問が虚偽の事実を自白するまで続けられたのであります。

言論の弾圧はこの横浜事件とは関係なく、すでに堂々として行われていました。評論家細川嘉六の「世界史の動向と日本」という論文を1942（昭和17）年8月・9月号の二回にわけて掲載した総合雑誌『改造』は、情報局の検閲をすませたにもかかわらず、「日本読書新聞」の9月14日号に掲載された陸軍報道部長谷萩大佐の一言によって発売禁止となり、執筆者細川氏もまた警視庁に逮捕されました。この背後には報道部の顧問的役割をしていた右翼団体の示唆のあったことはもちろんであります。

一方神奈川県特高は、このこととは関係なく川田寿氏関係者の家宅捜査を行っているさい、ある容疑者のアルバムから一枚の記念写真を発見したのです。そしてその写真の後列中央に立っているのが、軍部によって共産主義者であるとレッテルを貼られ、すでに逮捕されていた細川嘉六であることが判ったときの神奈川県特高の喜びは、想像にあまるものがあります。「共産党再建謀議」はこの写真から神奈川県特高の頭の中に描かれ始めたのです。

この写真は、細川氏が東洋経済新報社の出版企画「日本文明史」の中の一冊『植民史』を担当したさい、その完成記念に、編集担当の加藤政治氏をはじめとし改造社、中央公論社、満鉄調査部の友人たちを、自分の郷里富山県泊町の旅館「紋左」に招待して一夜を過ごしたときのもので、写したのは出席者の一人西尾忠四郎氏です（したがって西尾氏はこの写真には写っていません）。楽しい一夜の歓談が、多くの犠牲者を出した横浜事件に化したのは、こういう次第です。

細川嘉六氏は、「再建謀議」が特高の頭のなかで構築されていくとともに、東京の拘置所から横浜の拘置所へ身柄を移され、終戦時にはこの写真のなかにいる人々と房を共にしていました。そして8月15日の朝、その中の一人木村氏に次のようなレポを伝えたそうです。



「横浜事件」フレームアップのきっかけとなった写真。この一葉の写真をもって、特高は「共産党再建の会議」ときめつけた。前列左より、平館利雄（満鉄調査部）、木村亨（中央公論社）、加藤政治（東洋経済新報社）、相川博（元改造社）、後列左より、小野康人（改造社）、細川嘉六、西沢富夫（満鉄調査部）

「木村君！当局のわれわれに対する拘禁は全くの不法拘禁で許せない。総理大臣か司法大臣がこの刑務所へやってくる、われわれの前に両手をつけて『悪うございました』と謝らない限り、断じてここは出てやらぬ腹を決めたまえ。」

いま考えてみれば確かに細川氏のいわれるとおりですが、一日も早く疥癬の攻撃からも逃れたいと思っていた私たちには、この決心はつきませんでした。この疥癬も非常に手強い敵で、戦後の活躍を期待されていた哲学者三木清が、惜しくも獄中で病死したのも、この疥癬が原因といわれています。

もしこのレポを実行していたらどうなっていたでしょうか？ それを思うと残念でなりませんが、私たちは敗戦後直ちに^{ささげ}笹下会という被害者の会をつくり、一つの集団として拷問をくわえた神奈川県特高たちを告訴することにしました。

結局この告訴は「特別公務員暴行傷害事件」として被告28名原告33名の大きな訴訟となり、原告の33名はそれぞれ自分の受けた拷問の状況を供述書として書いて提出しました。これらの供述書は「弁護士海野普吉」刊行会によって一本に纏められ現在も貴重な資料として残されています。

しかしこの結果は、33名のうちただ一人（益田直彦氏）の傷跡が証拠として認められただけで、拷問を加えた3人の特高にそれぞれ懲役1年半、1年、1年の実刑判決が下されました。告訴したのが昭和22年4月25日、最初の判決が下されたのが、昭和26年3月28日です。被告側は直ちに控訴しましたが却下、更に上告しましたが、それが最高裁により棄却となり、最初の実刑判決が最終決定されたのが昭和27年の4月24日でした。私たちはこれによってひとまず安堵の胸をなでおろしましたが、後で聞いた話では、本人たちは刑務所に入っていないということです。最終的に刑が確定した昭和27年4月24日の4日後の4月28日に講和条約が発効して「特赦」になったからです。私はこれを知り、「横浜事件」とは最後まで謀られた事件であったことをしみじみと感じた次第です。

これで終わるならば、横浜事件の末席に列った被害者の一人が鶴沼に住んでいたということに過ぎませんが、鶴沼は赤い糸ならぬ黒い糸で当初から横浜事件と結ばれていたようです。拷問実行の中心的な存在でその責任を問われるべき特高の住居が、当時からこの鶴沼に在ったのです。そこに住み、横浜へ通勤していたかどうかは別にして、私たちが特高を告訴したときの告訴状にはその住所が明記されており、後日鶴沼地区の住居明細地図ができたときにも、その姓名が明確に示されていました。しかも私の家とそれほど遠くないところですよ。これもまた不思議な因縁です。

この特高は戦後東京で食べもの屋をしていましたので、笹下会の人びとが真相の一部でも聞けるかも知れないと訪れましたが、詫びる言葉もなく、公務員は退職後も秘密を守る義務があるといって、事件には一切触れなかったそうです。

結局真相は判らないまま現在に至っていますが、60年以上も経た今日、私たちは「こんな国に誰がした」よりも「こんな国に二度としない」ほうが大切だと考えています。

検挙された主な言論関係の人々

- 〈世界経済調査会〉川田 寿、高橋善雄、諸井忠一、益田直彦
〈満鉄調査部〉 青木了一、平館利雄、西沢富夫、西尾忠四郎、内田丈夫、手島正毅
〈改造社〉 相川 博、小野康人、水島治男、青山鉦治、小林英三郎、若槻 繁、大森直道
〈中央公論社〉 小森田一記、畑中繁雄、藤田親昌、青木 繁（青地 晨）、沢 赴、木村 亨、浅石晴世、和田喜太郎
〈日本評論社〉 美作太郎、彦坂竹男、松本正雄、鈴木三男吉、渡辺 潔
〈岩波書店〉 藤川 覚、小林 勇
〈朝日新聞社〉 酒井寅吉
〈その他〉 加藤政治、那珂孝平

主要な文献

- ・畑中繁雄『覚書昭和出版弾圧小史』（図書新聞社、1965年）
- ・青山憲三『横浜事件―「改造」編集者の手記』（弘文堂、1966年）
- ・美作太郎・藤田親昌・渡辺潔『横浜事件』（日本エディタースクール出版部、1977年）
- ・中村智子『横浜事件の人びと』（田畑書店、1979年）
- ・木村 亨『横浜事件の真相―つくりられた「泊会議」―』（筑摩書房、1985年）
- ・黒田秀俊『横浜事件』（学芸社、1975年）
- ・笹下同志会編『横浜事件資料集』（東京ルリユール、1986年）

★この小文を書くにあたり、改めて上記の資料を読ませていただき、著作権を持つ方々のお許しを得ず、直接・間接に引用しましたことをお詫びすると共に厚く御礼申し上げます。
(すずき みおきち)

海岸の悪童が偶然目撃した 忘れられぬ三つの情景

内 藤 喜 嗣(会員)

その1 日本本土初空襲

1941(昭和16)年12月8日、ハワイ真珠湾攻撃から太平洋戦争が始まって4か月後の昭和17年4月18日に、アメリカは意表を突いて報復の日本本土への初空襲を行いました。この空襲は16機の中型の爆撃機を使い、東京をはじめ、川崎、横浜、名古屋、四日市、神戸を襲撃し、中国浙江省の奥地の飛行場に逃避したものでした。

私は64年前の当日、ほんの2、3分この爆撃に向かう、飛行機(敵機)1機が江の島の西浦を掠めるように飛び去るのを目撃したのです。

目撃当日の朝からの状況を振り返って見ますと、当時小学校1年生でしたが、1学期が始まり、朝礼での体操の締めくくりは新しく取り入れられた全員でワッショと掛け声を掛けながらの「天突き体操」10回と、約5分間、上半身はだかの体を乾布摩擦で鍛えた後、駆け足足踏みに移り上級生から順に、一列で走って足洗い場(1坪ほどの長方形で約10cm水がはってある)に行き、水を蹴立て通り抜け、各教室に入り、自分の席に着席しました。

横道に逸れますが、これは湘南学園のことで、前年の4月に着任した、八木園長と松田教頭は、満鉄の青年学校から来られた厳格な先生であったので、別荘族のおぼっちゃん、お嬢ちゃんのひ弱さに呆れ、年が明けると保護者を集め「新学期からは体をビシビシ鍛える」ことを告げ、「休ませないように」といい渡していました。

普通は一時して先生が来て、修身の授業から始まるのですが、突然サイレンが鳴り出しました。以前演習では聞いていましたが、音の切れ方から判断すると警戒警報で、初めてのことでした。しばらくして先生と6年生の週番がやって来ました。そしていつも弁当の時に貰う「肝油のゼリー」が配られました。そして帰り支度をして、校庭に集合するよういわれ、校庭に全校生徒が集まると、帰宅方面毎に分けられ班が創られました。この班は終戦まで組まれていました。

そんなこんなで、11時近くになって、その日は班毎に6年生が引率して帰宅することになり、てっきり演習だと思っていました。

家に着いてしばらくすると、片瀬海岸の班を引率していた、兄の友人の富田さんが腹が痛い、駆け込んで来ました、母は仕方がないと片瀬の班はしばらくわが家で休んでから帰ることにしました。庭の芝生の築山で車座になったり、寝転んだりしていました。富田さんはその日の週番の役得で、肝油のゼリー(今のグミのような口当たりで、砂糖が塗^{まぶ}してあって美味かった)のつまみ食いのし過ぎが祟ったようでした。

突然静かな庭に、グアーンと押さえ付けるような今まで聞いたことのない爆音が響いて来ました、みんな驚いて海の方角を見ると大きな飛行機(当時では)が江の島すれすれに飛んでおり、高度を上げるための音でした。そして誰かが「あれは星のマークだ、敵機だ」といったので皆朝のサイレンを思い出しばっかりしましたが、飛行機は何事もなく高度を上げながら飛び去って行きました。そして、この湘南地区には空襲警報のサイレンは鳴らなかったと思います。

開戦4ヶ月、昭和17(1942)年4月18日

報復の日本本土初空襲



● この空襲はアメリカではドゥリットル隊の爆撃計画と云われ、空母ホーネットに積まれ日本近海まで運ばれた、双発中型爆撃機16機により行われた

私達が目撃した本土初空襲に使用されたノース・アメリカンB-25双発中型爆撃機で陸軍の飛行機なので機体は黄土色でマークも丸と星を組み合わせた。正午一寸過ぎだったと思うが、押し付けるようなゴアーンという大きな爆音を発して、通過して行った。海面すれすれで侵入、急上昇しながら北東にただ一機のみで飛んで行った。藤沢市域では被害なかった。

アメリカ陸軍航空隊 B-25 の性能
 アメリカ ノース・アメリカン社製 NA40A
 双発中型爆撃機 41ft×17ft×1200
 最大速度 206ノット 2機5機編隊
 最大高度 20,600ft、長さ15,6メートル
 乗員 7人(通常 機長、操縦、操縦、操縦、機長、機長、機長) 11人の乗員で飛行
 乗員 通常5名(操縦士2、爆撃手1、通信士兼射撃手2)
 性能 最大時速 496キロ、巡航時速 392キロ
 航続距離 4240キロ

その日の新聞の夕刊から報道がなされましたが、今読み返して見ると、開戦来破竹の進撃中の日本軍の戦果に沸く日本本土への敵機の襲来に動転した軍司令部はデタラメを発表、報道させたものだと思います。

※ 当日の朝日新聞の夕刊(昭和17年4月18日付)

けふ帝都に敵機襲来

九機を撃墜、わが損害軽微

東部軍司令部発表(十八日午後二時)一、午後零時三十分ごろ敵機數方向より京濱地方に來襲せるも、我が空地兩航空部隊の反撃を受け、逐次退散中なり、現在までに判明せる敵機撃墜數は九機にして我が方の損害軽微なる模様、皇室は御安泰に互らせらる

沈着な隣組の大活躍 當局幕僚談

十八日午後爆彈落下現場を視察した當局幕僚談
焼夷彈が落下した現場では隣組防火班は平素の訓練通り沈着に消火に任じてゐた、焼夷彈の威力は大したものではなかつた

※ 翌日の朝日新聞の朝刊(昭和17年4月19日付) 一面

我が猛撃に敵機逃亡

軍防空部隊の士氣旺盛

東部軍司令部発表(十八日午後四時半)

- 一、皇室は御安泰に互らせられる事は我々の等しく慶祝に堪へざるところなり
- 二、防空監視隊の敵機發見およびその報告極めて迅速にして適時空襲警報を發令し得たり
- 三、敵の空襲は空地防空部隊の奮闘と國民の沈着機敏なる行動とにより被害を最小限に止め得たり、國民各位は更に防火消火の準備を促進せられたし
- 四、敵は若干の爆彈のほかは焼夷彈を主として使用せり、焼夷彈は二キロのものなるが如くその威力は何ら恐るゝに足らざるも、屋根を貫きたる後、天井裏にとどまるものあり特に注意せられたし
- 五、軍防空部隊も初めて災敵に會し士氣極めて旺盛、更に來るべき敵に對し益々戦備を密にしあり
- 六、敵の爆撃により死傷せられたる軍官民各位に對し深甚なる哀悼の意を表す

各地區の警報を解除

名古屋、神戸の被害も軽微

中部軍司令部發表 十八日午後愛知地區に空襲警報發令せり、引續き東海地區、京近畿地區、北近畿地區に空襲警報發令せり

中部軍司令部發表 (午後三時)(一)本日午後一時三十分頃 敵機二機名古屋を空襲し爆撃せるも被害輕微なり (二)また同二時三十分敵機一機神戸を空襲し焼夷彈を投下せるも大なる被害なし (三)國民諸君は今こそ勇戰奮闘して防空必勝を期すべし

中部軍司令部發表 (午後四時)(一)名古屋付近には六箇所焼夷彈を投下せるも目下ほとんど鎮火せり(二)神戸には三箇所に焼夷彈を一箇づつ投下せるも目下鎮火せり(三)三重縣四日市および和歌山縣下も地方農村に機關銃射撃を加へたるも我が損傷なし

中部軍司令部發表 (午後六時五十分)東海、南近畿、四國東、東中國各地區の空襲警報を解除せり

西部軍司令部發表 (十八日午後六時三十分)(一)帝國國土東部中部地方に對して敵機若干は初めて空襲したるも損害僅少なり(二)その一機は午後四國室戸岬南方海上に現出せるをもつて、軍は直ちに空襲警報を發令せるも敵機は軍管下防衛の適切なる手段により遂に管内に侵入する能はず(三)軍管内國民は一層警戒を密にし 特に防衛態勢の確立を促進すると共にいよいよ訓練を徹底ならしめ以て敵の再來に萬全を期さんことを望む

沈着冷靜機敏な處理

十八日の敵機空襲はわが軍防空の奮闘と、全國民の沈着機敏なる動作によって被害は最小限度に止められ、敵國に企圖達成の餘地を與へなかつた。しかして今回の敵空襲の企圖を省察するに敵國は大東亞戰爭勃發以來四箇月餘南方戰場の至るところに、皇軍勇士のため連戰連敗を喫し大東亞共榮圈全體にわたる攻略、既定作戰において、殆ど問題にならぬ一方的な我が勝利に歸した確たる事實の前に焦燥の念拭ひがたきものあり、この決定的頽勢を一舉にして挽回する企圖の下にここにわが本土空襲を企圖するに至つたものであらう、しかるにこの敵の企圖もわが國土に損害らしき損害を與へ得ずして撃退せしめられるに至つた。この日の防空に示されたわが國民の沈着にして冷靜機敏、そして活躍を語る美談の数々は、よくわが國民の精神力と訓練、大國民としての信念を遺憾なく吐露したものであつた。敵はさらに今回のやうな神經戰的な我が本土空襲を企圖し來るものと當然

覚悟しなければならぬ、國民は今後もますます國土防衛の完遂強化につとめ祖國の土を舉國一致して挺身防衛しなければならぬ。

(以下略、三面記事等関連資料は、鶴沼郷土資料展示室に「報復の日本本土初空襲資料」として所蔵されている。閲覧可能)

この空襲で全く報道されなかったのは、軍需工場での被害でした。空襲に参加した敵機は空母が日本軍の管制に掛かったことから緊急発進により編隊が組めず、誘導に支障があったようでしたが、京浜地区に来襲した米軍機の過半数は確実に京浜工業地帯、横須賀海軍工廠、名古屋、四日市等で空襲の戦果を上げていたことが、後日の調査で判明しています。

当時の日本政府、軍部は相当強い報道管制を布いたようで、多くの事実が隠された他、4月20日に今後の空襲の可能性と國民の覚悟の喚起のため、本土空襲を狙う米国の十機種の高距離爆撃機を写真付きで報道した以降は、この空襲に関する報道はなされませんでした。

この空爆を米国の側から見た視点

昭和16(1941)年12月8日早朝の真珠湾攻撃、東南アジアへの進攻で始まった太平洋戦争は、緒戦における日本軍の予想外の破竹の進撃に連合軍は応急対策に追われ、何とか真珠湾の報復として一矢を報い、戦意高揚を図りたいが日本本土は島国でありヨーロッパで活躍中のB-17高距離爆撃機をしても爆撃後の退避航続に問題がありました、超空の要塞と云われた超長距離爆撃機B-29の開発を指揮し、先付けオーダーまでしていた陸軍航空隊総司令官ヘンリー・H・アーノルド大將(後元帥)は実戦配備まで1年余を要するB-29以外の奇策を練らざるを得ませんでした。そこで米国艦隊司令長官兼海軍作戦部長のキング提督と日本本土空爆の計画が練られ、東京爆撃を要望していたルーズベルト大統領の了承を得、実施することになりました。

この日本本土空爆計画は、航続距離の長い陸軍の中型爆撃機を空母に積み込み日本近海から発進させ、日本本土を爆撃したのち中国の非占領地域にある飛行場に着陸させるというものになりました。爆弾を積んで滑走距離の短い空母の甲板から発進し洋上遠く爆撃を行い、さらに中国の飛行場にまで飛ぶためには乗員の高い技量が求められました。そこで白羽の矢が立ったのは、様々な飛行記録を持つ著名な飛行家ジェームス・H・ドゥリットル中佐で、この困難な計画の実施の

指揮官に任命されました。

彼はこの計画にノース・アメリカンB-25双発中型爆撃機を使用することを決め、部隊を編制しました。この部隊は短距離発進、超低空飛行の猛訓練を受けたのち、最新の高性能の爆撃照準器等の装備が日本軍の手に渡らぬように、旧式の装備に積み替えられたB-25 16機が積み込まれたハルゼイ中将の率いる第16機動部隊が空母ホーネットで4月2日にサンフランシスコ・アラメダ基地を出陣しました。

ドゥリットル隊の初期の作戦計画は、4月19日の日曜日の夕刻に東京の東方500マイル(805キロ)の地点で発進し、東京、横浜、名古屋、大阪、神戸を爆撃した後、中国浙江(チョーチャン)省の奥地にある麗水などの飛行場に着陸するというものでした。ところが、予定より1日半早い18日の早朝、この機動部隊は東京の東方約700マイル(1120キロ)の地点で日本の哨戒艇第二十三日東丸に発見されてしまいました。(第二十三日東丸は打電後間もなく米軍に撃沈されました)ハルゼイ中将は位置を知られたとして、予定を変えてB-25全機のただちの発進を決断しました。

ドゥリットル隊は予定をはるかに超えた長距離を飛行することになり、編隊を組むための燃料の消費も惜しんで、隊長機を先頭に一列になって飛行し、各機ごとに目標を爆撃して脱出することになりました。

空爆の実況

緊急発進したB-25 は隊長機を先頭に一列に海面すれすれの超低空で西進し、日本本土に接近、18日正午頃、水戸付近の沖で各機目標に向け変針、逐次、日本本土上空に侵入しました。

関東地区に侵入したB-25 は13機で600メートル内外の低空で1機ずつ12時15分頃から荒川区尾久や淀橋区(現新宿区)早稲田鶴巻町付近に来襲し、爆弾や焼夷弾を投下、機銃掃射も行いました。帝都では空襲警報が発令されたのは12時25分で敵機が来襲してからでした。横浜は午後1時前後だったようでした。

東部軍司令部は第二十三日東丸からの打電で米機動部隊の接近を知ると、ただちに警戒警報を発令しました。しかし艦載機の航続距離からみて、機動部隊は日本本土への接近を続けて翌19日早朝に本土空襲を行うだろうと想定して対策を立てました。空母が航続距離の長い陸軍機を乗せてこようとは、日本軍の常識では思いも及びませんでした。また、米軍機が超低空で接近したうえ、遅ればせながら防空監視哨が敵機発見の報告を東部軍司令部に送ったにもかかわらず、当初の

判断を変えず、空襲警報を出さずに情報の審査に取り掛かったため、敵機は易々と襲来し、日本軍の迎撃は遅れ、低空飛行の敵機には高射砲の炸裂高度が合わず、防空飛行隊もこれを追尾出来ず、無傷で脱出を許しました。

しかし米軍側にも厳しい試練がありました。日本海に脱出した米軍機は一機は故障のため最短距離にあるウラジオストックに飛びソ連官憲に押収抑留されました。

外の15機は中国まで飛んだものの到着が夜であり、日時の変更の連絡が機密上で不備があり、不時着、着水、墜落等無事な着陸はなされませんでした。そのうえ2機は日本軍の占領域に不時着し乗員8名は捕虜となり、見せしめとして10月に3名が処刑されました。

その2 B-29爆撃機の墜落

飛来した数え切れないほどのB-29爆撃機のうちの1機が江の島の南西沖に墜落しました。

1945(昭和20)年4月15日の夜遅く、警戒警報のサイレンが鳴り、ラジオの東部軍管区情報の敵機襲来の警報の終わらぬうちに、轟音が響いてきました。早速照射された赤山の探照灯に照らされたB-29は東京大空襲の時と同じく低空で、西から東へ京浜地域に向かういつものコースをつぎからつぎと、時たま作裂する高射砲におかまいなく飛んで行きました。

しばらくして灯火管制でいつも真つ暗な東の空が薄赤くなったほど、またしても京浜地域が爆撃を受けました。

一時後、異様な金切音の爆音が響いて来ました。急いで庭先の砂山に出て、音のする方角を見上げると、北の空から真つ赤な火の玉がやってきました。早速点灯された探照灯に照らし出されたのは、被弾したB-29で、わが家の上を通過して江の島の稚児の淵の南西沖に墜落して爆発しました。辺りの海面は火の海となりましたが、しばらくして、また暗闇に戻りました。

後日、「赤山の高射砲の止めの一発が命中した」と言う流言がありましたが、真偽の程は定かではありません。

少し経って藤沢警備隊の山下曹長以下の5、6人の分隊が駆けつけて来ました。「伊勢山の監視所から見ていたら、鶴沼海岸に墜落した様に見えたので、参りました、異常有りませんか？」と母に告げていた。父は当夜、当直将校として監視



所に詰めていたので、隊員の計らいで心配して寄られたようでした。隊員は安堵して、海岸の巡視に出て行きました。

翌朝、日の明けるのを待って、海岸に行きましたが、海は静かで、黄色いスポンジの破片が岸に寄せられていただけでした。(近代郷土史研究家の文に、「尾部を空につきだし数日浮いていた…」とあるのは間違い)。午後になってから、いろいろの漂流物が打ち上げられはじめました。中でも悪童連の人気は、擦ると甘たるい好いニオイがした防弾ガラスの破片でした。

登校途中、木下邸の脇門を潜った所に、3センチ程の太さの葉莢の付いた機銃弾が連なって落ちていました。当時の悪童連の戦利品(コレクション)の目玉は不発の機銃弾だったので、目を丸くして喜んだものの、あまりの大きさと量に、恐れをなして1発づつを木の根元に隠して、植木屋のお婆に、「鉄砲弾が落ちてるよ」と告げ、学校に急ぎました。以後の処理は不明ですが、戦利品は帰りにそれぞれ自宅に持ち帰って隠しました。(後日、学校で不発弾の爆発事故があり、戦利品は引地川に捨てられました。)

学校から帰ると、当直明けの父が家におり、B-29は伊勢山の真上を通過して南に飛んで行ったこと、夜半にパラシュートで脱出した若いアメリカ兵が監視所に連れて来られて、取り調べをして、憲兵隊に引き渡した事など前夜の出来事の話をしてくれました。兵士は19歳で最後尾の銃座の砲術手で一番初めに脱出したこと、通常、被弾しても帰還コースの九十九里浜に脱出をするが、損傷がひどく相模湾に引き返した事、相模湾にも救助のための潜水艦が待機していることを

話したといひます。彼は大変薄着だったので、寒くないか？と労り、捕虜の国際法上の扱いについて伝え、そして憲兵隊に引き渡したといひていました。

この墜落B-29から都合4名の搭乗員がパラシュートで降下しましたが、2番目に本鵠沼に降下した兵士は、会誌「鵠沼」85号に長谷川襄二氏が寄稿しているように(月日は間違い)、相当の深手を負っており、後日の調べでは、憲兵隊で死亡しています。その他は海岸を歩いていたとか、藤沢駅南口、若尾山で捕まったとか諸説ありましたが、いずれにしても藤沢駅から目隠しをされ、憲兵隊に国鉄で連れていかれました。

終戦後、横浜のニューグランドホテルのGHQからのこの件に付いての出頭を求められた父が出向くと、当時の扱いに謝辞があり、曾て父のニューヨーク滞在時の話題から高官との縁の糸が深まり、親交に繋がりました。

このB-29墜落については、渡部会員が日米のHPを検索、別紙克明なデータを提供頂きました。→16頁

その3 連合艦隊の日本進駐

1945(昭和20)年8月27日の早朝、異様な轟音に目を覚まし、海岸に出て見ますと、昨日までの台風一過の相模湾に驚嘆する光景を目にしました。

1945(昭和20)年8月27日～8月29日 連合軍は日本本土進駐のための艦船を相模湾に集結させた。

- ① 台風一過の8月27日早朝5時頃、異様な轟音に海岸に出て見ると相模湾5艘程が海岸近くを高速で走り回っていた。そして水平線には砲身を上げた軍艦がこちらを向いてぎゅっしり並んでいた。



- ② 正午過ぎになると、江之島の陸から大小の砲艦艇が、砲身をこちらに向けて東から西に連続しました。まさに艦砲射撃が行われるのかと恐怖を覚えた。



- ③ 正午頃には、ニミッツ提督の特な記号か？ 輸送船に集結していた第4海兵連隊戦闘団と、第8海兵師団の将兵に富士山日本を見せるためか、輸送船を次々と海岸近くに回航させていた。夜は投光機でのやり取りの調子が、あちらこちらで見られた。28日午前まで停泊していた。



横浜戦士資料館 運営委員 大橋善則 氏

水平線一杯に隙間なく軍艦がこちらに砲身を向けて並んでいました。そして、手前では5艘程のフリゲート艦(掃海艇)が走り回っていました。沖縄がアメリカに取られ、次は相模湾への上陸と聞かされていたので、8月15日天皇陛下の敗戦の玉音放送を聞いてはいましたが、それでもアメリカ兵が攻めて来るのではと恐ろしくなりました。

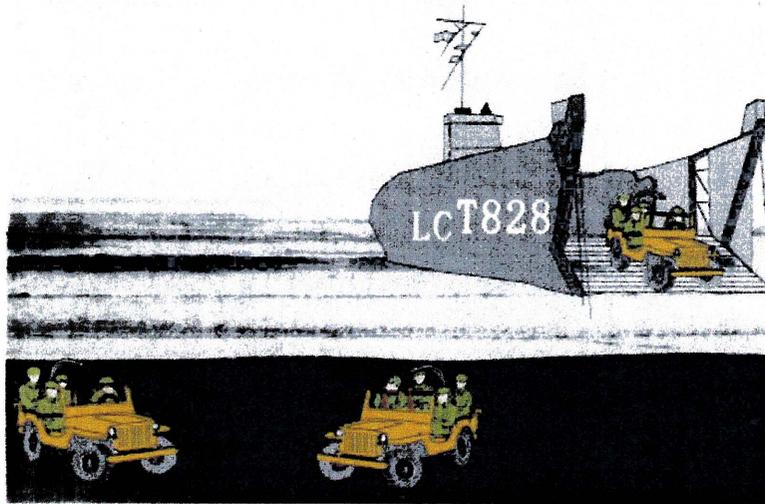
午後になって、江の島の蔭から大砲をこちらに向けた軍艦が次々と現れ、観艦式のように東から西に巡航した後、沖を目指しました。その後に多数の輸送船が来て、停泊しました。夕方になると沢山の小型のランチや上陸用舟艇がその間を行き来するのが見られ、日が暮れると、灯火は消していましたが、黒い船影の間で信号灯の瞬きがあちらこちらでホタルのように光りました。



提供：藤沢市生涯学習課博物館準備担当

翌朝、夜が明けるのを待ち兼ねて海に行きました。相変わらず海は船で埋まっていました。もう何人かの人が海岸にいました。そして流れ着いた物を拾っていました。缶詰、飲料ビン、蠟で覆われた四角い箱(兵隊の携帯戦場食)等が故意に流したのか?打ち上げられていました。その中で特異だったのは、消火器のような頑丈な造りの真っ黒な小型のボンベでした。側面に白字でan insect spray DDTと書いてあったのですが、英語が解らず、爆弾ではないかと誰も手を付けませんでした。そこへ、家で調べて来た方が戻り、拾い始めたので争って拾いました。その方の話で殺虫剤のスプレーと解りました。扱いが解らずスプレーが止められずボンベに指が凍りつき、凍傷になった人もいました。

この日はどこからか大勢の人が見物に押しかけました。双眼鏡で眺めると向こうからも、大勢の水兵や兵隊がこちらを眺めていました。



夕刻一艘のLCT(=LST、戦車揚陸艦)が現スケートパーク前の海岸に接岸し、艦の前が開き、ジープ(この言葉も後になって知った)がキャブレターと排気管の二本のエントツを立て、けたたましい爆音を立てながら4台走り出て来ました。ジープには4人づつ兵隊が銃を持って乗っていました。しばらく辺りの波打ち際を走り回ってから、何事もなく引き揚げました。

また、この日は暗い茶褐色の小型の連絡機が何回か海岸に着陸しました。人のいない所にフアーと着陸して、人が近付くとフアーと簡単に飛び立ちました。

翌29日は朝から船が動きだし夕刻には半分程の艦船はいなくなりました。

新聞では、台風のため占領軍の日本本土進駐日程はすべて2日遅れとなって、28日、第一陣として米第11空挺師団の先遣隊150人が、C.T. テンチ大佐の指揮のもと輸送機C-46、45機で厚木飛行場に到着、外国軍隊による占領が始まりました。

8月30日、連合軍主力部隊の進駐が開始され、総司令官ダグラス・マッカーサー元帥も自ら第8軍第11空挺師団兵士4000人を率いて午後2時過ぎ厚木に到着、司令部幕僚ら一部兵力と共に横浜の税関本部内(AFPAC)とホテル・ニューグランド(SCAP)に急設されたGHQに到着しました。同時に9時30分横須賀から海兵隊(マリン)の将兵が上陸を開始、進駐がはじまり、31日以降、米第8軍の主力部隊が横浜港・千葉県館山港から上陸し各地に進駐しました。

藤沢は藤沢航空隊の跡に、第11空挺師団の隊が、茅ヶ崎は南湖の海軍病院跡に第一騎兵師団の戦車隊が進駐しました。

以上の目撃した情景には、私が学校に行っていた時間は抜けています。

(ないと う よしつぐ)

1945年4月16日、江の島沖に墜落したB-29から脱出した乗組員について

Mission 68 として4月15-16日の夜間川崎を空襲した194機のB-29のうち、12機を失った。うち、江の島沖に墜落したB-29の機体番号は#42-94034である

42-94034 29th BG, MACR 14271, Watson crew 12 MIA

Crashed off the Coast of Enoshima Island, Fujisawa City, Kanagawa Prefecture. 8 KIA, 4 POW: 1 died from his wounds at Tokyo Kempei Tai Headquarters, 3 were burnt to death in the Tokyo Military Prison fire on 25 May 1945

* MACR 14271 = Missing Air Crew Reports 記載ナンバー 14271

* MIA = missing in action 戦闘での行方不明兵士

* KIA = killed in action 戦死した

* POW = Prisoners of War 戦争捕虜

当該機の乗組員は12名であった。うち、8名は戦死した。残り4名はパラシュートで脱出し、藤沢市内に降下して拘束された。そのうち1名は東京の憲兵隊本部内で怪我のため死亡した。残り3名は東京の陸軍刑務所に収監されたが、5月25日の第二次東京大空襲で焼死した。

東京陸軍刑務所に収監された乗組員は、次の3名である。

氏名	階級	認識番号	拘束日時	拘束場所
MANNING, Clifford	少尉	0-2060552	1945/4/16	神奈川県藤沢市
McNIVEN, Donald W	軍曹	31453508	1945/4/16	神奈川県藤沢市
SCHUBERT, Donald L.	軍曹	11138661	1945/4/16	神奈川県藤沢市

(前略) 本土決戦準備に忙殺されていた東部軍管区司令部では、空襲による被害も加わり、搭乗員の拘束場所を確保できず、搭乗員を渋谷区宇田川町の東京陸軍刑務所に収容することとした。搭乗員たちは、第四号監(木造瓦葺、監房17室)に収容、約2坪の一監房あたり4人が詰め込まれていた。

1945年5月25日22時38分から26日01時13分にかけて462機のB-29が東京地区最後となる大規模攻撃を行い、渋谷区を主として、赤坂区、牛込区、中野区等で死者3,596名、重軽傷17,899名、全焼165,103戸、罹災者620,125名の被害を生じた。陸軍刑務所も全体に焼夷弾が落下、第四号監は解放命令が最後となったため、多くの搭乗員たちは鍵のかけられたままの監房で焼死した。

調査：渡部 瞭(会員)

思い出したくない戦中時代

青木 悠 (会員)

私が鶴沼に定住したのは昭和14年7月小学校6年生からである。それ以前にも昭和8年から9年にかけて現在の家の隣に住んでいたことがあった。もともと鶴沼は母方の祖父木下米三郎が鶴沼の開発にかかわったなじみの地でもある。

藤沢の小学校に江ノ電で通学していた。学校帰りに道草仲間と鶴沼駅の前の電気屋に寄ってラジオについて教えてもらったり、冬は柳小路で途中下車し、線路脇の凍った田圃でスケートをしたことが思い出される。朝の通学路は藤沢駅から銀座通りを途中で右折し直進すると学校だが、一つ手前の横丁を入ると遊郭があり、その中をわざわざ通るおませな者もいた。藤沢の銀座通りは道幅が今の半分位で、建物こそ変わったが今と同じような街並みであった。中学2年の時、太平洋戦争が始まり、戦勝気分酔っていた頃、父が日英外交官交換船で南アフリカから帰国し、海外の事情を密かに聞き勝算のないことを知ったが、軍国主義教育で育てられた私にはそれでも戦う気持ちに満ち溢れていた。やがて戦局は逆転し、生徒動員で学校を離れ工場で軍需品の生産の日々となった。

当時のことは今でも思い出したくもない灰色の青春であった。

昭和20年8月15日、その日は焼け付くような快晴。正午に次の動員先の静岡で戦争終結の放送を聞いた。その夜の明々と灯した電灯が眩しかったことが今でも臉に焼き付いている。動員が解かれ直ちに帰鶴。数日後海へ行ったら相模湾一帯にアメリカの艦船で埋め尽くされていた。一言もなかった。

食糧難で、庭の松の木を切り芋や麦、南瓜を作り、ヤギを飼い、その乳で栄養を補った。母は自分の着物を持って遠く山北や秦野まで買出しに出かけ、私たちの空腹を補ってくれた。

サイパン、沖縄、広島、長崎…多くの同胞の犠牲のおかげで、60年間平和な日々を送れることを心より感謝している。 (あおき ゆう)

私の戦中・戦後

池田 勝彦 (会員)

ハワイ真珠湾を空襲し米国と戦争状態に突入したのは、私が藤沢国民学校1年生の時だった。その年の4月1日から小学校は国民学校と改称、宮城遙拝や軍事教練が課され、音階もドレミファからハニホヘトイロハに。日米開戦後は新聞・ラジオの天気予報・気象通報も中止された。

昭和17年4月、米軍機が東京・横浜を初空襲。米・味噌・醤油は切符配給制に、衣料は点数切符制に、生活必需物資はそれぞれ統制され、因みに米は大人が1日2合3勺、衣料点数は1人1年分100点で、背広1着50点、靴下1足2点。

朝の通学時間帯に電車が非常に混むようになってきたのを親が心配し、徒歩で通学できる近くの湘南学園に3年生の時(昭和18年4月)転校した。学園は当時1学年の生徒数が15~20人位で、放課後や休日には上級生も下級生も仲良く一緒に校庭を走り回っていた。校内の休閑地で各種の野菜を栽培し、収穫はみんなで分けあって持ち帰った思い出がある。昭和18年夏頃より学童疎開が始まり、昭和19年には各学年の生徒数も30人を超えるようになった。

昭和20年になると藤沢・平塚・鎌倉・横浜への空襲も激しくなり、4月には岐阜県大野郡丹生川村(現在は町村合併で日本一広い高山市)に母と2人で疎開した。村では、空襲警報のサイレンも鳴らず静かだったが、転校した丹生川国民学校での、出征兵士の留守家族の田圃での草取り、木刀の代わりに木の枝を振り回して行う軍事教練は厳しかった。小川での魚捕り、谷川で水遊び、鞍のない裸馬に乗せてもらうのも楽しかった。

敗戦については、8月15日の放送では良く聞き取れなかったが、村人の話を聞いて分かった。鶴沼へ帰れることがとてもうれしかった。9月に鶴沼に帰り、湘南学園に戻った。学園では、奉安殿撤去、賀来神社参拝中止、日本史・地理の教科書の焼却。そして二世の先生が教壇に立ち、英会話の授業がはじまった。昭和22年3月で国民学校はおわり4月からは新制の小学校と中学校になり、私も湘南学園の新制中学1年生になった。中学では加藤道子先生に数学を教えていただいた。先生のお宅には放課後みんなで押しかけアメリカの本や雑誌をみせていただき、世界への窓が開けた。先生は与謝野晶子さんの上から6番目のお嬢様。

(いけだ かつひこ)

昭和21年6月－23年12月の金銭出納簿

伊藤 聖 (会員)

手元に古びた黒表紙の「金銭出納簿」がある。祖母が毎晩（一部は私と妹で）、鉛筆で克明に記録していたものだが、いまや文字はすっかり薄れ、時代の証人というには、あまりに痛々しい姿を留めている。しかし私にとっては「飢えの時代」を思い出させるものとして、これほど切実な文字はない。

昭和17年10月、もともと病弱だった母が中学2年生のとき亡くなった。父は陸士出の軍人で、当時、中国北支に派遣されていた。一家の生計は祖母の瘦せた肩にかかってきた。戦時中はどの家でも、似たような耐乏生活だったが、敗戦とともに事情は一変した。のちに分かったことだが、父は関東軍隷下に転属して、ソ連参戦にそなえていた。そして、そのまま関東軍の将校団とともに、23年までモスクワ南方で抑留生活を送ることになる。

昭和21年6月の「金銭出納簿」によると、

- 1日 小麦粉 (1kg、2日分) 2円5銭
- 2日 魚 (さわら) 10円40銭、六会 1円20銭
- 3日 コンニャク 4円80銭、片瀬60銭
- 5日 魚 (さば、いわし) 5円76銭、野菜 1円80銭
- 7日 大麦 (3kg、3日分) 5円61銭、搗き賃30銭
- 9日 缶詰46銭、片瀬60銭
- 11日 加州米 (2kg、2日分) 3円84銭、玉蜀黍粉 2円40銭、大根 2円
- 13日 小麦粉 (8kg、7日分) 16円40銭

これが2週間に配給された食糧のすべてであった。大麦、小麦粉、玉蜀黍粉、馬鈴薯、魚粉、缶詰など、食べられるものは、すべて主食扱いで米に換算され、配給された。この21年6月の「食糧危機」がもっとも深刻であったと思う。六会、片瀬などの文字がみえるのは、食糧買出しの交通費である。

22年に入っても食糧事情は深刻で、夏休みが半月も繰り上げられた。それでも少しずつ改善がみられ、金銭出納簿にも「米7kg、104円58銭」(22年11月13日、同11月30日)の記載がみられるようになる。父が帰還したのは、さらにその半年後、23年夏であった。

(いとう さとし)

日本はこれでいいのか？

—私の戦中戦後史から—

植松民也(会員)

私は北海道中部の山間都市の生まれで、戦時中は小学生だった。「大東亜戦争」が始まったのは2年生の時“大日本は天孫降臨以来万世一系の天皇を頂く無敵の国だ”と教えられた。この戦争に勝つとは思ったが、天皇が天から降ってきた現人神あらひとがみだとは、子供の頭でも信じられなかった。大本営発表では勝ち戦ばかりなのに、襟裳岬えりもみさき上空を北上して来襲する敵機が増加し、食糧の不足が深刻になってきた。食糧増産の掛け声で、山の上の原生林を開墾してジャガイモなどを植えたが、ろくに実らないうちに雪が降り出し、貧弱な収穫物を背負って凍った急な崖の道を下りる始末だった。山菜や野草なども、食べられるものは何でも食べた。

終戦は6年生の時、重大な放送があるとかで学校へ行ったが、雑音の中から何か奇妙な声こゑがきこえただけで意味がわからず、先生からも何の説明もないままに帰宅させられた。翌日からは今までと全く逆なことが、当然のように教えられたが、子供を殴って軍国主義教育をしていた教員たちからの反省の言葉は皆無だった。私の教育者や指導者等に対する不信感ふしんかんは、老年になった今も続いている。

昭和23年に津軽海峡を渡って内地(本土)へ来たが、戦前からの連絡船は全滅しており、この時乗った戦後新造の洞爺丸とうやまるは、数年後の台風で横転沈没した。

戦争末期の北海道は本土から切り離された状態にあり、終戦がもう少し遅ればソ連軍に占領され、ドイツや朝鮮半島のような分断国家になったといわれる。

その後の私は勤め人を早目に辞め、自分の目で世界を見ることを心がけてきた。

共産政権末期の東欧を旅して、東西ベルリンの壁を越え、南北朝鮮や千島・樺太などにも行った。西暦2000年には世界一周の船に乗って、戒厳状態のエルサレムを見、日付変更線に停船して世界最初の21世紀を迎えたことも忘れがたい。

昨年こととしの夏には広島と長崎の平和の灯をアテネのオリンピックや、ニューヨークの同時爆破3周年のセレモニー等に届ける船に乗り、また地球を一周した。

なぜ世界には争いが絶えないのか。直接的な理由は多様だが、その根底には限られた資源や食糧の奪いあいという事実がある。それが豊かな時には共存できるが、人口や消費とのアンバランスが高まると、殺し合いが始まるのである。

世界中の資源を浪費し、食糧の自給率が4割にも満たない日本の行く先には、きわめて危険なものがあると私は思う。(うえまつ たみや)

風化することない戦争中の日々

佐藤和子（会員）

七・五・三の千歳飴が鉛筆に代わり、大好きだった宝塚のレビューを観に行けなくなった頃から、子ども心にも、忍び寄る戦争の影を感じていたのかもしれませんが。だんだんとその足音が近づき一勝ってくるぞと勇ましく、と大声で歌って神風が吹くことを固く信じてその日を待つうちに、我家のお向いの家々が強制疎開ということで取り壊されていきました。京子ちゃんの家も、良ちゃんの家も…。それからは幼友だちと会うことはできませんでした。通学途上、機銃掃射に狙われてその恐ろしかったこと、決して忘れません。

学校が閉鎖されて、集団疎開か縁故疎開かということになり、母と私と弟の三人は東京麻布の家に留まる父を一人残して、遠い親戚筋を頼り、福井県の雪深い地に疎開しました。12月下旬、父がやっと求めて来た革(?)靴は、雪の中では直ぐ駄目になり、母がどこからか調達してきた地下足袋にワラを巻いて登校したのですが、帰りは凍える手で自分で巻かねばならず、学校へ行くのが苦痛になり、今でいう不登校の日々が続きました。疎開先はお寺の離れで目の前は墓地、部屋に畳は無くムシロを敷き、その上疎開先に送った荷物は汐留駅で全焼し、全く何も無い日々は辛いものでした。荒地を耕して作ったジャガイモの小さかったこと。東京育ちの母は二人の子を抱え、食べていくのに随分苦勞したことと思います。

8月3日、終戦を待たずして鶺鴒沼の家に戻りました。持てるだけの荷物を背負い、途中何度か空襲にあつて列車の外へ避難したりしながら、2日がかりで空襲警報の鳴る上野駅迄たどり着いたのですが、出迎えに来た父はその荷物を見て、とても自分一人では持てなかった、と言ったそうです。母と私とで背負い、三歳の弟の手を引いて来たその格好、写真でもあつたらなあと思つてしまいます。やっと着いた鶺鴒沼の家にも又何も無かったのですが、冷たい井戸水のおいしかったこと。やっと親子四人で暮らせるようになって数日後、広島、そして長崎に新型爆弾が落ち、15日を迎えました。その日も外で遊んでいると、駆け寄つて来た子が、「戦争終わった。日本が負けたんだって」と、知らせてくれたのでした。度重なる空襲と疎開、戦争していることの辛さを知つたかつての軍国少女は、ただホッとしたのをおぼえています。庭のオシロイ花の赤が印象的でした。それからずっと60年間、不戦の気持ちは決して変わることはありません。(さとう かずこ)

戦中・戦後を垣間見て

佐藤 久美子（会員）

私は福島県の海岸線の小さな田舎町、小高が生地です。1941年生まれです。私の戦争体験ということは、回りの大人の話、体験者の話そのものです。終戦間近になって、空襲警報とか、グラマン、カーチス、ダグラスという小型機が13～15機列を成して、低空飛行で目的を捕えて発砲したという話です。私の家では、すぐ上の兄と姉が目掛けられた如く近距離から発砲され、2階の屋根、柱、襖に弾が貫通し、後日まで砲弾は出て、私はおそろしく思ったものです。

短期間疎開はしたものの、祖父母が病弱だったこともあり、すぐ家にもどり、一室の畳を上げ、床板を土間に貼り、暗幕を張り巡らし、防空壕として使用していました。貨車に積んだ松根油に掃射され、2昼夜駅方面の下町から黒煙が昇り続けた日時と同じ頃、立派な煙突がそびえ立つ珪砂(ガラスの原料)工場が、地響きと暗煙の凄さに、それが爆撃であるという記憶もあります。ヒマの種やら松根油を軍用機にでも使用しようとの試みとの話も聞きました。仙台空襲の夜のB-29は、グォーンという不気味な爆音と黒の集合体のような塊が整列して北へ向かって行き、間もなく夜空が燃え上がったのを見て、誰もが仙台が燃えていると思ったものです。

長兄は学徒動員先の宇都宮の中島飛行機で、理学部というだけで技術もない自分たちが飛行機を造るようでは「この戦争は負けである。」と思ったということです。軍備品を製造していると見なされた紡績工場、飛行場、列車は全部爆撃されたそうです。中学4年生が班長になり、出征した農家の手伝い、飛行場の塹壕造り等々グループでしたそうです。

南京で捕虜になり帰還された方が、「戦争が悪いのであって、日本人が悪いのではない。」と喋り放してくれた周恩来の偉大さを話されたのを鮮明に覚えています。4年生の時、「今日から難しい國の字は、簡単に国という字になりました。」と担任からいわれ、他の小さなことと重なって妙な気がしたものです。脱脂粉乳給食も同じ頃に始まったと思います。

困り、集団、縛られることが苦手で、何でも楽しみに変え、肩肘張らず、背伸びせずが私の生き方です。
(さとう くみこ)

生まれて最初の記憶

＝染みついたもったいない精神＝

佐藤 弘 (会員)

昭和20年、2歳半の私には終戦の記憶は無いが、私の最も古い記憶としては数年後の戦後の状況にたどり着く。

静岡県浜松で育った私の周りは私も含めて食糧事情が悪く、経済的にも苦しく、ひもじい生活をしていたと思われ、食べ物の思い出が私の最初の記憶である。

配給品を受取りに、遠い配給所まで夏の炎天下親につれられて歩き、家に帰って食べた進駐軍からのものと思われる、干しあんずと缶入りバターピーナッツの味は今もって忘れられない思い出を含んだ味である。

また、全焼した自宅の跡に建てたバラック住宅の空き地では、食糧確保のため農作物を作り、その畑仕事を手伝った記憶がある。父は素人ながら必要に迫られ、狭い庭で野菜は殆んど自給自足していた。そのためか、生産する苦勞を思うと、いまだに食事で出されたものは残さず食べるが、家庭菜園は昔を思い出しやる意思がないのである。

住んでいた近くには、旧国鉄浜松工場（現在は新幹線の整備工場）とその官舎があり、官舎の周りの埋立用として工場から産業廃棄物が持込まれていた。官舎に住んでいたお母さん達や子供は、その廃棄物の中らかねめのものを拾い、鉄くず屋に売り、家計の足しにしていた家が多くあった。私も時々、友達につきあい、遊びの合い間に鉄くず拾いを手伝った経験がある。

今もテレビで、東南アジアの一部では、ゴミ山の中らかねになるものを拾っている姿が映し出されることがあるが、その度に自分の記憶に重ねてしまう。

（当時の廃棄物は、コークス＝石炭の燃えカス＝の中に機関車や列車の整備で発生した電線の切れ端、鉄くず、銅パイプの切れ端、真鍮のバルブ、砲金のナット等が混じったものであり、生ものやビニールは無かったので、東南アジアでの今の状況とは少し異なる） お陰で、学生時代に金属材料を学んだ時には、基礎知識として役立ち、今もそれらの金属を見ると当時を思い出してしまう。

いずれの記憶も哀しいものが多く、今の生活の原点は戦後の混乱期とりわけ困窮生活にあり、もったいないという精神は悪いことではないが、状況上身に染みついた哀しいさである。

(さとう ひろし)

高瀬の池の思い出

狛倉 健(会員)

高瀬弥一が藤ヶ谷の豪邸を処分し、川袋の5,000坪の敷地に居を構えたのは大正9年のことだ。敷地の高台に母屋を建て、下の沢地に2,000坪の池を造った。弥一の娘である吉川八重子さんの「川袋の家の思い出」(本誌89号)によると「沼のように広い池には大小三つばかりの島があり、川舟が2艘……」とある。

筆者は弥一の長男の弥太郎と中学が同級であった関係で、昭和の6、7年ごろはよく高瀬の池に釣りに行ったものだ。すあま(餅状の菓子)を仁丹の粒くらいに丸めて針先につけて藻の蔭に下ろすと面白いようにキンブナ、ギンブナ、タナゴが釣れた。

昭和20年代は鮒釣りに凝っていた。新婚早々であったが、休日になれば台風であっても高瀬の池に通い詰め、母から「嫁さんと魚釣りどどちらが大事か」と叱られた。これほど入れ揚げたので、35cmもあるマブナや大人の腕ほどもある大うなぎを激闘の末に釣り上げたり、いろいろの思い出があるが、これは鯉に釣られた竿の話だ。

新橋の釣具屋で「東作」の銘の入った鮒竿を、清水の舞台から飛び降りる思いで買い求めた。3月下旬の某日、高瀬の池でその竿の筆下ろしをする。勢い込んで来たのにさっぱり当たらない。一服しようかと竿掛けに預けてマッチをすろうとしたとき突然浮きが見えなくなる。あわてて掴もうとする手をすり抜けた竿は、池の真ん中を目指して矢のように滑ってゆく。そして、びっしり密生した藻の中に引き込まれた2間半(約5m)の竿は、柔らかい穂先を下に、握りの方をピシャン、ピシャンと2、3回空に放り上げられた後に動かなくなる。藻に絡めて釣り糸を引き千切ったその勢いで竿を跳ね上げたのだが、すごい瞬発力である。先ごろ釣りをしていると、向こう岸の近くでバシャンと大きな水音、見ると1mくらいの物体が水に落ちたところだ。瞬間、誰かが池に丸太を放り込んだと思ったが、あたりに人影はない。この池の主のあの鯉が跳ねたのだ。

大枚をはたいて買った竿が、小鮒1匹も釣らずに鯉に持ってゆかれたのでは話にならない。ついに意を決し、池に入って取り戻すことにした。寒かったが幸い深さは胸の辺りまでだし、水底は砂で足を取られることもなかった。

思い出深い高瀬の池も今では住宅地になり、当時を偲ぶよすがは何もない。

(ししくら けん)

戦中・戦後の学生生活

杉本辰夫(会員)

開戦を告げる「大本営発表」のラジオを聞いたのは、現在住んでいる鶴沼の家でしたが、その後父の転職にともない関西に転居しました。

転校先の中学に登校して驚いたのですが、昼の弁当は生徒全員が校庭で立ち食いするのです。雨が降って、やれやれ今日は座って食べられると思っていたら廊下で立ち食いです。

「おまえ達は学業を終えたら軍隊に入り戦地に赴かねばならない。戦いの場では、のんびり腰を下ろして食事などとんでもない。そのため今のうちから訓練しておくのだ」というわけです。一事が万事この調子でした。

そのうち学徒動員が始まり中学2年生以上は男女とも授業は打ち切られ工場で兵器など軍需品の生産に従事しました。

空っぽになった学校には教室に工作機械が運び込まれて「学校工場」となり、私はここで海軍の銀河(爆撃機)、紫電改(戦闘機)の外板を加工しましたが間もなく「学校工場」はB-29の焼夷弾で全焼、本工場は大型爆弾で壊滅、避難した防空壕では艦載機の機銃掃射とさんざんな目にあいました。

戦後昭和22年北大予科に進学して恵迪寮に入りました。

当時の学制(旧制)は小学校6年、中学校(女子は高等女学校)5年、高等学校3年、大学3年で予科は高等学校と同格でした。旧制高校の定員は国立大学とほぼ同数でしたから、より好みをしなければ国立大学への進学は保証されていましたので入試勉強とは無縁の自由な予科生活を送りました。

寮は木造の2階建てでベッドと机の入った5人部屋が60室あり運動部、文化部など部活ごとに割り当てられた部屋に1、2、3年生が同居していました。

室内やトイレには「ニュートンも糞の落ちるに気がつかず」などの落書きが書き散らされていました。

寮費の徴収、新入寮生の選考、寮使用人(炊夫、賄婦)の雇用、給食など寮の運営は寮生から選出された委員会が取り仕切っていました。深刻な食糧難の時代で、食糧の買い出し、朝昼夕の食事を担当する生活部の委員は授業に出る暇もなく仕事に追われていました。こうした委員の自己犠牲に支えられて寮の自治は維持され、寮生活を共にすることで多くの寮生は終生の友を得たのでした。

(すぎもと たつお)

子供のころ

高田清祐（会員）

昭和17年生まれの私にとって戦争の思い出は父母から聞かされた3月9日の東京日暮里での空襲、焼夷弾、防空壕の話によりなんとなくで、実際の記憶は戦後間もなく親戚の別荘に移り住んだ鶴沼から始まります。日本橋馬喰町で生糸の商売を営んでいた父にとって、戦後生糸の統制でやむなく趣味であった写真の技術を活かし銀座4丁目にあった進駐軍のPXでの写真現像・引伸しをうけおい、自宅に暗室を設け行き来してしまし

た。たまに一緒に東京に連れて行ってもらうと都電に乗り茅場町、馬喰町での用事、銀座の不二家、オリンピック、資生堂パーラーで食事をし、ガリバー旅行記・白雪姫を見て銀座アスターの中華饅頭をお土産に帰りました。



ある夏の朝、母が裏の井戸に西瓜をつるし洗濯をしているそばで遊んでいると父が頭に包帯を巻いて帰ってきました。いつものように藤沢で満員の汽車に飛び乗った時から記憶がなくなったといえます。どうやら満員のデッキから線路に落ち気を失った父の頭の上を数台の列車が通り去ったようです。駅員が駆けつけて気がついたようで意識がなかったから動かずに助かったといっておりました。

近所の友達と皇大神宮のお祭りに出かけたとき、あの山車の人形が大きく見えて怖い感じがしたこと、私の家が境になって町内が違うからと祭の饅頭を貰えなかったことは忘れていません。

家の横道から数分、桃山の脇を通過して田圃を抜けたはず池は思い出いっぱい遊び場です。人の知らない足がもぐらずに池の真ん中まで入っていける隠れ道、池に入って釣りをしていると足についた藻をつつくクチボソ、夕方池の周囲で身を伏せ待ち伏せて採ったヤンマ、途中から砂地で自転車を押し押し捜しに行った浜見山の葉莢拾い、初めて職人さんに作ってもらった布製の野球グローブ。

今の鶴沼の環境から思い出すのがだんだん薄れていくのは残念です。

（たかだ きよすけ）

想い出すままに

高塚正子（会員）

どんよりした空にキーン！と飛行機の音がした。バラバラに3機が飛び上がってきた。空港爆撃に失敗して逃げてきたなと思った。日の丸をつけた1機が追いかけてきた。思わず「来た」と叫んだ。追いついて空中戦が始まった。「負けるな！勝て」と手を握りしめて空を見上げた。敵機は煙を噴いて反転落下した。「勝った！」と躍り上がって喜んだ。「兵隊さんは、強いね」と弟が鉄砲を担ぐ真似をして嬉しそうに歩いてきた。ラジオの放送は「海ゆかば」の曲が流れることが多くなった。戦死、玉砕を報じた。やがて父も出征した。「お国のために戦います」と。母は私たちを守るために出征したのだという。父もまた戦死するのかも分からないと思った。戦争は早く止めて、父を帰してくださいと毎日神に祈り続けた。

ふかし芋をポンと割ったら、スジが5本も糸を引いて、バイオリンのようだなと思った。でも食べるところが少ないと思うと、涙がこぼれた。配給に赤くて長い米が来た。大豆、固いトウモロコシの粒、まだ口に入れることができるだけ良かった。軍の米倉庫が爆撃され、まだ温みが残っている焼け米が来た。ガラスの破片、砂利や砂、黒こげの米粒。たまには白い米粒があった。「これを人が食べるのですか。食べられますか」たまらなく腹が立って、お腹がぐうぐう鳴った。

空襲警報が5時まで解除になったら学校に行くことになった。老齢の先生が廊下にまで机や椅子を並べて教えられた。男の先生は兵役に、女の若い先生は徴用にとられたからだった。朝から学校に行きたい。友達と遊びたい。いつ戦争が終わるか知りたと思っていた。学校へ着く前に警報が鳴って、駆け戻ってくる途中のことだった。畑の中の広々とした道路で、飛行機に追っかけられた。草むらの中に倒れ込んで、草に身体を伏せた。バリバリバリと石を削り打つような音がした。飛行機に吸い込まれるのではないかと恐ろしくて、何がどうなのか分からなくなった。二日ほどして、新聞に妊婦が機銃掃射されたと報じられた。私も母も、この記事を見て機銃掃射だと知った。恐くて恐くて、キーン！という飛行機の音が耳に残って困った。戦争は、大嫌い。お腹がペコペコも耐えられない。こんな恐くて悲しい思いは、二度と御免だ。口に出すことも、書くことも許されなかった遠い昔。戦争は絶対にしないでほしい。 （たかつか まさこ）

自分の戦後はいつ終わったのか

竹内 広 弥 (会員)

戦争の最中の昭和 18 年、東京・世田谷で生まれた後、群馬総社に疎開した。鵠沼に移ったのは戦後の昭和 22 年頃。鵠沼の家に着いた時の裸電球のやけにまぶしかったこと、水道の蛇口をひねったら余りにも勢い良く水が出たことが忘れられない。鵠沼に来る前に半年ばかり世田谷の伯母の家にやっかいになっていた。冬のある日、従妹と二人で留守番をしていた時、コタツから煙がもくもく出て子供心に水をかけなければと思ったが水道の水はいつもちょろちょろで役立たず。二人とも何も出来ずに佇んでいた。そんなこともあって鵠沼の家での溢れるばかりの水の出方は強烈な印象に残っているのだろう。

二人の兄たちは世田谷の家で空中戦の様子を眺めていたという。自分の記憶は疎開先の群馬総社からのようで利根川の急流、赤城山中腹の寺が真っ赤に燃えた火事、石垣の下にオモチャの電車があったという夢などだが、これらは後に家族から聞いたものが自分の記憶として残っているのかもしれない。三疊間に家族 5 人でいた世田谷の伯母の家でのこと、初めて鵠沼の家に来たときのこと、自分の記憶の始まりかもしれない。

小さい頃の鵠沼の夏空には“天の川”が、くっきり流れていた。冬は寒く、良く日向ぼっこをした。海に行くと鵠沼橋近くの遊歩道路には進駐軍の外車やジープが停めてあり興味深げに眺めたものだ。その中に前と後が同じ顔をした乗用車があって、とても不思議であった。本当は同じように見えただけなのかもしれないが、その時はどうなっているのかと、あまり近くに寄って見るので「進駐軍に捕まってしまうぞ」と、周りに脅された。その頃、鵠沼海岸駅前の広場は格好の遊び場で、勇気あるものは松の木に登り「海が見えるぞ」と威張り、夏祭りには舞台が作られ、のど自慢大会、映画会などが催され、祭りの山車もでて、大いに賑わっていた。鵠沼海岸の商店街も今よりずっと活気があったような気がする。

やがて鵠洋小に通い校庭から米軍の DC3 機から続々と開く落下傘を眺めていた。3 年生ぐらゐから給食になり「脱脂粉乳のミルクはアメリカから貰っている」と聞き“ミルクをくれる良い国—アメリカ”という思いを当時の作文に書いた。その時点でもう自分の戦後は終わっていたのかもしれない。

(たけうち ひろや)

私の終戦

竹田 祐紀 (会員)

昭和20年8月15日正午に放送された「玉音放送」を、私は疎開先で聴いた。「玉音放送がある」ということで、母と弟達とお隣の家族とラジオの前で直立したまま聴いた様な記憶がある。雑音が入って、非常に聞き難く、私には何も聴き取れなかったが、「戦争が終わった!」ということは解った。その途端、「もう逃げなくて良いのだ! もう死ぬことはないのだ!」という事が小躍りしたい程とても嬉しかったのを、今でもはっきり思い出す。その夜は、光が外に漏れないように電灯に掛けていた黒いカバーも外され、久し振りに家の中も華やいだ。翌朝、学校へ行くと、集団疎開で来ている友達が固まって泣いている姿が私にはとても不思議におもわれた。何故あの人達は泣いているのか? もう自分の家に帰れるのに? もう死ぬことは無くなったのに? 戦争に負けた悔しさ等私には理解できなかった。それよりも、爆撃に対する恐怖から逃れられた喜びの方がずっとずっと大きかった。小学校3年の夏だった。

昭和19年11月末の空襲で、東京に住んでいた家の近くの、芝大神宮の辺りに焼夷弾が何個も落とされ、我が家の小さな防空壕では危ないというので、芝公園の中にある国鉄の官舎のコンクリート造りの大きな防空壕に避難した。当時小学校2年生だった私は、警戒警報で学校から帰ってくると、ランドセルの中の教科書を出して、自分の机の上に置いてある非常食類を詰め替えて、それを背負って防空壕に避難することになっていた。ところがである。焼夷弾で焼かれた真っ赤な空を見た時、「逃げる時は必ずランドセルを忘れないでね」と言う母の言葉は私の頭の中には存在せず、芝公園の防空壕に再避難する時は、私は何も持っていなかったのである! それまで疎開を考えていなかった親は、このままでは子供を殺してしまうと思い、4歳の弟、19年2月に生まれたばかりの弟と私を連れ、母は京都郊外の父の実家へ急遽疎開した。翌日のことである。

終戦の数日後、家の近くにある駐在所の友達の家遊びに行った時、友達のお父さんが書類の整理をしていた。軍歌を口ずさみながら、家の庭で書類に目を通しながら、書類を細く裂いて燃やしていた。私達の顔を見ると「戦争に負けちゃったね。おじさんは悲しいよ」と話して下さった光景が今でも忘れられない。

(たけだ ゆき)

戦争の悲惨さを次世代へ伝えることを忘れまい

中川原 良子 (会員)

父は卒業間際の院生で出征した。体格も人並み以上だったので、本来外地に出されても不思議はなかったが、子どもの頃より強度の近視で、内地の通信に従事し、戦うことなく終戦を迎える。父は軍の解散が遅くて、復学が思うようにならず、二等兵であったにも拘わらず戦犯であって、取り敢えずのつमりの教職もうまくいかなかった。やがて高校の教諭にはなれたが、とうとう復学ならず、その後の人生大きく曲折があった。それでも一度も愚痴はいわなかった。多分、同じ人生を歩んできた人の、凄惨な出来事を考えると口にする値もなかったのだろう。

母は朝鮮の仁川で生まれ、軍の仕事をしていた関係で、一般社会では手に入らなかった物も不自由なく、東京の学生生活を送っている。母の話を知ると、戦時中とはいえ、楽しい青春時代である。人間はどんな時代でも、他人より自分の環境が恵まれていると、時代の印象も随分違わらしい。戦死した人もなく、食べることに事欠かず、空から爆弾が降ってくることもなく終戦を迎え、さすがに引き揚げ後は大変だったらしいが、母たちは若かった。立ち直りも早かった。

いつの頃からか薄れゆく戦争の記録を残そうといわれ出した。それ以前はどうだったのか、教師から特別に話を聞かされたこともなく、私のように親からの話もない。私が戦争の悲惨さを遅ればせながら知るようになったのも、ここ20～30年ではないだろうか。小林千登勢さんの引き揚げの話、海老名香葉子さんの東京空襲の話、高木敏子さんの『ガラスのうさぎ』、『はだしのゲン』あるいは生協が取り組んだ戦争を聞き取る、伝える等々。戦争を体験した人々の生の声が一番人の心を打つ。その声が、人の数からいえば減りつつある。少なくなった声を、耐えて生きてこられた方々は、私たちの今のために亡くなってしまった方々のため、文でなり生の声で次の世代へどうか伝えてほしい。親は子へ、子は孫へ。私のように戦争から間もない時代に生まれた年代でさえ、戦争があったことは知っているが、戦争の悲惨さが分からない。若い世代では戦争があったことさえ知らないという。憲法9条を丸暗記させられた中3時代があったのに、この頃何だかおかしい。日本に限らず世界の人々の幸せが二度と失われることのないように願ってペンを置く。

(なかがわら よしこ)

叔父の戦死

原 雅子 (会員)

母の弟である叔父が海兵を出て、潜水艦でニューギニアに赴任中に米艦に撃沈され、戦死した。昭和19年1月のことだ。赤子の私を抱いた叔父の写真があるが記憶には残ってない。母が生存中、しきりに話して聞かせてくれたので、自然に海兵68期の慰霊祭と遺族会に出席するようになり、叔父と同期の生存期友たちに会うようになった。

卒業生の約70パーセントが戦死だったが、特殊潜航艇に乗り組みパールハーバーで座礁し、同僚は即死したものの、自身は幸運にも失神し、日本の捕虜第一号となった酒巻和男氏も出席されていた。当時戦後50年を過ぎていて、かなりの年配になられ健康もそれほど優れてはいなかったようにお見受けした。それでも捕虜のことについて何度も何度も言い訳のように、生きて帰ることはできない、死のうとばかり思っていたのだと話された。生きていられただけで羨ましいことだと私などは思えるのだが、戦死した同胞への心遣いもあるとはいえ、それほど時間がたっているのに、生きて捕虜になったことを気に病まねばならないことだったかと、私は胸が苦しくなってしまった。作家の故豊田穰氏も海面を一週間漂流したのち捕虜となったが、戦死した友のことを書かれた著書「同期の桜」には叔父のページもあり、私には貴重な記録になっている。そして叔父を知る期友の方から、叔父の話の色々聞く機会にも恵まれた。その中で江田島のことがしばしば話題にのぼり、是非訪ねるようにとすすめられて数年前に行ってきた。

今はミュージアムになっている講堂の美しい建物は、見事な満開の桜並木のあいだに輝いていた。その建物に一步足を踏み入れたとき何か胸に迫るものを感じたのだ。その二階には戦死者の名前を彫った石版があった。そこで叔父の名を探し始めたがなかなか見つからず、やっと見つけたときには、その文字が涙でかすんでしまった。つづいて、長い校舎のような学生会館の前に立ってみると、どこかに叔父がいるように思えて、さらにまぶたの裏から湧き出てくるものを抑えることができなかった。そして多くの死んでいった若者たちへの鎮魂の思いをこめ、平和を希求する気持ちが私のうちに充滿した。二度と戦争を起こさない賢明さと平和を願ってやまない意思を持ち続けねばならないとあらためて強く思った。

(はら まさこ)

戦中の思い出

宮澤 彰（会員）

私は高座郡藤沢町鵠沼2206番地で昭和4年に生まれました。記憶にない昭和7年に満州事変が始まりました。ここからが戦中でしょうか。

ハッキリ覚えている小学校入学が昭和11年、翌12年7月が日中戦争勃発です。ここからかも知れません。当時の鵠沼小学校への通学路は、大部分が人通りの少ない松林、竹藪、畑、桃畑など、人さらいが出るといわれるほど淋しいところでしたので、私は藤沢小学校に入学しました。南京陥落の提灯行列、昭和15年の市制施行と皇紀2600年が重なり、国威発揚の国家行事も盛んに行われました。戦勝ムード一杯です。私はその中で漫画『のらくろ二等兵』の出世と共に甘い戦争を見ていたようです。昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まり、翌年に小学校ではなく国民学校を卒業しました。

藤沢市鵠沼819番地の中学校に入学。この頃から戦争を意識するようになっていました。家の前を通る東京螺子の工具さんが増えてきたり、日本精工が畑の真ん中にできたりしてきました。中学校の制服も、あこがれていたものと異なり、衣料切符を使って配給を受けました。スフ製の国防色、ボタンは金色でなくガラス製のもの、ズボンにサイドポケットがない（何故だ）という代物でした。ゲートルの巻き方を覚えても、スフ製ではすぐにずり落ちてしまいます。学校には3～4名の陸軍将校が配属されていました。週2回の軍事教練、富士山麓での1週間の野外訓練、横浜港近くの海洋訓練と、軍事教練一色です。さらに文部省からグライダーが支給され、早速滑空班が新設されて、訓練生に選ばれて滑空訓練です。校庭は狭くて飛ばず、分解された滑空機をリヤカーに積んで鵠沼海岸へ運び、毎日将来の戦闘機乗りを夢見て飛んでいました。まさに軍国少年です。日毎に激しくなる戦争、農村動員、綾瀬航空隊の掩体壕造り、昭和19年には工場動員、そんな中で私は鵠沼を出ることもなく、自宅からの通学通勤でした。親元を離れることもなく、大した戦争体験もなく、中学生生活の一部として過ごしたように思います。平塚・茅ヶ崎・小田原と空襲が続き、今度は藤沢かというところで8月15日です。江の島・片瀬山には砲台・陣地跡がありますが鵠沼にはありません。戦争の跡などない静かなところであることを今後も願いたいものです。

（みやざわ あきら）

私の昭和二十年

山本高 雄（会員）

昭和19年4月、家から程近い第一師範付属小学校に入学できた。夏休みの宿題の絵日記は、アメリカ兵を潜水艦風の鮫が、今にもパクリとする姉の絵や、日の丸戦闘機が出撃する兄の絵など、兄姉総動員で一挙に完成された。楽しい時期も、秋の深まりとともに、警戒警報のサイレン、夜空を駆け巡る探照灯、遙か上空の敵機など、毎日の生活が慌しくなった。やがて、敵機を撃ち落とすことも出来なくなり、地平線のかなたに、火の雨が注がれ、あたりが真赤に明るく輝いた。

千葉から一つ目の駅に降り立った母は、私を連れて、夜道を親戚に向かって歩き出した。結核療養所の建物を過ぎると、灯り一つ無い田んぼ道をひたすら歩んだ。周りは鬱蒼と繁った森が続き、ふと見上げた茜色の空を、雁が一行になって飛んでいった。やがて田畑も尽き、お寺に続く鶉の森にさしかかる。周りは更に暗く、時折頭上の鶉が甲高い声を出し、足を鈍らせる。遠くに集落の明かりが見えた時は、ほっとした。正月を挟んで一人ぼっちで、4軒の親戚につぎつぎお世話になる第一歩の幕開けであった。小湊鉄道で五井から30分走った小さな町に、上の兄と、妹、母の四人が一つ屋根の下に集まったのは、春、桜も散りだす頃だった。父と姉は外地におり、上の兄達二人は、東京で大学生活を送っていた。

西の夜空が真っ赤に燃え、紙のようなものが噴き上がって、暗い方角へどんどん飛ばされていった。翌日、そこら中に燃えた紙片が散らばっており、半分燃え残ったお札も風の中を漂っていた。

学校への通学路は、T字路を下がってゆく。下り道は土手で盛り上がり、下を小川が流れていた。「土手に伏せろ!」との声とともにグラマンが機銃掃射を浴びせて飛び去っていった。弾痕は道を外れて走り、誰も怪我をすることはなかった。

ある朝「捕虜がきたぞ」との声で廊下を飛んでいった。空教室に3人の兵隊さんが白人を連れて来た。授業後、もう誰もいず、食後の脂の匂いが残っていた。

小学1年生の記憶は、ホテルの光のようにふわふわと不確かで、周りから固めていかないと、一列に並ばない。夢だったか現実だったか確かめようがない。

2年生の夏、母の実家のお盆の日、鬼火が出るよと、こわごわ墓地の中を進んで行った頃、日本が敗戦を迎えていたのだろうか。 （やまもと たかお）

物心と戦争

渡部 瞭 (会員)

物心がつくと、鵠沼にいた。そして、戦争の最中^{さなか}だった。そこは、原の地藏堂の隣り、「鵠沼を語る会」会員の榛葉^{はしは}昭市氏の屋敷内にある離れである。

私の生まれは東京で、2歳までは世田谷の太子堂で育った。そして軽度のくる病と診断され、日光の豊かな鵠沼に転地療養したのである。当初は榛葉家の筋向かいにあるT家に間借りし、間もなく榛葉家の離れに移った。どうやら、ここまでは物心はついていなかったようだ。どんな家に住んでいたか記憶にない。榛葉家の離れは現在取り壊され、芝生と四阿^{あづまや}になっているが、今でもその離れの間取り図を描けといわれれば描いてみせる自信がある。

昭和19年の秋、3歳の末に弟が生まれた。「産めよふやせよ」の時代である。しかし、栄養価のある食糧は手に入らず、母乳が足りなかった。20年になると頻繁に艦載機が飛んでくるようになった。そうした中、毎日乳母車に一升瓶を載せて少し離れた乳牛を飼っている農家に出かけた。弟のために牛乳を5合購入してくるのである。ある日、途中まで来ると、警戒警報抜きでいきなり空襲警報が鳴った。と、向こうから艦載機が超低空でやってくる。身がすくんでしまい、乳母車の陰に隠れるのがやっとだった。通りがかりの大人が、乳母車ごと長屋門の下に押し込んでくれた。それと同時に目の前を数メートルごとに砂煙が上がり、機銃掃射が通り過ぎた。遠くで男の人が倒れた。死んだと思ったが、貫通銃創で済んだと聞いた。これが私の脳裏に最も鮮やかに残っている戦争の記憶である。

5月の横浜空襲は、殷々たるサイレンが鳴り響く中、B-29の大編隊がかなりの時間をかけて東に向かい、やがて北東方向に黒煙が上がり、夜になっても赤々と見えたこと、翌日には大八車やリヤカーに家財を満載した焼け出された人々の列が通ったことを覚えている。



榛葉昭市少年と筆者 (1945冬)

湘南中学生だった榛葉昭市少年は、弟のように私を可愛がり、艦載機が襲来すると、「あれがグラマンだ」などと教えてくれた。

(わたなべ りょう)

学 徒 動 員 回 顧

浅 沼 正 城 (会 員)

戦時色が徐々に強くなった昭和16年以降20歳以上の成年男子は軍事要員として兵隊に召集され、わが国は労働力不足となった。これを補充するため中高大学生に“お国のため”…勤労働員という名目で初期には我々湘南中学(旧制)の3年生以上にも近郊の農村六会長後と出征兵士の出た農家に春秋の農繁期手伝いに行ったのがその発端である。だんだんとその地域は広がり、平塚の在郷辺りまで行った。日数も増え、泊まり込み動員させられた記憶がある。芋掘り麦刈りなどの他に厳寒の頃暗渠排水(二毛作するための土地改良)工事(幅0.5m、深さ1.0mの溝を延々と掘る)…それはキツイ作業だった。

戦況も益々厳しくなり、ついに常時動員=片手間勉強という事態になったのが昭和19年6月頃か、割り当てで軍需工場に派遣され、直接間接軍需生産に従事することとなった。誰がどこへ行ったかは知らされず、噂話から日本精工(軸受)、相模海軍工廠寒川分工場(毒ガス?)、東京螺子(ネジ部品弾身葉莖等)に動員された。私が派遣された東京螺子(現:ミネベア)では、最初に青年学校の教室を使用し、基本作業の指導訓練を受ける(講師は工場職員)。仕上げ作業(タガネ、ヤスリ等の基本作業など)は現場でその当時渋谷班長、高木・小川指導員から厳しく指導を受けた記憶がある。勤務は二交代制(早番=7時~14時作業、14時~15時授業・遅番=13時~14時授業、14時~21時作業)が暫く続いた。早番遅番をどうやって決めたのか不明。

出勤は藤沢駅南口に地域別に集合、隊列を組んで当時はたんぼ道を、また退社時は工場講堂前に集合、隊列を組んで…とにかく常に集団行動だった。工場内をウロウロすることは禁止、他の人たちが何をやっているのか全く分からなかった。何回かの空襲警報で新林の裏山に掘られた何か所かの防空壕に避難した。ただ工場の食堂の給食の雑炊が、腹が減っていたのでうまかった記憶がある。

配属先は第4工場(一番古い工場)、屋根は鋸歯状の屋根で採光換気は良くなかった。我々7~8名が配置され、大型ターレット旋盤(6種類の刃物で作業)でターンバックル(飛行機の操縦桿に関わる部品)の一部を作っていた。機械動力は電動機(10~15馬力)からプーリー軸にそれぞれ10~20台の旋盤を駆動する方式で、電

動機のベルトが切れるとその群の機械は全部停止する状態がしばしばあった。そして作業服が油まみれとなり、家へ帰っても家中油の臭いが充満した。こうした作業が続く中、途中軍人志望で海兵・陸士に入隊する同窓生が3～4名いなくなり寂しくなった。こうして私も昭和20年3月卒業で東京螺子の学徒動員を終了した。

欧米の生産施設・軍事力を知っていた人たちは、戦争突入に反対したのは当然で、われわれは何も知らず、知らされず、ただお国のためと猪突猛進にこの動員時期を過ごしたことに今更ながら空しさを感じずる次第である。

(あさぬま まさき)

戦 災 の 記 憶

浅野陽子(会員)

「もどきなさい！」母の絶叫で、防空壕に向かって走り出した私は踵を返して家に戻った。母と弟と三人で押入れに逃れた。艦載機が家の真上を旋回し、邸内の椎の木林に爆弾を落としたのだ。幸いなことに防空壕に避難した兄たちや使用人は全員無事だった。父は玄関の片隅にしゃがみこんで難を逃れた。頭の直ぐ上の壁には爆弾の破片が突き刺さっていた。どれ位の時間がたったのだろうか。爆音がおさまり、そっと押入れの襖を開けると八畳間の部屋は土ほこりがもうもうと湧き上がるように舞っていた。4歳の私にはこの記憶のみが脳裏に焼きついている。首や羽がとんだ鶏が30羽ぐらい飛び散っていたこと、爆風で二つあった玄関のひとつがなくなっていたことなど、後年兄たちの話で知った。鶴沼で唯一爆弾を落とされた家といわれて育った。米軍の航空母艦から飛び立った艦載機が、藤沢航空隊の飛行場を偵察した後、爆弾を我が家に置き土産として落としていったといわれている。7月末、敗戦直前の被災であった。

戦争に反対し投獄され、拷問までうけ、それがもとで頑健だった父の身体は蝕まれてしまっていた。戦後の農地改革前に、小作人の方々に土地を無償で提供した父。市会議員であった父は、合併前の片瀬町所有の軍の隠蔵物資の材木を無償で払い下げを受けた大手建設会社会長兼藤沢市長を追及、調査委員会が設けられ、市長は辞職した。その父は私が4年生の秋(昭和25年10月)、いわゆる「藤沢中央劇場問題」を糾弾する演説直後議場で倒れ、そのまま40歳の若さで帰らぬ人

となった。死を信じられぬ私は、毎夕家の前の砂利道にしゃがみこんで帰らぬ父を待った。

今日も厚木基地から横須賀にむかって米軍の最新鋭機スーパーホーネットが大爆音を立てて飛ぶ。キャンプ座間への米第一軍団司令部の移転（新司令部設置）、原子力空母の横須賀配備が現実化されようとしている。日本はどこへ向かうとしているのだろうか。（あさの ようこ）

第二次大戦敗戦前後の我が家

穴山 雄一（会員）

私は、昭和14年1月東京麹町で生まれた。父は祖父・祖母と共に東京矢来町に住んでいたが、母との結婚を機に近くの麹町に居を移した。祖父は山梨県出身で、養蚕業を営んでいたが、明治時代の終わり頃東京に出てくるとほぼ同時に現在の鶴沼海岸三丁目付近一帯2000坪ほどの土地を買い、別荘として使っていた。昭和4年に小田急線の藤沢一江ノ島間が開通したが、これによって穴山の土地は松が岡側（現在穴山菌科のあるところ）と商店街側とに分断された。商店街側は全くの松林で、昭和27年頃までずっとそのままであり、私が子どもの頃よくターザンごっこなどして遊んだものである。

祖父は別荘としてこの土地を年に数回しか利用していなかったのに、小田急線が家の前を通るので、電車の音がうるさいといって、新たに第二の別荘として海岸側（現在の二丁目）に400坪ほどの土地を求めた。実際に家が建てられたのは昭和10年で、現在我々が住んでいる家である。この家は、当時の流行であったらしく、和洋折衷で、地元の加藤大工さんの先代に施工してもらった。特に日本間は念入りで、障子の棧はすべて面取りが施されている。総檜造りで、70年たった今でも全く狂いがなく、出入りの大工さんからも「あと100年は住める」とお墨付きをもらっているのだから、絶対に火を出さぬよう、大事に使っている次第である。

昭和18年、東京麹町にいた我々一家と、牛込にいた祖父・祖母・叔母は、戦争がひどくなって東京にいては危ないということになり、揃って鶴沼海岸二丁目の方に疎開することになった。ほぼ同時期に父が兵隊に行くことになり、中国に出征した。父32歳、当時としては老兵の方であった。私4歳の夏のことであった。

鵜沼海岸での生活が始まると、まず大きな防空壕が造られた。空襲警報が鳴るたびそこに飛び込んだ。食事もできたし、寝泊まりもできた。その頃一番怖かったのは、火だるまになった飛行機が我が家に向かって飛んできた、いや落ちてきたときである。もうおしまいかと思ったが、頭の上すれすれに飛んで、海の方へ落ちていった。翌日、近所の人話では、米軍の飛行機で、江の島沖に墜落したとのことであったが、実感としては、本当に自分にぶつかってくるように思えた。

昭和20年になると、2月、3月に東京が爆撃され、5月には横浜、7月には平塚が火の海となり、夜空が真っ赤に染まったのが家の庭からよく見えた。だんだん近づいてくる。次は藤沢かと毎日毎日怯えていたのであるが、ついに藤沢には大した空襲はなかった。これといった軍事施設のない藤沢には、爆弾を落とすとしてもしょうがなかったのであろうか。それにしてもサーチライトで照らし出されたB-29の大編隊は凄かった。日本軍も高射砲でばらばらと応戦するが、全く弾が届いていない様子であった。

敗戦も近い頃、我が家に日本の兵隊さんが10人くらい駐屯していた。とてもやさしい気のいい連中で、規則正しい生活をしていたし、私も随分可愛がってもらった。後で聞いた話だが、米軍が湘南海岸から上陸してくるので、それを迎え撃つためということであった。

当時、日本軍の宣伝で鬼畜米英といていたので、私は米国人は赤鬼のような顔をした恐ろしい人たちを想像していた。婦女子は乱暴されるとの噂で、髪を切れということで、母などは男のように断髪し、もんぺをはいていた。それにしても日本刀と小銃くらいしか持っていない日本の兵隊さんたちは本気で我々を守ろうとしたのだろうか。戦争が終わってしばらくしてから海岸へ出てみたら、米軍の大艦隊が相模湾の海という海を埋め尽くし、海の面さえ見えない圧倒的な兵力で、悠然と浮かんでいた。後にも先にも、また映画でも、このような大艦隊は見たこともないものすごい数であった。あの時、我が家にいた日本の兵隊さんと比べると、余りに彼我の差が大きく、ただただ茫然とするのみであった。

昭和20年8月15日、祖父が家族全員をラジオの前に集めた。玉音放送が始まると、皆泣き出した。私にはなぜ大人たちが泣くのか、良く分からなかったが、どうやら戦争に負けたらしいということだった。その直前に新しい爆弾が落とされて沢山の人が死んだということ、最初は広島で二発目が長崎で、これが沢山落とされたら、日本は全滅してしまうという話が出ていた。したがって、日本の敗戦は子どもの目から見ても明らかだった。

その年の4月、私は小学校1年生になっていた。最初は藤沢第三国民学校に通っていた。学校まで遠いので、近所の子どもたちが10人くらいずつ組になって登校したが、組同士の喧嘩がしょっちゅうあった。一番チビの私はそのような時、すぐ麦畑に隠れて喧嘩が収まるのを待つのであった。戦争が終わって、2学期が始まる頃、第三は遠すぎるので湘南学園に転校した。まだ戦争気分が抜けきらない頃、担任の女の先生が左の端の生徒から順番に将来何になりたいかを聞いた。男の子は皆、軍人と答えた。私も当然のように軍人と答えた。すると先生は優しく“もう軍人にはなれないのです。その考えは棄てなければなりません。”と諭された。そこで初めて、“ああ、戦争は本当に終わったのだ”と子ども心に実感したのである。

非常に厳しい生活が始まったのは、戦争が終わる頃からであったと思われる。とにかく食べ物がないのである。主食は少量の米と麦・サツマイモ・ジャガイモであり、それにアワ・ヒエ・トウモロコシなどを混ぜたもので、とても食べられた物ではなかった。肉類はほとんどなく、魚類は海が近かったので魚屋が多く、アジ・サバ・イワシなどが食べられた。米は配給だったので限られた量しかなくどんなものでも、どんなにまずくても、泣きながらでも食べざるを得なかった。

食べ物がないので、家の庭はすべて畑と化した。主にサツマイモ・ジャガイモ・葉菜類であるが、カボチャ等のつるものはすべて縦に伸ばし、屋根の上に実らせた。そのようにして耕地面積を稼いだわけであるが、屋根の上の作業はほとんど私が一手に行った。サツマイモは乾燥薯にして保存食にするわけであるが、干している間に一つ減り二つ減り、出来上がる頃にはほとんどなくなっている始末であった。

肥料は今から思えば肥料効果の薄い人糞と時々鶏糞だけである。人糞は便所から天秤棒で担いで柄杓で撒くわけだから、家中臭くてたまったものではなかった。母は銀座十字屋楽器店の二女で、全くの都会育ち。畑仕事などやったこともなかったはずであるが、毎日の畑仕事は母とお手伝いさん3人と私の5人でやったのである。しかし、畑で穫れるものは種類も量も季節も限られたものであり、微々たるものであったので、母はしょっちゅう自転車で買い出しに出かけて行った。現在の小田急線長後あたりまで、物々交換に行ったのである。自転車の前籠に私を乗せ、後ろの荷台には母が嫁入りの時持ってきた高級な和服を乗せていた。帰りの後ろの籠は、米・芋等食糧満載で、大変な重量になっていたの、自転車がよく倒れた。自転車が倒れるたびに私は道路に放り出されたのである。

畑仕事といい、自転車での長距離買い出しといい、お嬢様育ちの母が私たち3人の子どもと祖父、肺結核の祖母と叔母をかかえ、死にものぐるいで働き、必死に生きた姿は今でも絶対に忘れることはできない。

昭和21年、穴山家にとって思いもかけない農地解放という事件が起こった。穴山家の先祖は、戦国時代武田信玄の24将の筆頭で、御親戚衆といわれた穴山伊予守で、甲府の南側、御坂峠の近くにある小山、穴山城(現在では石垣しか残っていない)という城の城主であった。徳川時代は豪農として甲府の南側一帯を管理していた。祖父の時代には、生糸の生産を主に行っていたので、回り中桑畑で、沢山の小作人を抱えていた。しかし、明治時代の終わり頃、事業を手広く進めるため、東京牛込に出てきてしまったので、甲府の方は不在地主になり、政府に取り上げられるというのである。祖父は毎日毎日床柱に頭をぶつけて困った困ったを連発していたが、しばらくして母と妹を地主として甲府に送り込んだのであった。

私も小学校2年生の夏休みに1ヶ月ほど甲府で母と一緒に暮らした。大きな農家で、土間には牛や馬が何頭かいて、2階は蚕の飼育室になっていた。桑の枝の大きな束を大量に投げ入れると、ザーザーと蚕が葉を食べる音がして、まるで波打ち際にいるようであった。

田舎暮らしを楽しんでいるそんな折、祖父が息せき切って甲府にやってきた。父が中国から復員してくるのを我々に伝えるためであった。我々は急ぎ鶴沼海岸に帰って父を迎えた。父は痩せ細って、元気に出征していったときとは別人のようであった。父は戦争に関する話は一切せず、何を聞いても全く話してくれなかった。私が大人になってもそれは変わらなかった。戦地でよほど酷い目であったのだろうと想像するしかなかった。父は戦争へ行く前は安田銀行に勤めていたが、これからの時代は食料に係わりある会社が良いという祖父の奨めもあり、肥料を作っている三菱化成に勤めることになったのである。

甲府の土地は色々な苦労も水の泡、結局政府に二束三文で買い取られ、多くの小作人たちに分け与えられた。

戦後すぐ祖父に連れられて東京牛込の家を見に行ったが、見渡す限りの焼け野原に黒こげの金庫がぼつんと亡霊のように立っていた。この土地もただ同然で売り払われた。

小田急に分断された鶴沼松が岡側の土地は、祖父の弟に譲られ、現在歯科医院として孫が立派に受け継いでいる。

商店街側の松林だったところは、昭和27～28年頃多数に分譲され、今では50坪ほどしか残っていない。あと残ったのは、現在我々が住んでいる鵜沼海岸2丁目の家だけになった。

父が会社に勤め始めたことでわが家の戦後は終わった。

戦争によってわが家は多くのものを失ったが、その代わりに平和という何物にも代え難い大きな財産を貰った。おかげで戦後60年たった現在まで幸せな生活を送らせて貰っている。

それにしても、戦争とはいったい何だったのだろうか。戦争に行き行って亡くなった人、残された家族の人たち、爆撃を受けた人、家を焼かれた人、戦争は無数の悲劇を生んだ。私の世代は戦争の空しさを小なりといえども体験したほぼ最後の世代であろう。

今現在も、世界の各地で戦争やテロが行われ、尊い命が失われている。いつになったら人類は戦争を止めることができるのであろうか。(あなやま ゆういち)

海の家でダンスパーティー

内田 英一 (会員)

昭和21～22年頃の初夏、私が主催してダンスパーティーを開催したことがあります。助っ人は後輩の岸君、鈴木君(早大生)、バンドは斎藤兄弟のハワイアン・バンド(慶大生)。歌はハワイ帰りの渡部女史。当時としては学生バンドとはいえ、なかなかムードのあるものでした。

会場は鉄道省海の家で、無料で貸してくれました。

手書きのピラを何枚か作り、鵜沼海岸駅付近、横浜銀行、旧郵便局、一木通り、天金付近に「入場整理料 10円」と明示して当日の2週間前位に張り出したと記憶しております。

当日は大盛況で、終いには入りきれず、また、進駐軍の兵士がトラックにビール持参で乗り込んできたのには驚かされました。

入場者数は、多分200名位いたのではないかと思います。

場内は人いきれで暑く、見知らぬ婦人と薄着を通しての踊りは、学生の私にとっては大変に悩ましいものであったと憶えております。

演じ終わって会場を清掃し、慶応バンドその他の方々に応分の謝礼を払った残りが700～800円ありました。

これには私も驚きました。

何しろラッキーストライクが一箱20円の時代ですから、学生の身にとっては大金です。当時関係しておりました鶺鴒青年会（鶺鴒青会）に寄附したのではないかと思います。 （うちだ えいいち）

私の戦中・戦後

～思い出すままに～

有田裕一（会員）

私は1937年生まれであるが、同年代の人より、幸いにも戦争の怖さ、悲惨さを知らない方の部類であると思う。疎開の経験もなくこの鶺鴒に生まれ、鶺鴒で育った。勿論戦後のララ物資による学校給食は、最初から経験しているし、教科書も、藁半紙に印刷されたものを自分で切って本にしたこともある。戦争の恐怖を目の当たりにしなかったのは、我が家の西側の松林の中に町内の防空壕があったり、庭に掘った手製の小さな防空壕があり、空襲になると早々とその中に入れられたので、鶺鴒の上空で高射砲で撃たれたB-29が、4つの火の玉になって相模湾に墜落した話も見ることにはなかった。その後浜辺へ行って銀紙のテープを拾っておもちゃにしたのも思い出の一つである。

戦時中我が家では、町内の警防団の団長をやっていたので、店の一角がその場所になっていて、何かことがある度に招集がかけられ、集まった団員の氏名をどこかへ電話で報告していたのも耳に残る。また、シンガポール陥落のニュースがラジオで流れた時、皆で万歳していたのも、子どもながらに日本は勇ましいんだという意識を強くした光景だった。

我々は昭和19年の入学なので、1～2年の間だったと思うが、近所の小学生が一団となり、上級生が先頭で隊旗を持ち、二列縦隊で、歌だかかけ算の九九だかをうたいながら、第三国民学校（鶺鴒小学校）の校門の中まで順次入り、「南海岸第何班何名」と、到着を報告したものである。戦争の状況が厳しくなった頃、学校への通学（勿論徒歩）が危険となったためか、我々は南海岸クラブでの勉強となることがしばしばで、面倒を見るのも先生でなく、5、6年生だった。

その頃だったと思うが、南海岸の鉄柱でできた火の見も供出され、小田急線も下り片瀬江ノ島行き線路が外され、単線になった。線路の両側には溝があり、カエルやオタマジャクシ、トンボが多く見られ、時々はその山側にあった大きな別荘の池から水路を伝って逃げ出した魚たちもよい獲物であり、線路は子どもたちのよい遊び場になった。

恐い経験といえば、学校の帰り道、今の鵠沼桜が岡郵便局の前の道はなく、本鵠沼から海岸へ二つめの踏切から、新田道の交差する点（今の郵便局と鵠洋小学校の間の）まで、斜めの道であり、両側は全て畑で物陰はなかった。一人での下校中、急にP-51戦闘機が急降下してきた。思わず道と畑の間の溝に飛び込んだのであるが、弾丸が畑の中へズバズバ撃ち込まれて行く音が聞こえた。

そんな思いの戦争体験も、天皇の玉音放送で終わりを告げるのであるが、この時も家族が大事な放送があるからと、全員自宅の玄関の前に出て、店の斜め前がラジオ店で、その店の前へラジオを出し、近所に聞かせたのを、大勢で揃って聞いた。

戦後60年を経、多くの記憶が遠くなる中で、今回「鵠沼を語る会」の企画により、初めてこの時代の自分を記録する機会を与えられたことに感謝したい。

（ありた ひろかず）

私の八月十五日

河野 顕子（会員）

60年前の8月15日、私は神奈川県横須賀市秋谷で迎えました。小学校1年生であったこと、両親はじめ8人の兄弟姉妹が怪我もなく無事に終戦を迎えられたこと、家も焼かれず壊されずと、あの時代の都会に住む日本人の中では、恵まれた家族だったので、記録に留めるほどの事かどうか迷いましたが、8月15日の時報と戦没者追悼式が始まりますと、思い出される出来事がありました。

我が家の庭に、故障し動けなくなった（交換する部品もなくもちろん燃料も無い）乗用車が雨ざらしになって放置されていました。戦時下、金物は供出させられていたわけですから、車の存在を軍は放置出来ず没収するつもりで、15日の午前中、陸軍の兵隊さんが2名来られたのでした。（車を運ぶ車が軍にもなく、手

を焼いていたようです)。車の周りを上へ下へと見てまわり、父と話をして帰ろうとされたのですが、父が12時に玉音放送があるのでそれを聞いて帰るよう促し、応接間に入られました。

そこには、我が家のたった1台のラジオがあり、兵隊さんと父母、姉兄私弟(2歳)でその時を待ちました。

いよいよあの放送が始まりました。直立不動の兵隊さんが突然泣きじゃくり、大粒の涙を流して止りません。私はただただびっくり…。もちろん両親も涙を流して居りましたので、放送の重大さを感じ取ることが出来ました。

父は兵隊さんの前で、姉兄に戦争が終わったこと、「これから大変だけど新しい日本を作るために頑張るんだよ!」といいました。

そして、父は兵隊さんに「ここでお弁当(もちろん粗末なもの)を使ってお帰りなさい」とお茶など出したのですが、涙々で食事がノドを通らない感じで、車のこともそのまま、肩を落として帰って行かれた姿が今でも目に焼きついています。

そして、それから十数日後でしょうか、2階の窓から海を見ると、相模湾に米軍艦が次々と入って来ました。空襲警報は無くなっていたのに、真暗な夜の海に、マイクで交信する英語のやりとりの響きの不気味さ、恐ろしさ……これからどうなるんだろうという不安な気持ちを子供心にも抱いたものです。

あの時ご一緒した兵隊さんは、その後どんな人生を歩まれたのでしょうか。私にとって、終戦の日の玉音放送は、兵隊さんお二人の姿といつもダブって思い出されるのです。

(この あきこ)

或る没落した家の話

岡田 哲明 (会員)

私が生まれた昭和8年は、日中両軍山海関で衝突、関東軍熱河省に進攻、日本は国際連盟を脱退。ドイツではヒトラー内閣が成立した。国内では言論、思想弾圧が強化され小林多喜二は獄中虐殺され、野呂栄太郎が検挙された。第二次世界大戦の予兆という大きな社会変動のうちにあって、私の幼年期は平穏であったといえるであろう。

本家は代々、白木屋岡田徳右衛門（城山三郎『創意に生きる一中部財界史』の冒頭に登場する）と称し、美濃紙、麻を扱い、いわゆる「清洲越^{きよすこし}十人衆」といわれた豪商の一人であり、碁盤割の名古屋城下町に広大な家屋敷を構えていた。筋向いの分家が我が家で岡田良右衛門を名乗り、本家と同業であったが祖父の代には不動産収入など資産運用のみを行っていた。父は八高から東大を出て銀行員、母は市内の木綿問屋の娘で東京女子大卒、資産家のインテリ夫婦であった。私は、姉を筆頭に男四人、五人姉弟の四番目。五人には一人ずつ専任女中が付くという言わはお坊ちゃまとして育った。

昭和16年、そのような優雅な日々が一変する。小学校は国民学校と改称され、名古屋市立大成国民学校二年の二学期も終わる頃、太平洋戦争が勃発した。当初は威勢がよかったものの、やがて戦況はジリ貧状態。衣料、食糧、あらゆる物資が欠乏しはじめ「欲しがりません勝つまでは」という標語が流布された。

ついに敵機が本土上空を犯すに及んで学童疎開が始まる。縁故先の無い私は弟と集団疎開に行くことになった。昭和19年8月5日、大成国民学校の3～6年生男女212名は「中京学童集団疎開第一陣として警報下、防空服装も凛々しく小さなリュックサック、風呂敷包に生活の簡素さを偲ばせて…（中部日本新聞1944, 8, 6付）」母校を出発、三重県桑名郡多度、七取の両村へ向かった。

親元から離れての慣れない集団生活は困惑と悲慘の毎日であった。深刻な栄養失調、慢性下痢、蚤、虱の蔓延、親の来ない面会日の寂しさといったら無い。

昭和20年3月12日、名古屋大空襲。我が家には無数の焼夷弾が直撃し炎上焼失、14歳の長兄は防空壕で焼死。家族は母の実家に厄介になるが19日に再度空襲。岐阜の親戚に身を寄せる。8月15日、炎天下、私は七取村の法泉寺前庭に学友と整列し敗戦の玉音放送を聞く。疎開解散、岐阜の家族と合流。翌々年冬、17歳の姉は学徒動員の過労がもとで結核死。父は関西に単身赴任。

農地改革で所有の田畑は小作人の手に渡り、新田切り替えと急激なインフレに唯一残った自宅の地所も家族を養うため手放すことになる。昭和22年、やっと名古屋に10坪余のバラック住宅を借りた。以後、社宅暮らしが続き、父は退職まで、ついに持ち家を持つことはなかった。戦災と戦後の社会構造の変革は、350年続いた素封家を一掃した。没落の挙句、二人の愛児をも失った両親の無念は察するにあまりある…戦争憎し！

（おかだ てつあき）

東京最後の空襲の日の体験

小林政夫（会員）

昭和20年3月10日の下町大空襲の様子を杉並の家で眺めていたが、次は杉並方面がやられると思い、杉並の家には、父一人を残し、茅ヶ崎に疎開した。

5月25日急用が出来、午後3時頃茅ヶ崎を発って東京へ向かった。当時、国鉄では遠距離切符の発売枚数の制限があったので小田急を利用した。細かい時間の記憶はないが、電車が多摩川を渡りしばらくした時、空襲警報が発令され徐行運転となりついに経堂駅で運行打ち切りとなってしまった。

やがてB-29の爆音が聞こえはじめ焼夷弾の雨が降り出した。一束に束ねられ、途中で傘型にひろがり燃えながら落ちてくる様は、離れていれば花火を見るような状況でも、頭の真上で破裂した焼夷弾が、ザアアと言う物凄い音と共に落ちてくる時の恐怖は何とも言い様がない。次々に落ちてくる焼夷弾に追われ、焼けていない方へとがむしゃらに逃げた。

逃げ惑う先に油脂焼夷弾が落ち、破裂して火のついた油脂が飛び散り、周りの家々が燃え出した。火消し棒などでは手の施しようもなく、荷物を抱えた人たちが右往左往していた。私は火の中を通り過ぎるために、道に落ちていた毛布を拾い、防火用水の残り水をひたし、防空頭巾・上着・ズボンにたっぷり水を含ませ、火の中をかいぐって歩いた。

いつの間にか夜になっていた。初めての場所、しかも火災の中。道を聞けるような状態ではなく、勘を頼りに新宿と思われる方角にむかった。どこをどう歩いたのか幸いにも見覚えのある道に出たと思ったら東北沢の親戚の家の傍だった。付近は焼け残っていた。おにぎりとお茶をもらい、少し休ませてもらってから、自転車を借りて杉並の家へ向かった。

空襲警報は解除されたが、火はまだくすぶり、道には焼け焦げた家具などが放り出され通れない道もあった。途中見分けもつかないような黒こげの焼死体をいくつも見つけた。薄明るくなった頃、青梅街道にたどり着いた。ここから北側はるかかなたまでの焼け野原の光景を目にし、我が家もだめだと感じた。たどり着いた我が家は灰になっていた。幼友達が焼夷弾の直撃を受けて亡くなったことを聞いた。焼け跡に一本立ち上がった水道管から水がちょろちょろと流れ出しているの

が侘しかった。親戚に自転車を返し、何とか部分開通した小田急を乗り継ぎやつと帰ってきたが、そういえばまる一日一睡もしていなかったが気にならなかった。16歳だったから。茅ヶ崎の家では、母親と妹が、一晩中寝ずに真っ赤な東京方面の空を眺めて、心配してしてくれた。(こばやし まさお)

戦争に重なる顔

桑原玲子(会員)

私は東京淀橋で生まれ、昭和15年に鶴沼海岸駅前に引っ越してきました。間もなく鶴沼小学校(当時は藤沢第三国民学校といった)に入学。1年生のカバンは厚紙を固めたようなものでできていたと思います。靴はなく、下駄さえも薄くなったものを割れないように履いていたのを覚えています。朝は現在の鶴沼郵便局の前あたりに集まり、6年生が竹竿に吹き流しのようにつけた布に「第五分團」と書いたのをかついで、そのあとを1年までの下級生がついて学校まで歩きました。鶴沼小学校まではかなり時間がかかったと思いますが、主に、堀川のたんぼ道、麦畑、モモ畑の間を歩きました。校門を入り奉安殿に頭を下げて、教室に散っていきました。正門の右手はぐるりと桜の木。花のあとに小指の先ぐらいの赤紫の桜んぼがなります。それを食べるのは禁止されていましたが、男の子は禁を破って食べました。男先生は、怪しいのを捕まえると、真っ赤なペロを出させて“ゴツン”をやりました。低学年の頃は、結構のどかだったと思います。敗戦近くなってからも警戒警報はあっても、空襲警報は短時間で、すぐ解除になりました。夜空の遠くの方に米軍の爆撃機が飛んでゆくのを一、二回見ました。庭にかなり立派な防空壕を造りましたが、駆け込むことはありませんでした。

——父を監視する男——

終戦になるまでには苦しいこともいっぱいありましたが、特に私が受けたつらい悲しい日々を記したいと思います。私の父は淀橋で東京交通局のバスの運転をしていました。そして東京交通労働組合の支部長をしていまして、その労組から推されて当選し、淀橋区議会議員になりました。が、その頃の政府は、アジア諸国への植民地支配と侵略行為を繰り返し、戦争への機運が強まっていたときでした。“アジア諸国民と日本国民を不幸にする戦争をやめよ”というピラを労組が

中心となり、全国一斉にまいた—人民戦線事件—で逮捕拘禁されました。1年余の獄中暮らしの後釈放。藤沢・鶴沼に来たのです。が、その後もずっと監察付きということで、定期的に特高が見廻りに来ていました。私はその特高の名前も顔も今でもはっきりと思い出します。四角い顔、チョビ髭、ずんぐりした体つき……。『○○○』父と母は憎悪を込めてその名を呼んでいましたが、男が目の前に現れるや、下にも置かぬもてなしをしました。その姿の異常さは、子ども心に暗い思い出として焼き付いています。

配給の食糧は不足していましたが、農村出の父と母は、朝早くから夕方うす暗くなるまで畑仕事をして、イモ・麦・野菜などを作っていましたので、何とか食べ物はありました。そしてそれなりの一家団欒もあったのです。だが特高のその男は、いつもそれを壊しにやってきました。「やあー」と男が現れると、ゾーッと家中の空気が冷えました。上がり端に男が腰をかける、冬はそこに火鉢があり、かけてあるヤカンをずらして手をかざし、ぐるりと家の中を見回すのです。父は何をしていても仕事を中断して、その男の前に座ります。と、必ず父の横に母がピタリと座りました。

「どうかね戦局は——」

「まあねえ」と父。これ以上父が何かしゃべろうとすると、母はそつと後ろから父をつついて合図しました。“余計なことをいえば検挙される”からです。男はしばらく世間話のあと、きまって家の中を眺めまわし、「やあめずらしいものがあるな」といいました。母は「どうぞどうぞ」といって、その貴重品を涙をのんで包み、持たせて帰すのが常でした。男は子どもの私の目にも、家の大切なものをせびり取っていく憎い男でした。

——父の涙——

戦争が終わって男はピタリと来なくなりました。終戦の日からどれくらいたったか、ある日外から帰ると、部屋の中の父と目が合いました。「玲子」と呼ばれたその顔が、目が怒るでもなく笑うでもなく“思い余った”ような目でした。「今なあ、治安維持法と特高警察の廃止の放送があったんだよ」といい、国のやり方や特に戦争に反対した人間をこの法律で捕まえ、留置し、拷問したり、釈放になっても年中家に監察に来た、ああいうことがもうなくなるんだと涙をにじませて話してくれました。ぶっきらぼうな父でしたが、子どもの頃から質問したことにははいねいに答えてくれる父でした。

(くわはら れいこ)

私の戦中戦後史 軍国の乙女物語り

11歳～16歳までの少女時代

永井久子(会員)

日中戦争は始まっていましたが、当時国民学校6年生だった昭和16年12月8日朝、突然の大本営発表“本8日未明帝国陸海軍は西太平洋上に於いて米英両国と戦闘状態に入れり”子ども心に大変なことと思いました。真珠湾…その後連戦連勝のニュース、翌年2月シンガポール陥落旗行列提灯行列に国中が湧きました。しかし4か月後、6月ミッドウェイ海戦で日本海軍は壊滅的な打撃を受けてしまいました。私たち女学生は、何も知らされないまま唯一途お国のためと一生懸命でした。勝利の日までと歌いながら、学徒動員で海岸で塩作り、湿地改良の暗渠排水、風船爆弾の和紙作り、電波探知機の真空管作りetc.あらゆる作業に駆り出されました。工場は狭く、全員で作業はできないので交代で日赤へ行き、看護教育を受け、学校ではモールス信号・手旗信号の訓練を受けました。勉強どころではなく、敵国語ということで英語は勿論、外国文学を読むことも禁じられました。戦局は日々に陰しく、サイパン玉砕、マリアナ諸島は占領され、本土空襲が始まりました。私の町静岡も20年6月17日夜から未明にかけての大空襲に家も学校も工場も皆焼け落ち、従弟は焼夷弾の直撃を受けて即死し、猛火の中を逃げ惑って命を落とした多くの人がありました。一面の焦土と化した後に累々と放置された焼死体を目の当たりにし、60年経た今もその光景は臉に焼き付いています。死体には蠅が群がり、町内で唯一焼け残り戦災者食糧配給所となった我が家の土蔵で、私たちは蚊帳を吊って食事をしました。蠅は病原菌を運び、腸チフス・赤痢等の疫病が流行りました。父と姪が亡くなりました。食糧もなく、焼け残った衣類を野菜に替え、配給の高梁のむすびで飢えに耐えました。その間も空襲は続き、艦載機の機銃掃射に逃げ惑いました。広島・長崎は別格ですが、大都会に劣らぬ打撃を受けた地方都市がいっぱいありました。そして8月15日戦争は終わりました。しかし、戦後の窮乏生活は続きました。唯一の救いは、兄二人が無事復員してきたことです。後に結婚した主人は、樺太の国境にいて、敗戦後シベリヤに抑留され、極寒に重労働を課せられていました。水のような粥を掬ったという匙が今もあります。思えば小学校・女学校と一度の修学旅行もなく、唯お国のためと生きていました。そんな中、友人と楽しかった苦しかった辛かった思い出など、今は

皆懐かしいです。これが私の少女時代の一齣です。敵味方の別なく庶民に悲惨な
思いをさせる戦争は、絶対に阻止しなければと思います。 (ながい ひさこ)

落 書 き

中 島 明 (会員)

父母の実家のある信州松本に縁故疎開で過ごした終戦前後の5年間の出来事は
今でも脳裏に焼き付いて、終生忘れられない。

その中でも、心の片隅に埋火のように残るほろ苦く、恥ずかしく思い出される
ことがある。それは終戦後の20年か21年の、暑い夏が過ぎて涼しい秋風が吹き始
めた頃だったと思う。それは当時松本市立清水国民学校生だった私が、親友の村
田君と連れ立って、松本の中央にそびえる松本城に遊びに行った時のことである。

天守閣に登り、北アルプスと美ヶ原高原に囲まれた松本市街の素晴らしい眺望
を楽しんだ後、隣の小天守に移ってふと天井を見ると、羽目板にいくつかの落書
きがあった中に、「我こゝに登れり、〇〇〇〇」と氏名まで書かれたものがあった。
なにかこの落書きが堂々としていてかっこ良く見えて、ちょうど村田君が蠟
石を持っていたので、「俺たちも書こうよ」ということになり、窓枠に足を掛けて
天井の太い梁によじ登り、金釘流の字で「我こゝに登れり 清水国民学校〇年
一組村田〇〇、中島明」と書いた。下に降りて天井を眺めると、不思議と何か北
アルプスの山を征服した満足感を覚え、国宝という重要建造物に落書きしたとい
う罪の意識は全くなかった。

翌日は熱が出て学校を休んで、その翌日登校したら、村田君から「落書きした
ことが分かり、先生から叱られて、放課後消しに行くことになった」といわれた。
この日、どの先生からも私に対して何らのお咎めもなく、拍子抜けで、一人だけ
叱られた村田君にすまない気持ちで一杯であった。授業が終わって早速バケツと
雑巾を持って松本城に登り、落書きを消した。落書きをした時も、消しに行った
時も、城中に守衛や見張り人を見かけず、あちこちに落書きがある野放しの状態
で、国宝の管理どころではないという、終戦直後の異常な状態であった。

現存する城の中で、完成された形で残る最も古い城として国宝に指定されてい
る松本城に落書きすることは、軽犯罪どころではない罪として、両親共々厳しく

お叱りを受けるところ、戦後の混乱で何のお咎めもなかったのである。

私は現在たまたま、3年前より「藤沢市文化財保護推進委員」を委嘱されており、鶴沼地区の市指定文化財が落書きや悪戯で損傷されないよう定期的に見廻っている。皮肉にもそんな私が60年前に市の文化財どころか、国の重要文化財に落書きをしたことにただただ恥じ入るばかりだが、その贖罪として、平和な今こそ大切に、先人の遺した貴重な文化財を子々孫々まで伝えるよう微力ながら尽くしたいと思っている。

(なかじま あきら)

青い空と真っ赤な翼

渡部 かほり (会員)

4歳の私は静岡県榛原郡中川根村藤川というお茶畑の村にいた。東京で文部省の美術研究所に勤務していた父が、突然、宮内庁御料林の管理を命ぜられて家族4人(父・母・姉小6・私)で疎開と称して、昭和18年から知人の紹介で農家の離れの茶部屋に住んでいた。

藤川には鉄道がなく、今でもSLが観光列車として走っている大井川鉄道の川根徳山という駅を下車して徒歩で30分ほど歩いてしか行けない山奥の村で、大井川にかかる長い大きな釣り橋を渡らなければならず、陸の孤島であった。斜面に点在して家があり、世帯数は50戸もあったであろうか。

昭和20年6月19日。静岡大空襲の日のことだった。空は青く晴れていた。蜂の羽音のようなブーンという爆音。B-29の銀色の編隊が空高くキラキラと輝いて何十機も飛行していた。富士山を目指して毎日のように飛来するB-29は、静岡上空で90度方向転回して東京方面に向かうのが常だった。

この日は警戒警報のサイレンが鳴らず、村人は農作業の手を止めて、防空壕にも入らず空を眺めていた。防空頭巾をかぶっている私の手を母がしっかりと握って、母も私も空を見上げていた。

その時、2機の戦闘機が谷間の村上空に、低空で突然飛来してきた。あれよあれよと見ているうちに空中戦を繰り広げ、2機は体当たりし、バリバリという音と共に空中分解。2機とも翼がもげて真っ赤に燃えながら、キリキリ舞いしながら落ちてきた。

村人は固唾を呑んで見つめていた。翼に星のマークの戦闘機からは、2つの落下傘が大井川をはさんだ向こう側の村に降りた。日の丸のマークの戦闘機からは落下傘は降りて来なかった。眺めていた人々は誰も声を出さず沈黙していた。

あの時の青い空と爆音、真っ赤に燃える翼が脳裏にやきついて、映像も鮮明である。私はブルブル震えながら母の手をギュッと握りしめていたことだけは、60年たった今でもしっかりと覚えている。

この時、父は英語が話せたので、通訳を命ぜられ隣村に出向き、2人の米軍の兵士の取り調べに立ち会った。村人は捕虜の兵士たちを丁重に扱ったそうだ。終戦後10年以上過ぎた時、米軍の兵士の一人が村を尋ねて来て、村人の対応と通訳者にお礼を言う為に来日したという後日談を父から聞いた。

そして、この日が静岡大空襲の日であったことを知ったのは、私が成人してからのことであり、父がなぜあの山奥で仕事をし、家族が疎開していたのかも、この時知ったのだった。

二度とあのような光景を見たくない。決してつくってはいけない。

(わたなべ かほり)

銀シャリへの夢

綿谷克延(会員)

あの忌わしい太平洋戦争が始まったのは昭和16年12月8日、私が千葉市内小学3年生の時でした。朝早く臨時ニュースで大本営発表があり、我が大日本帝国は米英両国に対し宣戦布告を発したと父から聞かされた。学校でも朝礼で校長先生から戦闘状態に入ったと発表、当時の私たちは幼いときから大きくなったら兵隊さんになり、お国のために尽くすのだと教えられ育った。学校も尋常小から国民学校に変わった。戦争は当初機先を制し、真珠湾攻撃から大東亜圏内は連戦連勝、占領地区の島々に日の丸の国旗が地図に貼られ、提灯行列で歓呼の万歳が続いた。しかし、昭和18年頃か、物資節約に統制令ですべて配給制度が施され、欲しがりません勝つまではの信念に老若男女は増産体制に入り、赤紙による召集令状が頻発、加えて志願で出征軍人が毎日駅頭で万歳三唱、天に代わりて不義を討つと歓呼の波が続いた。私の兄も大学卒業と共に令状で高射砲隊に入隊、昭和19年頃から戦況極めて不利になり、連日空襲警報発令、燈火管制が発令されても軍国教育

で日本は神国であり、元寇の乱の時のように日本には神風が吹き、必ず勝つと教えられ、信じていた。食糧は日増しに逼迫し、麦飯の中に芋、大豆が大半となり、おかずはいらないから銀シャリを腹一杯食べたい夢を子ども心に思っていた。

学校給食は味噌汁のみで、弁当持参できない生徒もあり、給食もやがて中止、空襲は連日熾烈を極め、昼間の空中戦もしばしば垣間見られ、米国人が落下傘で降下逮捕、目隠しで捕縄連行されるのを見た。昭和20年3月国民学校卒業は、アツ島・硫黄島の玉砕と東京大空襲焼け野原などの余波で卒業式の記憶は忘れた。中学通学も比較的体格の良い私は、学校から航空学校へ行くよう指示され、試験当日は連日の大豆飯に下痢気味で、体力テストで若干粗相した苦い思い出が忘れられない。指名中4名位合格した。4月から入校。寮設備がなく、毎日戦闘帽にゲートル、軍隊服姿で約3km位を通学した。上級生の姿が恐ろしく、教官は軍刀を下げ、毎日訓練。失敗は一蓮托生で厳しい懲罰を科せられ、1年生は敬礼に終始した。空襲は益々激しくなり、学校を狙う機銃掃射の弾は目前に穴の列。P51グラマン機の操縦者が低空飛行で撃っているのが見え、半ば戦場体験。しかし、昭和20年7月7日夜半、千葉市街地はB-29の焼夷爆弾攻撃で航空学校も完全焼失。見渡す限りの焼け野原。避難壕で苦しみを耐え、出た道路には真っ黒い焦げた焼死遺体は烈火を物語る。悲惨なありさまは未だ忘れられない。学校は必然的に解散。我が家は父の生まれ故郷、栃木の田舎村に引き揚げ、疎開生活が始まるも、農家とても銀シャリの夢は遂果て得ず。雑穀生活は戦後もしばらく続いた。

(わたや よしのぶ)

特 攻 隊

榛葉敏行(会員)

「遂に神風特別攻撃隊攻撃員となる。全人生残り30日にして人生駆足に入る。出撃を前に自分は一個の人間である。偉人でもなければ愚人でもない。善人でもなければ悪人でもない。あくまで一個の人間である……………」

これを読んだ時、私たちの二、三年上の人たちの多くが国により自らの命を私たちのために死んでいったことは、何ともやるせない気持ちで一杯になった。当時、国民皆兵の時代であったから、健康な人であれば兵隊に行くことは当たり前

で、死することはある程度やむを得ないことと想っていた。陸軍は幹部候補生、海軍は予科練と、中学3年の頃より多くの若者が志願した。特に予科練は、“若い血潮の予科練の七つ釘は桜に錨 今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にや がかい希望の雲が湧く”と血湧き肉躍るような歌であった。入隊後は血のにじむような訓練で、下士官がバットを持って見守っていた。辻堂に海軍用地があったため、商店街を隊列を組んで走る姿はよく見た。落伍者が出ると下士官のバットが飛ぶとはよく聞いていた。このような厳しい訓練は、すべて戦場に於いて組織で行動しなければならなかったためであろう。これを卒業した人たちや、さらに最高学府を半ばにして学徒出陣した多くの若者が戦場へと送り込まれたのである。

ミッドウェイ海戦、台湾沖航空機戦で多くの搭乗員を失った海軍は、着艦訓練にも1回に3～4機の事故と犠牲者を出す訓練で、死ぬ位なら爆弾を積んで敵艦に体当たりする方が良いのではないか。これが特攻の考え方である。私たちの年代には、命令ではなく、自らの意志で100%の死を選んで戦場に飛び立つ姿や、ニュース映画で見る特攻機が燃えて敵艦に体当たりする姿は、ただただ頭が下がるばかりである。さらに特攻回天がある。世界に誇る93式魚雷を、改装した長さ14.7m潜水艦に6基積んで敵艦近くで母艦と絶縁され特攻する。

このようにして多くの若人は太平洋の華と散ったのである。せめて私どもは生涯を通じて戦死した多くの先輩に哀悼の意を表したいと思う。

(はしば としゆき)

鵠沼から高松へ

細谷 縫子 (会員)

60年前、鵠沼6803番地に住んでいた頃、松の木も今よりずっと低く、二階から眺めると、遠くまで見え、富士山も見えていました。辺り全体にのんびりとした空気が漂っていたと思います。私が3歳くらいだったので、当然だったのでしょうか。そんなある日、二階の出窓で外を眺めていた私達(母、妹、いとこ)の目の前を松の木すれすれに、飛行機がダダダと大音響をたてながら通り過ぎました。叔父が「危ないじゃないか！」と怒鳴りながら飛んできて、私達を納戸に頭から入れました。そのパイロットは大きな目がねをし、白いマフラーをなびかせ

後方の人が機関銃を撃っていました。鶴沼は危ない、とのことで、四国の高松に疎開しました。高松で空襲に会い、高橋（たかはし）の下に祖母、母、妹、女中さんなどと身を隠し川の水につかりながら、遠くの夜空に高松が燃えているのを見ました。花火工場に火が付いたようでした。お寺から逃げていくお坊さんの袈裟が風になびき袖が大きくふくらみ、杖や編み笠がオレンジ色の炎を背に真っ黒のシルエットになっていたのが目に焼きついています。シュルシュルという焼夷弾の音、常に上空でゴーツという不気味な飛行機の音など、今も耳に残っています。母に手を引かれ、高松の特攻隊飛行場へ、母の従兄弟にお別れに行ったこと。お兄さん方が可愛がって下さったこと。宿舎の二階から流れてきたえもいわれぬ美しい音色、それがギター之音であったことは、ずっと後で知りました。幼いながらも淋しい空気を感じました。母に聞きましたら詫間海軍航空基地とのことでした。三人乗りの飛行機とのことで、従兄弟の友人、東大生の田中中尉は、「我これより突入す」と編隊を組んでいた従兄弟に電信を送り突入されたとの事でした。母が2人に白い絹のマフラーを送り、それを持っていらしたとの話です。従兄弟はエンジントラブルで奄美大島に不時着し、終戦を迎えたそうです。アルバムの田中中尉さんを見ると胸がつまります。沢山の犠牲の上に今の私があることを忘れてはいけない、申し訳ないと思いつけています。そして2度と戦争が起きないように訴え続けて行こうと思います。

(ほそや めいこ)

焼夷弾の雨の下で 一横浜大空襲体験記一

六 浦 美智子 (会員)

昭和20年5月24日午後10時過ぎ空襲警報が発令され、25日午前1時過ぎかと思う。上空に米軍機から落とされた火の塊が分散するのを近所の方と眺めていると、「焼夷弾だ」との声に、バケツを取りにと動いた瞬間、体中炎に包まれた。その熱の激しさは、命の終わりかと思った。油とゴムが混じり、火となって体中に燃え広がり、余りの熱さに防空壕でもみ消そうと壕へ走ったが、扉が閉められていた。顔に燃える油脂に声を出すことができず、「そうだ、防火用水だ」と気付き、用水に飛び込むと、瞬時に火は消えた。家の中はごうごうと燃えさかり、その中に祖父、今日か明日かという死期の迫った祖父がいる。傷んだ手でバケツを持ち、

水をかけると小さい火は面白いように消えた。火傷した顔が火にあぶられてヒリヒリと痛み始め、家から逃れてしまった。空を見ると火のついた焼夷弾が揺らめいて落ちてくる。米機の進行と反対方向の火の见えない方へとボトボトと歩いてしまった。丘の上の小学校(私が卒業した)は、広い広い麦畑に囲まれている。たどり着くと刈り入れの終わった畑に沢山の人々が避難していた。学校は火焰を上げて燃えさかり、防火壁が無用に起立していた(後で聞くと、駐留していた軍隊の馬が、火に驚いて駆けだしたとのこと)。夜が白みはじめると、私の状態に気付かれた人々により、リヤカーに乗せて東神奈川駅近くの市陽堂病院へ運んでいただき、家へも連絡して下さった。

入院して5日目の5月29日、眼が傷つかなかったことにホッとしたのも束の間、空襲警報が発令されると同時に「ザーザードカン」という音と共に病院に焼夷弾が落下した。「歩ける人は各自逃げて」と大きい声が聞こえ、母は布団1枚、私はスリッパのままで、火のない所から所へと逃げ歩き、とうとう力尽き、家屋の疎開跡に座り込んだ。

母と焼け死ぬと覚悟したが、周囲の家屋が焼けて熱風にさらされ、焼けた建材、トタン、火の粉が飛び交う小さい空き地の20~30メートル先に、川とはいえぬ泥川があるのに気付いた。焼け死ぬとしても今の状態から少しは楽になりたくて、川へ滑り降り、膝までの水に肩まで沈むことができた。昼というのに沢山の家の燃える煙で暗闇になり、兩岸の家屋が焼け落ち、川に崩れ落ちはじめた。沢山の人々が泥川に逃げ、川幅一杯になった。一番終わりに町の警防団の年輩者3人がバケツを持って川に入られ、泥川の水を火の粉や焼けた落下物をものともせず川幅一杯の人々に「頑張れ、頑張れ」と声を掛けながら浴びせかけはじめた。これだけ頑張ったのだから、戦争にはきっと勝つと17歳の世間知らずの私は、立ち上がる気持ちで一杯になった。何かもう今日一日が終わったような時間に思えた。後で発表されると、五百何十機で1時間半の空爆だったとのこと。火と煙が収まり、明るくなって岸へ這い上がったときは、30日の朝のような気分だった。川の中の人々も皆無事で、ドブネズミ状態で地面に出た。しかし、私の眼は再び見えなくなり、スリッパはどこかへなくなっていた。母が川の端から不揃いの下駄を拾って、家が焼けてから借りたアパートへ歩いて戻った。焼け跡には逃げ切れず焼け死んだ人たちの死骸もあったことだろうが、見えぬ目には見ることもなく済んだのは幸いとも思う。

あれから60年。川で活躍して下さった3人の警防団の方々もすでに亡くなら

れたと思うが、何かの折に懐かしく思い出し、人々に秘められるヒューマニズムをその3人の方に覚えさせられていただいている。 (むつうら みちこ)

戦争の思い出

矢田 健爾 (会員)

私は1933年昭和8年の東京生まれ。

太平洋戦争が始まった時は藤沢に引っ越してきて、小学校2年生だった。それから3年生の頃は軍国主義教育が盛んで先生から「びんた」をもらったことがある。私が級長で、皆を整列させておかなかつたという理由、だから納得できない上に、大人が思い切り、ひっぱたく、その力は子供には、痛さと響きが限度を超えた。藤沢本町小学校である。当時は第四国民学校といていた。どこの学校にも奉安殿があり、教育勅語なるものを収めてあり、学校の儀式の度に校長が白い手袋で恭しく取り出し、朕思うに、我皇祖こうそうとのたまつた。子供は下を向いていなければならない。歴史教育といえは天皇の系図を暗記するぐらいのものだった。4年生になったら、郊外から材木を担いできた。学校用の薪運びである。5年生になると、いよいよ食料がなくなり、母親が着物を持って善行の農家に買い出しに行っても、今日はこれだけだったといつて1籠の茹でた小粒のジャガイモがその晩の夕食だった。子供5人の家族で、足りる筈もない。その内、母が「情けない」といって泣きじゃくつたことを、昨日のようによく覚えている。父は「外に食べに行こう」といって子供を連れ出したが、玉半ではうどんを粒にしたようなご飯しか食べられなかつたが、当然のどを越さなかつた。学校では“欲しがりません、勝つまでは”と教えられていた。いよいよ戦争が激しくなり防空壕に飛び込んだ。どこの家でも穴を掘っていた。敵機襲来というサイレンで学校も早引けだったが、途中、一本松の大ガードの所まで来た時、頭上に江ノ島を目印にグラマン戦闘機が低空飛行で飛んできた。走る子供めがけて兎でも撃つように機関銃の掃射、機上の兵隊が見えた。急いで途中のトンネルに駆け込んだ。線路に跳ね返る弾の音が鋭く響いた。後で聞くと神戸君という友人がこの時撃たれて一生杖を突いて歩かねばならなかつた。横浜空襲の時ではなかつたかと思うが、夜空

に B-29 がサーチライトに照らし出されて浮かび上がった。細長い胴体と 4 個ずつあるエンジンがはっきり判った。高射砲も届かない。下の方で花火のような白い煙が上がったが、命中することはなかった。

そんなある日、父親が出先の岡山で被災したという。どういうことかといえ、親戚の引越し手伝いで、焼夷弾の直撃、火のついたオイルをかぶって全身に大やけど、近くのドブ川に飛び込んで火を消したそう。混んだ夜行列車に乗り、大阪経由で見舞いに行った。大阪に差し掛かった時には、空襲で夜空が真っ赤に燃えていた。列車は動かない。やっと病院にたどり着いたが、父は全身包帯だらけでミイラ人間のような感じだった。治ってからも、鼻や耳が解けて皮膚は赤くひどい人相だった。その時以後、子供たち 4 人は祖母のいる尾道に預けられて学校も行かずに、毎日兔の草取りだった。食事は鯉節の粉と麦ご飯が何よりご馳走に思えた。広島に新型爆弾が落とされたという話が伝わってきた。ラジオの重大放送で終戦になったことを大人から聞いた。それから田舎で衛生が悪かったのだろう赤痢が流行って避病院に入れられた。やっと治って藤沢に連れ戻されたが、親たちは尾道から豊表を取り寄せて売った。下駄や干し柿を仕入れて、商売したりで子供も売りに行かされた。鶴沼の金持ち風の家や、横浜野毛の商店街の路上だ。姉と二人でよく売れた。食うものといえばもろこしの干した粕、干し杏とかが配給になった。しらみが髪の毛についたといっって頭から DDT をかけられた。藤沢駅に MP がいて試しにギブミーチョコといったが、吸いかけのタバコを寄越した。ふざけるなと思って、以来試さなかった。絵描きだった父は PX で絹こすりという肖像画の商売を始めたが、夜中まで描いても、そんなに稼げなかった。中学に入ってから、帰りに焼き芋を食べによく行った。アイスキャンデーを食べに松本屋にも行った。絵を描き始めたが木炭がなかったので、消し炭を使って見たが上手いかなかった。横浜に絵を描きに行ったが、まだ焼けビルが残っていて、焼けた赤く錆びた鉄骨がむき出しで崩れていた。食い物は箱で作る電気パンしかなかった。開米の玄米をビール瓶に入れ、竹の棒で交代に搗いて、やっとなご飯にありついた。竹の棒は糠でびかびかだった。戦争中よりはましだったが、ろくなことはなかった。朕はたらふく食っている、汝臣民飢えて死ぬという時代である。戦争を始めた天皇は全国を回り、手を振って歩いた。戦争中はお召し列車を見ただけで目がつぶれると教えられていたのになあ。そっと見たけど、目は未だにつぶれない。教科書が間違えていたといっって墨をぬらされた。子供心にも戦争はこりごりだと思った。

(やだ けんじ)

編集後記

- *今年、2005年は太平洋戦争終結から60年、鶴沼を語る会創立から30年という節目の年に当たります。そこで、表紙に大書したように大特集を組んでみました。題して「語り継ぐ戦中戦後の記憶」
- *幸か不幸か、当会の会員は圧倒的多数が戦中戦後の記憶をお持ちの世代です。今の段階でこの企画を立ち上げなければ、永久にその機会が失われかねません。
- *冒頭の2編は、編集側から「是非、この内容でお書きください。ページ数に特に制限をつけません。」と依頼したものです。その他は、各自1ページずつという制限で内容については自由ということで、全会員にお書きいただきよう呼びかけました。結果、半数を超える35名(冒頭の2編を加えると37名)の会員から玉稿が寄せられました。
- *1ページずつという制限をつけたのは、全員にお書きいただくとそれだけで60ページを越えるからです。結果として、半数強でもほぼ60ページに収まりました。
- *それは、寄稿者の約半数が、勢い余って1ページには収まりきれなかったからです。そこで今度は、どういう順序に並べるかに苦勞しました。当初は年齢順にするか五十音順にするか迷っていましたが、そのまま並べると体裁が悪いと思い、1ページの制限を忠実にお守りくださった方の分は五十音順とし、はみ出した方については後半に体裁を整えるために順序を前後させながら並べることにしました。
- *記憶違いなどで、史実と矛盾すると思われる記述も見受けられますが、正確な歴史書ではなく、思い出の記ですので、そのままにしました。
- *今回は、予定通り9月30日に発行したものに多大な決定的ミスが見つかり、再発行に踏み切りました。この間、会員の皆様方には費用・期間その他諸々のご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。
- *次号は、「鶴沼を語る会創立30周年記念号-その2」として、語る会30年の歩みの総まとめと、創立30周年記念事業の紹介などを盛り込んだ特集を組む予定です。10月15日から3か月間開かれている「鶴沼ゆかりの文化人展」で取り組んだ中身は別冊にする予定です。 (渡部)

『鵜沼』第 111 号・91 号
合併特別号

令和 2 (2020) 年 8 月 15 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>